重

南前編

ム1
4894
1

量地指南序

夫生兩儀清濁既分覆者為天偃者為地其間相太無數大塊也往古聖人仰俯觀察而垂其象能使天下後世無一

# 量地指南序

夫生兩儀清濁既分覆者為天偃者為地其間相去無數大塊也往古聖人仰俯觀察而垂其象能使天下後世無一



昭和廿一 十二月 六日 購求
4894
1

物不得其所以振起
其英靈而人本乎天性
莫不因其己知之理而
益窮之以求至乎其極
者也友人訥言携南勢
源昌弘著述三号以置



几上余繙視則與地規
矩術之圖說名曰量地
指南能使國字啟蒙
便同志之意至為精密
盍請序之雖余未嘗學
即凢天下之物而窮其

理格其物之階梯而有
遐棄焉乎哉占小善者
率以錄名一藝者無不
庸況於勞者乎立霆聚
螢刮垢磨光惟以此一
盤面措坤軸於夷險一



平之安是与離婁督繩
公輸削墨而不濶者相
似也庶幾矣一善其工
用二厚於故舊欲成
人之名々微遂落毫于
其端如此

享保壬子冬至後二日

貝南穂重英識

享保十七年壬子仲冬壽梓之



量地指南　序例

一 夫量地術の興る事は三代のいにしへ伏羲氏の一畫線画より起りて後世に至りて道意へ官失して小学の法頽廃して此術も方法て我朝紅毛の國の入しものや接るに紅毛の人常に南蛮と交易して萬國と来往し西洋中に漂ふ國々漢に於て星学に達し地理に委しくて術術ふしてはいへとも此術を易ふし測とあいわれ。みふるの今此術者世界に流布なる事もくしと我朝の人の多くは術をしらすといへども。こち源を指して中華の正法至の遺術なり。

術の巧拙事ハこれあらん。世人此理を不極ミおもひて
初心深の名鋒なりとおもひて嘲て是を其本を見ず
悟てり。学者能ゝ分るべし。

一　偉なるかな量地術の徳たる事也。不昇して天の高き
高きを測り。不至して地の厚きと廣きを察し。不入して
海の深きを度る事を知る。故に山谷河原野丘陵城営
宮室此類を高遠廣狭を察る事なり。是等のたぐひハ
險く嶮上の物を指すべし。或ハ日本の里数を測て
唐土を遊り。或ハ滄海に舟船を浮て方角を圖し。或ハ
諸侯の遠近を尋る事を明かにす。或ハ彼此の高低を
知りて水道を鑿くのたぐひ。皆是此術に因らずと
事成し。其器の用ゆる所のもの八至遠なりとも能く遠きを指す。



これらにのぞむものハ至極なりとも悟を盡ん。誠に
要は妙術にあらずや

一　世に量地の術数多ありといへども大旨は
五種なり。一ツに云盤鍼術。二ツに云量盤術。三ツに云渾発術。
四ツに云算数術。五ツに云機械術是なり。もとも数法の高卑
優劣ありといへども然。学者是を選ていかゞせん。紅毛鍼盤術ハ
中華および日本の正法にして是の甲たり。紅毛流量盤術渾発
術ハ和蘭紅毛国の新法にして径捷なり。紅毛流算数術ハ
数学家流の近遠にして迂遠なり。紅毛流機械術ハ工巧
本宮の所為にして是の乙なり。皆それゞ奥義ありて
一致なりといへども其しかしこれを術もまた一ツの理
ありハこれはの八こゝに事あり。学者一術を好むといへども

一　此算を学ぶにしても。補に他の術を兼ざれば是が参攷の益なし。依て古今諸種の作法図説を挙て撰録し

此一編は紅毛伝来の術を約めし。中華正統の法術蘊奥を尽し遺さず。是ぞ凡家に秘する所を普く世に開くところと作し。故に家に蔵して此に新正し。僅か諸説に拠て量地指南と題し。前後編五巻

或問二十条前の三十条は量盤術の入作図説後の二十条は渾発術盤鍼術（盤針術は世に行はるゝ規矩元法の術　南蛮流の規矩）の二法を述ぶ。或問二十条は遺漏を補ひ且算勘術の雑術を載て学者此書を熟読してのち量地の法やゝあきらかなるべし

一　ますます此書を編集するの大略は袁了凡広高原の諸術で



数に盈て覧に便りを志すの中も聞かなければ不朽の事あるのは易術を前もつて雑術を学ずしてより。あらかじめ算術に熟せざれば其法および諸術に熟せる事あるものは。先学習するに或は頭もかしらより初学を導くの深切なかよりして不通に数の術繋説を為る事あり。覧者これを以て一途に偏の備録をのせ置くなり

一　初学の士此書を学びて其首より巻尾にいたるまで。編図に依りて逐一に此術を研究せば親しく事をなさずして得るべし。唯其中前後の論説に拘るべからず。其理の窮る所を知るべし。又此術

の玄妙をきくと隠として一向月よ述き有畧に通と
うまね精をはかりし。術積の功を励べし。不測して
たゞちに同理よりて推わしく論をはいたづらに労
して功なきものなるべし
一 近来世上に携る人の測目。ほりし捻ぜるまじき
愚者の胸に得ちかく記す。故に今この図纸を忘かく測るの
是を碍心し。新に此標目を定む。近ごろ規を事ば
至ては世に事と粗一枝あるべし。志らば則其法を
蔑ふりに鋭ることを立る也。我執ありていかでりて之。
全く実の実あり。俗名ぞ不覚を自己へき擬是己
不顧ところとやる人はこればりしく道に廟の
るくと壊るゝ今やむ事を不悟ところなり



一 法術の中に本理に志すべきは術学ありて生じ
略術ましれば理術にて速に解すことのあり。術学
然るまで術はこの本理を措く。この男女と自ることも
同前し。識者は諒め本理に播るべし。論学は先川を
略事に至る。此の如く日ば是れ徒らに測り見る
又は得る本理に従がふべし。不致して急に始めは
疑りしくもの。恐らくは従うべし
一 そもそも量地の器械五術。算針術、歩算術、揮発術、算数術
必要割書ありて、香器新規倒にこを彙類するなり
或は流儀と称して墨縄を用い。或は図て編して
私意を加へこの制作つかるなし。そ不規則千をとりて
算に学の未熟く是れをおめぬ是を辭むしき日本に

皆おのづから自然の規矩にかなふ。今まで近国の
測量を旨とし秘密の器を擧て其術の秘事を
図して示す。五術の器械としてハ一條の糸又ハ竿やすく手に入らぬものなれバ今ハ書て此術の初心の為をとり
臍斎先生これらの術を謝してかれこれ足りぬべし。猶又
学して其地を需るに益削し

一 近世紅毛国伝来の量地ある流門に秘訣ありと称す。
あらく知るを奥ありと為し或ハ其伎を実にし或ハ
其器を新にして世を惑し人を誑す。又量地の
術千差万別事業数多ありといへども大畧算
其底蘊に至りてハ一理なり。然れども其術是非
分明ならず其術の功用さまざまにして混雑しく迂直優劣
の得失あるべし。しかれば此書の旨を熟味すべし。此



法の理に通暁せバ大阪諸家の奇術妙法と称する
ものも其ことは口授を不待して自ら得べし。諸家の
浮説にまよふ事なかるべし

一 量地の術は理と事と二様の器あり。理ハ円通に
談じ尽し目に偏らず窮むべし。事ハ形器を主として時に
よりて損益あるべし。量地の要ハ事と術と
人に由る。故に今人の技は只に応ずべきにしたがひて
学ぶ世人の識る所にあり。然るに予今此著に器識
をとふ。恥孤陋寡聞を不揣。諸家の器械を集て
と略し伝へる踈密を挙て巧拙を論し
其今法と古法の学術を定め
失誤実験をもとして地の妙を得んことを希ふ

こゝに梓に寄するにあらはしてもて諸友の需むる所
志すところ也。再三固辞すれども拠所なく終に人の
為の指揚の嘲哢を待のみ

享保十五年庚戌春三月上幹操筆於
東都南芝之神武館村井大輔昌弘

# 量地指南巻之一

南勢　處士　村井昌弘編述

## 量盤術始計

### 先量作法の事

先量とハ。未だ本術は勢ざる以前に。空眼（俗にこれを目ばかりと云）をもつて。本座より目的まで遠程をはかり量て。或ハ幾里幾町或ハ幾十幾間と其大槩を豫じめ知るを云。かくれおほくちかく。遠近廣挾高低浅深ともに。目的までの法程を先量て。然うしてのち本術を勤るときハ。いはゆる差異出來る事なし。此法は不用して譲る本術を為ときハ。或ハ十町をを一町と心得違へ。或ハ十里をを一里とするをに誤る類ひこれあり。むかしハまゞ甚しき心得ちがひありあやまりハ有はじさるなれども。是ハ先量の便利莫大なる事を。初學の人ハ知らざるべからざる為の分くべかり

益量地の術ハ此法なる事。たとへバ筭数の學に。位を見るといふ事あるが
ごとし。先學に位を見る事不能ときハ。乗除作法のごとくなして。其術
大成せずといへども。幾千萬を乗せざれバ。幾億兆の増益する事をしらず。
幾百千に除せざれバ。幾釐毫毛と減少する事をしらず。量地の術もまた此先量
の作法をしらざれハ。数のごとくして本術大成せずといへども。
幾里町幾間尺と云ふ事かまへる事かくし。よく察すべし。故に此先量れ
法ハ柱礎として本術を勤る事。ゆゑよれ要数なくせり。
開除の間數も是に本づく定む。開除の間数ハ定る作法。くはしく下の章にあらはすと。又火急
なる場取なくハ。本術を勤る眼なき故に。此法のみをもちゆ。
間町を量る事ゆへ有事あれバ。尤もはかりしらふさるべきなり。
されバ先量の作法ハ。常々道路往来の歩行にも遠近廣
狹を試み。山谷遊覧の眺望にも高低淺深を察し。平生に心を
用ひ不断に眼を属るときハ。自然に其事に熟達するもの
なり。又此法に視觀察といふなしひあり。先量初中後の心
ばへをいふ。抑此三字ハ經典に出て言やをうしとといへども。



今此法に假用するこゝろなりといへども。視といふハ兎角の思慮
かゝはらず。即座の目量をよく知るを云。兎角の思慮にかゝはらずとハ。思案分別
の法意を用ひざるを云。即座の目量とハ。上面一遍の目づかりをよく
知るを云。故に此法容易の事にあらずといへども。無我をもつぱらとする故に。
品により事によりて。觀察の二法にも超る
便利あり。常々執行の心をもち尤太切なるべし。觀といふハ此耶の由来を
探り。彼耶の校量を詳かにして知るを云。此耶の由来とハ。目的本座ホの由て来る所以を探る
を云。彼耶の校量を詳にするとハ。他耶の遠近に此地の法程を校
量るを云。故に此法ハ視法よりも其こゝろやゝぬりしと知るべきなり。察といふハ
地利の善悪を考へ。天文の是非を察し。
深く心を附て知るを云。地利といふハ。高深廣遠險難平易ホなり。
天文といふハ。晴天陰雲雨後雪日ホなり。故に此法ハ。
視觀の二法に超て甚だ心ぬりし。よく此察の法を
會暁するときハ。遠近廣狹高低淺深。本術を不待
して。大畧あらかじめ知るべし。学者怠らんや。
されバこそ此三法ハ。先量の樞要なり。能これを
ならひさしかざるときハ。毎術其的中

空眼之圖

さかる也し。若まる本術にてもまゝく差異ある事ありといへども。此法に不熟ば規矩となして糺正すべきものなし。量地を學ぶに志あらんものは。造次にも顛沛にもまづ此作法を心ろえなしぬべし

## 精眼作法の事

精眼とは目的を定ることを開地を求ることを。又見込見通再見見返すことを（目的を定め。開地を求る作法。また見込。見通。再見見返の事。下章にくはしくす）精しくして見違なき事なからむ事を云。是又先量の一方なり。或は廣原茂林。或は高山窄道。或は海面河上或は村里田畑などの地によりて又期によりて見誤る事おほし。且清明の日。陰雲の日。炎暑の日。嚴寒の日。又は雨後雪日。春夏秋冬などの時によりて見違ふる事あり。其外日を前にし日を後にし風に向ひ。風を背にし或は真向斜向直上直下など多く心得多し。いづれも其なしひ功用なれども。人々の眼力一定ならざれば。故に一般の教諭は施しがたし。平生に空眼を試し習ひ。其己が得る所をあきらかに目馴るゝ事肝要なるべし

精眼之圖

惣じてかくのごときの作法。筆端に述がたき事ども多ければ。爰に志深からむ人には面授すべし

## 目的を定る作法の事

目的とは本座より今求る所の目印を云（目的の図下に記す）是遠近廣狭高低浅深を知ることを第一とする作法なり。扨此

目的を定むる事ハ。樹竹巌石堂社丘垤何にかぎらず。彼所の正面に在てはなはだしく目だつべき物が吉とす。勿論本座（本座の事下に委し）より見込（見込の法下にあり）のよろしきが専要とすべし。兼てまた開地（開地の事下に委し）ありて見返（見返の法下にあり）を為すに障りなく彼目的を見返し安からん事をも遠慮すべし。もし開地にて目的を見返す事疑しき時ハ。かならず其術に差異出来るものなり。或ハまた廣原平野田畑海濱のごとき曠遠の場所にて。其近邊に目だつべき物なくして目的になしがたきときハ。空の目的（空の目的といふ事いさいあとにあり）を用ゆべし

本座を選ぶ作法の事

本座とハ其所より目的を眺視て遠近廣狭浅深などを知らんと欲する場取を云。（本座の図下に画を）扨此本座を選ぶ事ハ。

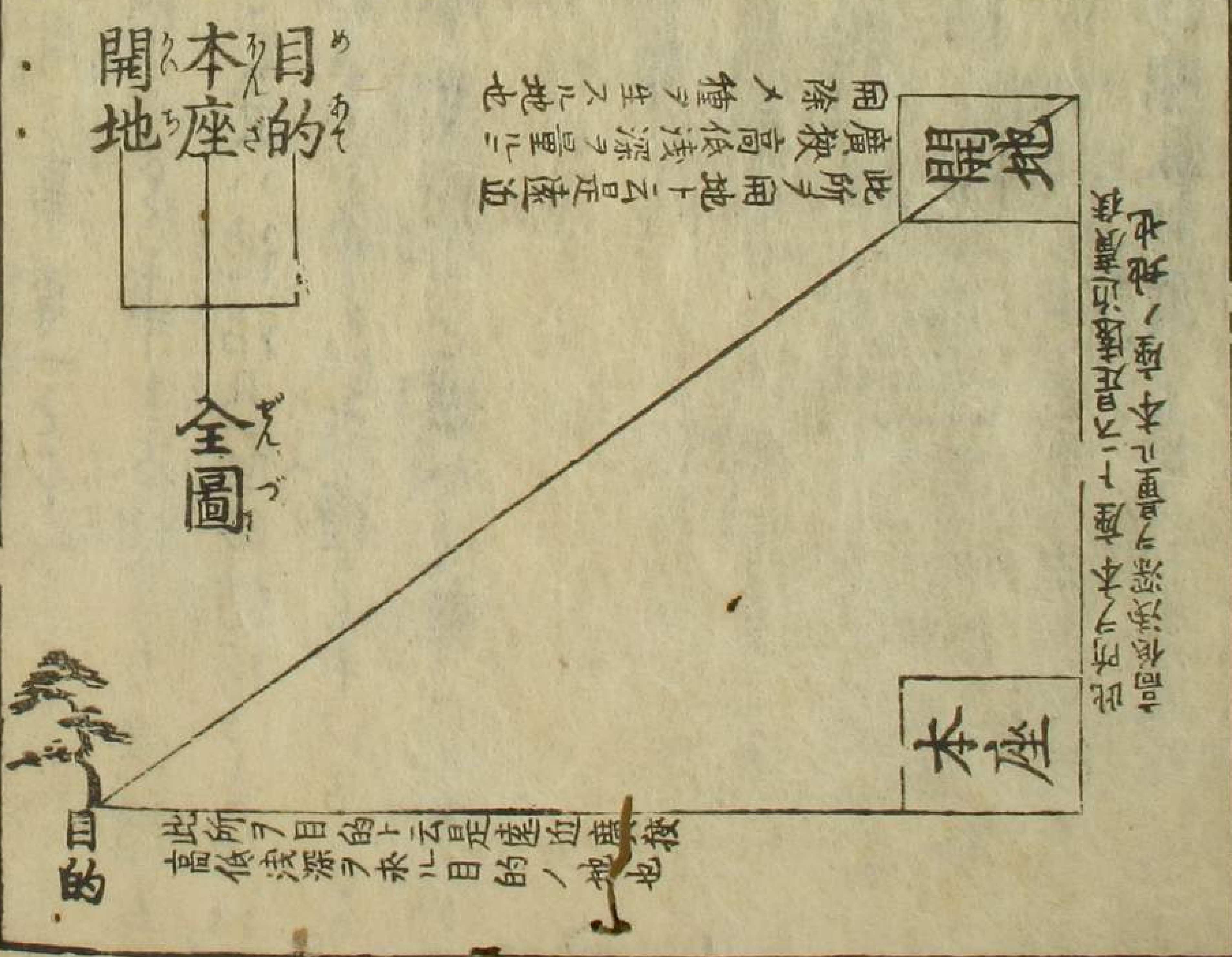


まづ目的の見えやすき所を用る事。専一とすべしといへども。なほ其所より開除の善悪を察する事も太切なり。其謂ハ開地の方に除畾甚しく少きか。又ハ池沼凸凹の妨げあるときハ。心のまゝに開地を求る事成がたし。たとひ求得る事ありとも。其法順路ならざれバ。さいハい事業の害と成べし。故に此境を能々躰認してのち。選ぶべしと云

開地を求る作法の事

開地とハ本座の左右にても前後にても。其地のよろしきにしたがひて。間數をはかりて開除して。其所よりもなほ目的を眺視なすべき場取をいふ。（開地の図下に画を）これ遠近廣狭高低浅深等を量知るべき本元の種子なり。扨此開地を求る事ハ。彼先量に至るまでの間の三十分一の間數を用る事。古よりの法なり。

たとへバ本座より目的まで。先量りて三町とあるをとらバ六間開くべし。又一町半とあらバ三間除くべし。是三十分一のつもりなり然ども少しく有餘不足あり。それを深害有とやせど。其地の廣狹難易よりて。止事を不得ときハ免角用宜しきにまかすべし。ただし開地ハ求むる事なりしがたけれして。見返ふ妨障あるゆゑ。又ハ間數古法三十分一よりも甚しく少きは。多きハ何ほどふくも害となる事なし或ハ開印開印の事下に記す或ハ殘印殘印の事下に



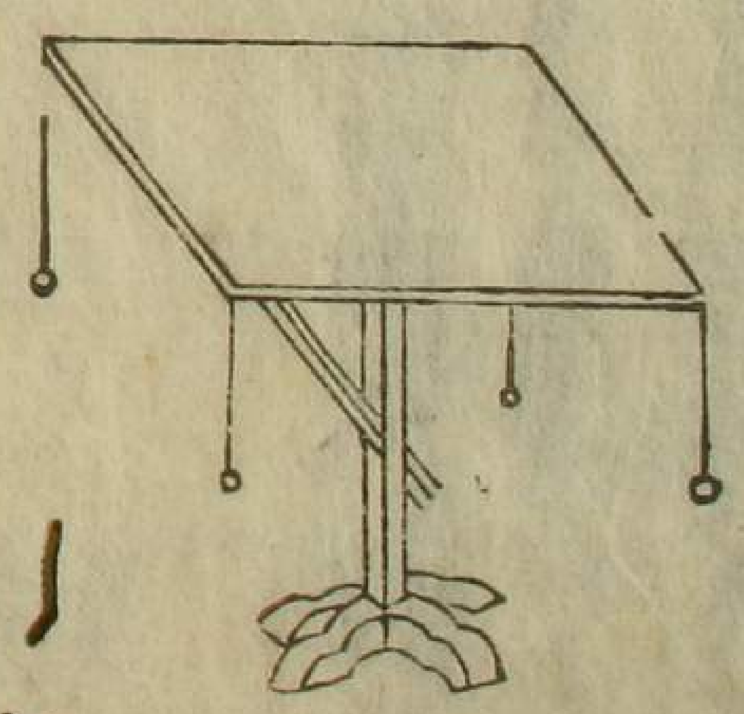

記す等ほとし小見分がちくさ時ハ。事術の妨礙となる事あり。よく其利害得失を察すべし。且また開除の作法大躰本座の右方狹きときハ左方へ開く。左方逼るときハ右方へ除く。後地迫るときハ前地へ進む。前地閊るときハ後地へ退く。或ハ前後左右嶮難狹隘なるときハ。前後左右の斜開も用ゆと知べし。猶其外種々の作法あるべき事。從々其術の下に記すべし。勤て工夫勘辨すべし

量盤居やうの事

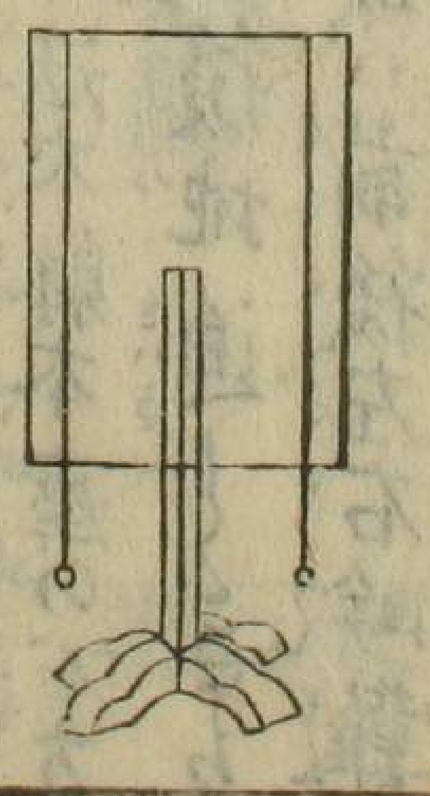
量盤を居る事山陸二樣の差別あり。所謂陸地ハ盤を居る作法ハ連々上章にいふがごとく。本座目的開地あるゆへ極て然してのち。本座に臨み量盤を目的の方へ竪になして盤南を彼とし。盤北を此とし。盤東を左とし。盤西を右として方正に居置扨其臺の下に楔を

施し水平（盤上または基臺上に水盛をつかふ）垂針（是ハ盤上ニ載て。針口を合さを なり其器下ニ図ごとし）釣玉（盤の四隅ニ細糸をさげて。種玉を降る ろう。其器下ニ図さて）笇等の平正器の姿ニ隨ぐし。（平正の器。三物一同ニ用へしといへど いづれ。一物を用ひても平正極るなり）彼基臺の下なる楔を縮弛して平正ニ定むるなり。（さし盤を居べき場不平なるハ。其地形をよく〳〵ならすべし。平面になしく右のおくさニ盤を居へしゆゑニ）眈視の數余多なるゆ。或ハ目的ハ近く開地ハ遠きとき。等ハ盤ハ横に居るなり。（盤を居る法大方竪面を用ゆしといへども。かくのごときのときハ。横面なとをも用るなり。其法連々下ニ記す）又目的上下ハ盤面ゆく上下をなし。開地上下ハ定規ゆて上下ハなるゆへなり。

平盤之圖



立盤之圖





各其法式くわしく別巻ニ志るすを所謂山谷ゆく盤を用ゆる作法ニ云ゆげ右ニまをいふがごとく。其盤ハ居べき地形ハ平面に折なし。豫じめ盤裏の左右竪立ニ圖のごとく。墨を二條隨分不邪ゆうニ引渡し。扨盤裏の枘筭を柱ニ指入て正直にたてし立然うして盤北の木口（盤ハたてし立るときハ。盤北の木口上端となる）ニ針をと刺て釣玉ハさげ。兼て盤裏ニ設き置てる墨乃條と今降るる糸の條と一致ニなるとべし。即これよく盤正直ニ居いるなり。（是を釣玉の法と云。又降糸の法とも号く）又垂針を盤縁（盤縁しく盤北の木口をいふ）に載て其針口を眈合せ正直ニ定るとよし。又水平を用ゆるを可なり。かくこれごとくするときハ。盤の正直立どころに極する。其外の作法惣じて平陸量盤乃居やうニ准知さるべし。猶後章に委しく志るすを照し考べし

眈視并作法の事

眈視とハ。眼力をもつて見込見通再見見返ホの目當の印を見定るを云。其作法身体の居やう眼中のさだめなど。各なくてハかなはず。まづ盤を其座（其座とハ本座。開地。小開。田糸開。何れにても其居所を云）に居へ。定規を盤面に載せ。定規の本端と末端と彼目的の印と何方にても一條に見るべし。體を平直にし少く臂をすこし逡巡し。跪坐して左右の手を杖一眼をもつて眈視なり。勿論右眼を用ゆべし。去ながら

眈視之圖



左眼利なるものハ左を用ゆるも害なかるべし。眼甚定規に近きときハ目的散て定かならず。眼甚盤面に遠きときハ眈視乱て極まりなし。偏其中正を得む事を本とすべし。顔面てらさずふさず。（てらすとハ面の仰くを云。ふするとハ面の俯くを云）鳥銃を眈る心持にて見さだむるがよし。但古法には眈視やうといふハなかりし有事を不謂。おのづから人々吾軀に備りたる規矩あり。其己が稟得たる規矩をもつて見るべしといへり。唯其至要ハ坐作進退の間にも。怠らざれば精練なるにしたがひ馴致するものなりと云

見込并求程の事

見込とハ品々作法のごとくして後。本座に盤を居。（盤の居やう前にくハしく）盤端に定規を載せて（右端にても左端にても術ハ同じ）其所より正當に目的を眈視するを云。（見込やうの作法ハ前章にくハしく記せり）遠廣を量るにも高深を知るにも。

毎術其法同然なり。又盤面大成（盤面大成とハ見込見通見返の術尽くおわりて盤面に三四五の形現ましるを云）のときハ此見込の條が四と五と股となりて即求程乃縮なり（求程とハ遠近廣狭高低浅深の術となる。其求る程を云。即見込大成する時の号なり）

## 見通并開除の事

見通とハ本座ゆく作法のごとくして目的が眈視なれバ盤がすこしも不揺して其侭に居置盤の此端にかゝりむとしも（此端に限るにハあらず。盤の中なりとも見通事もありぬべし）定規が載せて其所より横當に開地を眈視と云（見ゆることやられ事前章にくはし）遠廣を量ることと高深を知ることも毎術其作法同然なり。又盤面大成の時ハ（盤面大成の事前章にくはし）此見通の條を三と五と鈎となりて即開除の縮なり（開除とハ遠近廣狭高深の術となる。其本座より開地までの間の間数を云。即見通大成しる時の号なり）

## 再見の事

再見とハ本座ゆく見込見通の術が動くのち開地に移り作法のごとくして盤が方正に居盤の此端に定規が載せ其所よりもゆること見通の作法のごとく横當に本座の殘印が眈視を云（此術見通の術を再ひする故に再見と云。此法から開地まで盤を方正に居る為のもの事にして枢要の術なりとハいふべし）尤此法見込見通見返の三法に並稱まといへども假令の事にして實用にハあらじ。然れどもまゝ毎術廃まべき事ならざれバ爰にあらしく記まと其優劣ハ動く知るべし

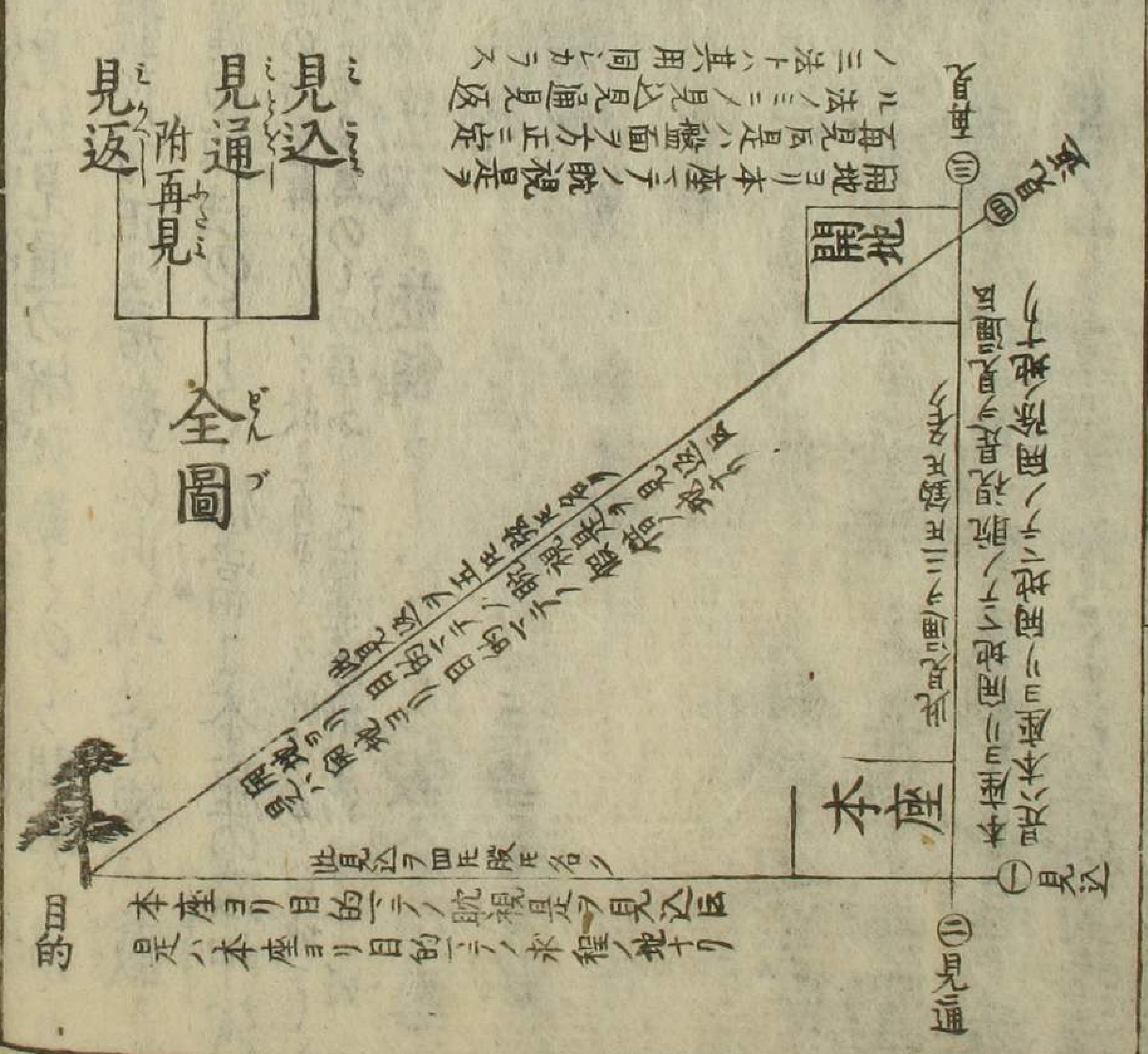
## 見返并假借の事

見返とハ本座ゆく見込見通の術が動てのち開地に移り即本座が再見しゐる盤がすこしも不揺して其侭に居置斜に目的を眈視を云。其所よりもゆること（見ゆることやうの事前章にくはし）遠廣を量ることと高深を知ることも毎術其作法

同然なり。まつ盤面大成〈盤面大成の事前章にくハし〉る時ハ。此見返の墨を五とも弦とも号く是即假借の縮なり

假借とハ。遠近廣狭浅深の術ともの。假に借用ひて其術を成為やしむるをいふ。即見返大成しぬるときの号なり

右に述るごとく。一番に見込二番に見通三番に再見四番に見返。次第を追て勤るときハ。下に図するごとく。盤面大成して量地術の全体備る。是をもてたるときハ。千万里といへども立所に其道程を知るべし





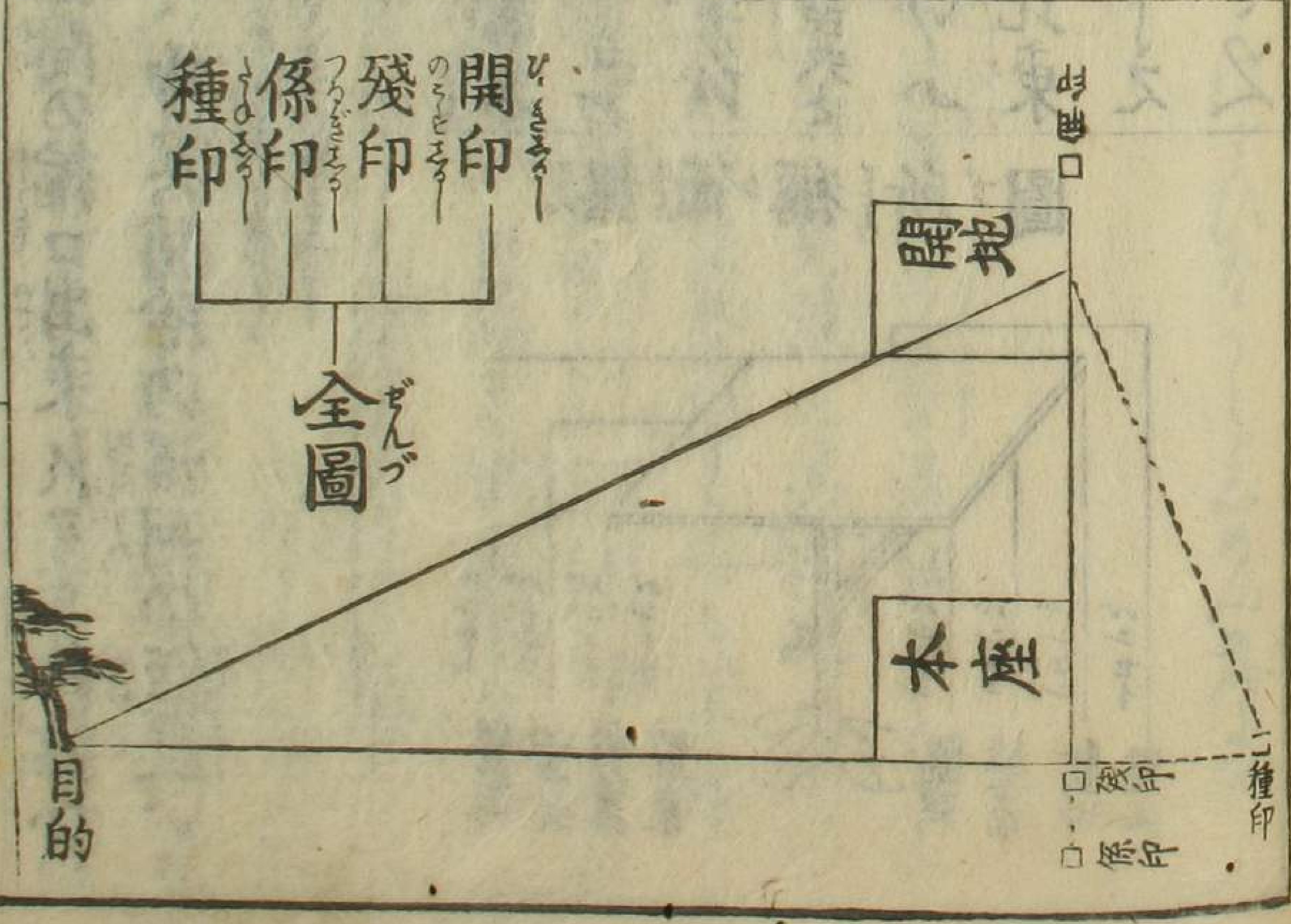

四品の標の事

四品の印とハ。開印残印係印種印の四種是なり。其作法各異別あり〈まづ印を立る事ハ。本座開地ハいふに及ばず。或ハ種子場。或ハ小開場など。所々ふてども。其座を迂き所其的を見る所なり。毎所小是を立べし。又開印残印の二品ハ。毎術不用して不叶印なり。種印係印所謂の二品ハ土地のからにより。時期のよろしきよりてもちゆべきなり〉

開印〈見通の印〉とハ。本座に盤を居目的を見込てのち。開地を求るとき其よろしき場に此印を立て。本座より是を目的に志て作法のごとく〈作法とハ。盤を平正に居。定規をもて見こむを云〉見通し。開地を定る印なり。所謂残印〈本座の印〉とハ。本座ふて見込見通の作法畢てのち。盤の隅に此印を残し置。然して開地に移り彼場所より此印を目當として作法のごとく〈作法ハ右に同じ〉再見し。盤乃平正を極る印なり。此二品の標ハ毎例かならず用べきなり。所謂係印とハ本座と開地との間に沼河ありて。開地への

往反不自由なるところに。開印は不用。本座に残印と此係印と二本は（係印ハ残印より五間も十間も除りて立るが吉）正當に立て（係印と不用ときハ。開印は立べき事勿論なり。係印を用るときハ。開印不立して害なし。故ニ開除の間ニ沼河など有るところハ往来せましき為ニ係印を用て開印を不立事有）本座の残印より此係印は見通して（爰にてハ係印と開印の代りに用るところなり）本座の盤乃平正を極め。然して開地に移り彼所より此二本の印（残印 係印）を一條に眺視て正當に再見し盤は居る為の印なり。（残印と一本立る事ハ尋常の例なり。然ども開除の間に沼河などありて。往来不自由なる時ハ。開印立がたき故に。再見すべき目印なし。爰をもつて残印と係印と二本を正當に立て。本座に残し。是を正當にとりて再見するなり。是開地へ往来せずして其條理すこしも違ふ事なき良法なり）此係印ハ開地へ往来不自由なる時のうれへとなかるべし。毎術用ても利多かるべし。所謂種印とハ。本座と開地との間に沼河有て。開除の町間はかれども量がたき時に。これは量るに用ゆ。其法本座より開地までの遠程は先量し。其三分が一の間數を積りて。

前へ成とも後へなりとも勝手よろしき方へ間數は定むべく（是ハ本座より開地とも見べき所まで大槩三十間ならりと先量し。かりバ。即其ハ三分が一の十間をもそ。種の間數と定るなり。猶後巻にくわし）。種印は立。本目的を見込むべし。本座より是は正當に眺視て。其條理は定置。然してのち。開地にいたり。場は選びて盤と居。本座の残印と係印とは一條に眺視て。再見の條理はよく定め。扨其ハ盤より。此種印をもと見返て倶に

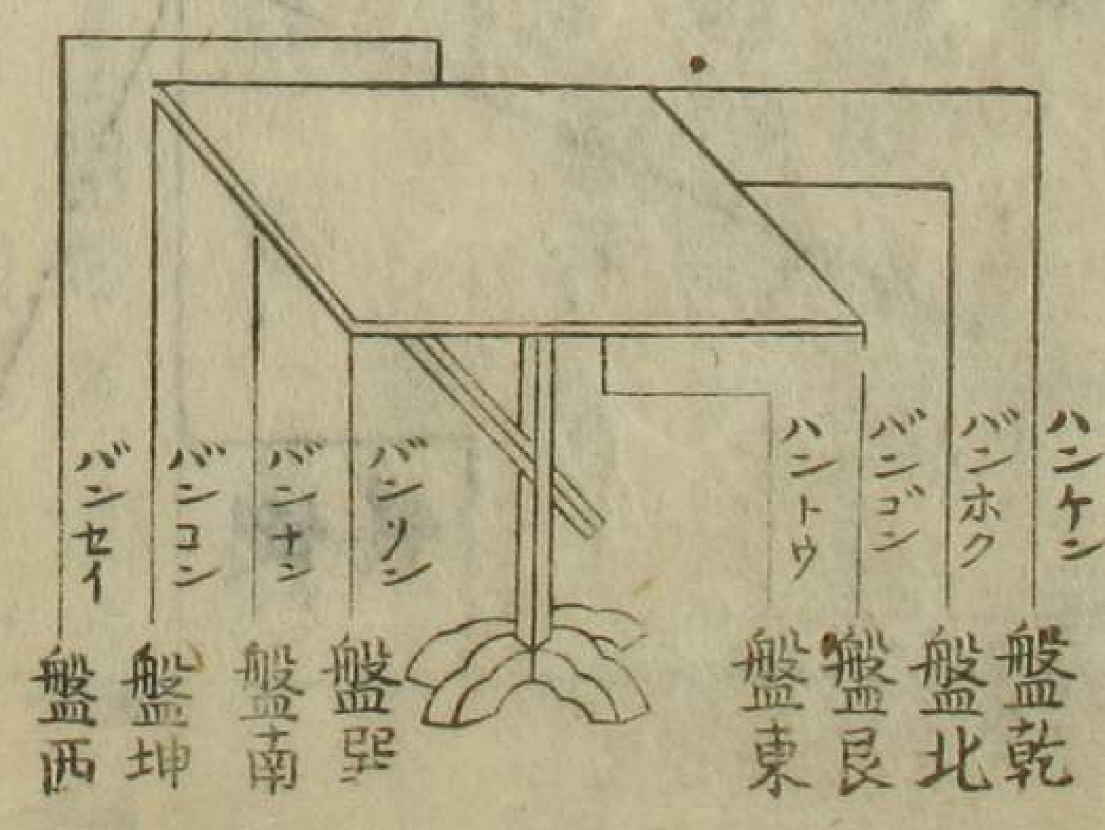


盤面に墨を引渡すときは。種間の縮口出来るなり。此縮をもつて開除の縮を量るときは。即其開除の沼河の径度は知らるゝなり（此は其大法を述ぶ。其審なる事は後巻にあるを考へ合すべし）

盤面稱所の事

量盤の上面四方四隅八箇の稱所あり。所謂左方を盤東といふ。右方を盤西といふ。彼方を盤南と云。此方を盤北といふ。東南の隅を盤巽といふ。南西の隅を盤坤といふ。西北の隅を盤乾といふ。北東の隅を盤艮といふ。是いにしへより稱し来る所にはあらねども。初學のやから其所を指すに便なからしめん為に新に其稱所をまうく。學者知るべし

盤面稱所圖




量盤始終作法の事

往々右に述るがごとく。空眼視観察等の先量法をなして。本座より目的までの里町反間を大槩に見渡し。其遠近に随ひて三十分一の開除を假に定置。品々作法整ひてのち。本座に量盤を方正に居へ盤面の竪端（右開のときは左方の端、左開のときは右方の端）に定規を載せ。（定規は見込見通再見見返ホ。毎法毎般盤上に置て見ることの矩とする）目的を眈視なり。是を見込と云。次に假に定置たる開地まで竿をもつて間数をとらしむ。（此間数古法三十分一を用ゆ。大槩是に准じて間数を定むべし。これすなはち量知の種なり）其所に開印を立させ。（此印もまた假に立るなり）然して（宗初に居て目的を見込たる盤をすこしも不揺して置なり）盤の此の端に定規を載て彼印（開印と云）を眈視なり。是を見通と云。尤彼印

定規と正當不合とにいふろし。其しふ不合とれども。幾たびも
彼印を進退成しため（進退の仕やう。是も正當を専一とすべし。しかし行やすろく正當をとるべし。左右まる時ハ栗求の間数差異ハ行るべし）定規と正當不合なるべし。よく正當ニ成る時ニ盤の
隅に残印を立させ。開地へ遷れるなり。扨開地にいたり開印へ
盤の隅を假に合せ。初のごとく盤の此端ニ定規を載て。此所
より本座の残印へ眈視なり。是を再見と云。尤其印（残印をいふ）
盤の此端の定規と均く合ときハ。宜若不合ときハ。幾度も
盤を居直して残印と定規と正當になるべし。扨盤よく居
なれバ。其時まで。定規を斜ニ盤上ニ置て本目的へ眈視
なり。是を見返と云。尤目的と定規の本と末と三所一條ニ
成やうニ。幾たびも定規を動して目的ニ合すべし。其定規
よく目的ニ合なバ。即定規ニ随ひて盤面ニ墨を引なり。



見込見通再見の三法ハ。盤の此端に定規を一致なるが故ニ。墨を引るにもつて疆とするに及ばず。只見返の一法のみハ盤中ニ斜なるが故ニ。墨を引てもつて印とするなり。扨墨の引やうハ工匠の用ゆる曲尺をもつて。柿木の絣するごとく。筮筆をもつて定規によせつめく引なり。渾発をもつて界引仕るものなり

形のごとく見込見通見返の法悉くしくおふ時ハ。
盤面大成して三四五の形ゆしき微妙其中ニ不含蓄せりとすべて
盤面ニ模し現しゐる形ハ目的本座開地の形をすとしを
不変して大を小ニ引縮むる圖なりと知べし

渾發用やうの事

上章にいふがごとく。量盤ニ據て。見込見通見返の三法悉く
とゝのふ時ハ。盤面大成して毎術下ニ圖するごとく鈎股弦
三四五の形（鈎股弦とて。三四五といふ。一事別名なり。そのつゞき是を二法とおもひくゐべらし。猶委しくハ別巻ニ記を）
なるなり。或ハ左右開或ハ正開或ハ斜開の別ありてげすうしく其形異といへども。大躰毎術三四五の形。鈎股弦のこゝろを離るゝ事なし
其三ゟ（三より右にいふがごとく盤の此端見通の條を云）開除（本座より開地までの遠程をはかしるをいふ）の縮なり

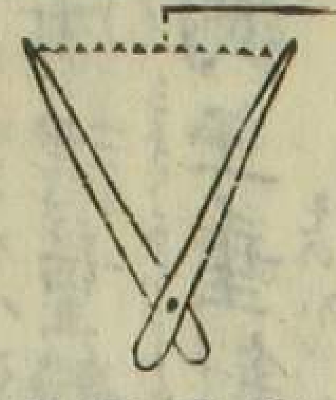
其四も（四とハ右よりかぞふる如く盤の竪当見込の條を云）求程（本座より目的までの遠程をいふ）の縮なり

其五も（五とハ右よりかぞふ如く盤の中斜見返の墨を云）假借（開地より目的までの遠程をいふ）の縮なり

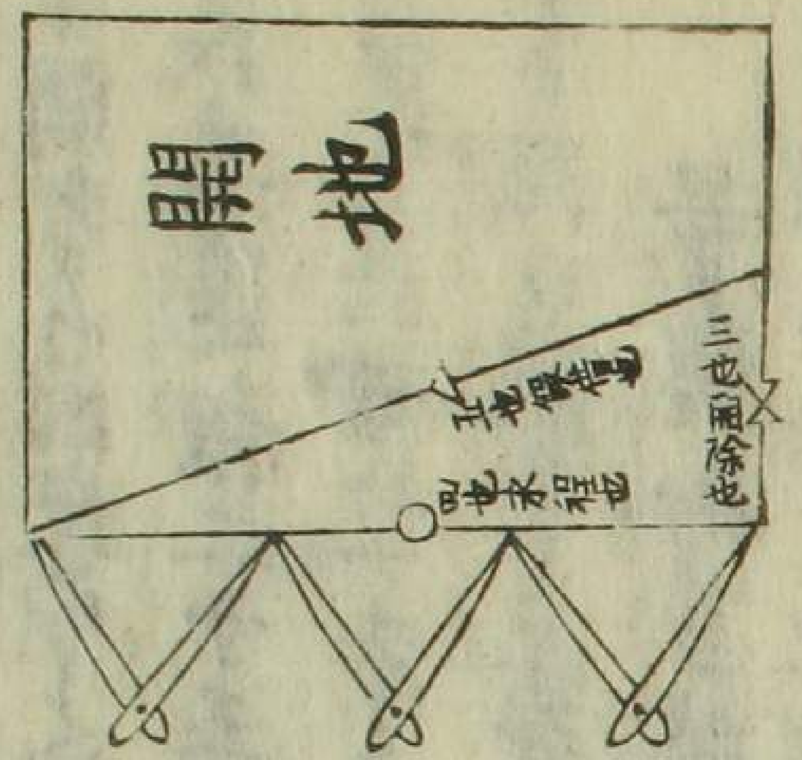
以上ハ盤面にあらはるゝ形を記す。以下ハ渾発のうつし作法を述る

扨渾發をもつて其遠程をとるを知べき作法ハまづ渾發乃口を開きて開除の縮口の三にあはせ合。其三を量る矩（矩とハ渾発の開きたる口をいふ下是にならへ）をもつて求程の縮口の四を量る。然するときハ。即求る所の遠程或ハ幾十町或ハ幾十間と。其數量立どころに知ることなり。たとへバ開除の間數十間ある時ハ。盤面に現れたる三の口寸ハ。十間を縮めれ口寸なる故に。渾發の口をもつて彼三乃口寸と一変に変じ。是を十間の矩と名き（渾発をもつて三の口寸と変じたる事。一変に非除るべし。是と二変にするときハ五間の矩と名さど。是を五変にするときハ二間の矩と定むべし。余ハ倣之）其十間と名付たる渾發の矩をとりて。即四の口寸ばかるゝ。四の口寸ハ求程の遠程を縮めたる口寸

## 渾發用法之圖



今此渾発ノ開タル口ハ開除十間ノ縮ノ三⊠ヲ変ミタル矩也此渾発ノ口ヲ以テ求程ノ縮ノ四○ヲ量ル二三変ニ有リ三変ハ即三十間ナリ是求程ノ間数也余皆是ニ准シテ知ルヘシ




此盤ノ図ハ下ニ図スル所ニ同シ今爰ニ略セ略ニ図シテ只テ渾発ノ用法ヲ明スナリ

## 量盤用法之圖

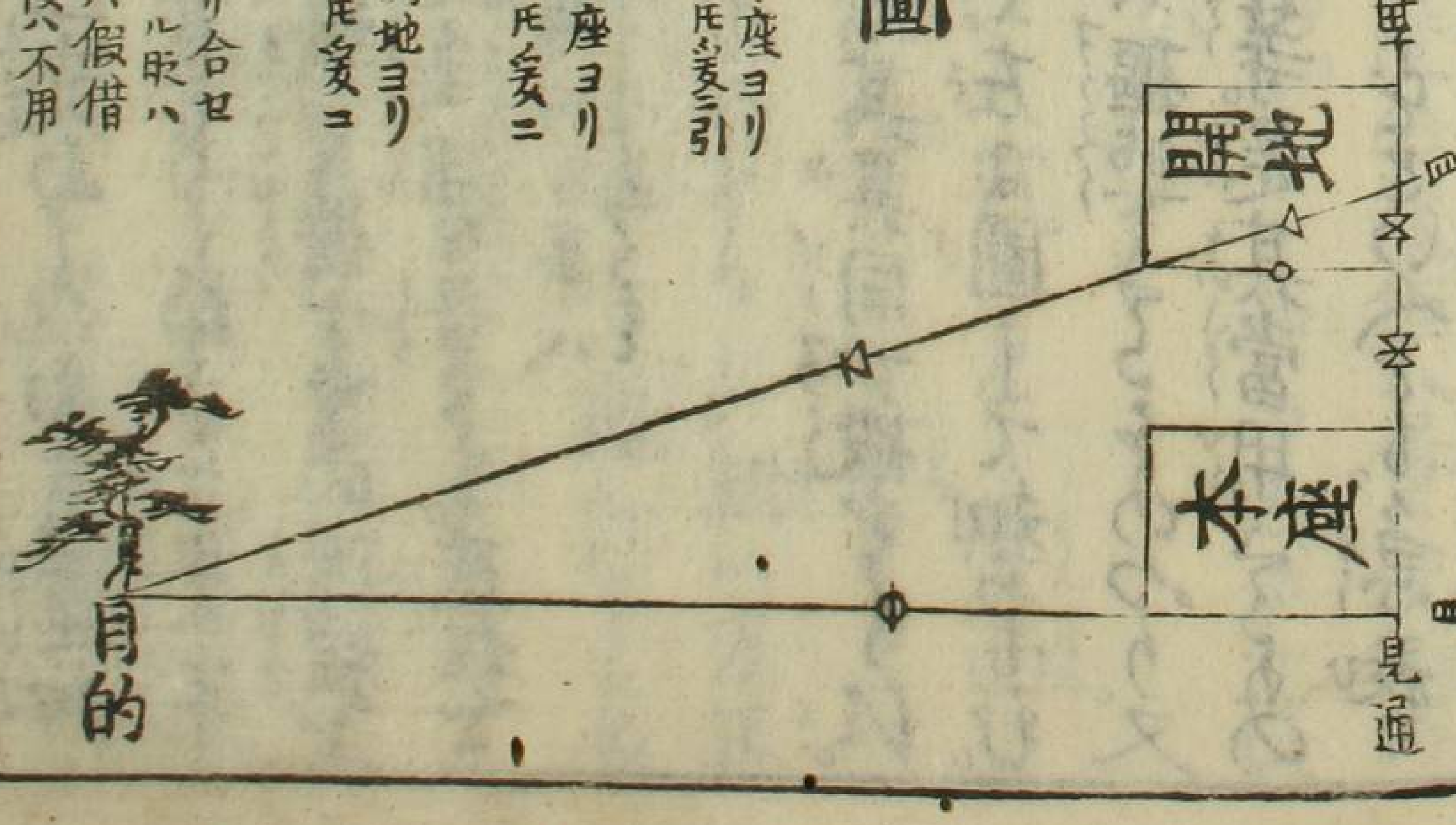
云此遠程ヲ⊠ニ模ス也
⊖此遠程ヲ○ニ模ス也
△此遠程ヲ△ニ模ス也
毎術如此地形ノ大ヲ以盤面ノ小ニ引縮模ス也

⊠此口ヲ開除ノ縮ト云是本座ヨリ開地マテノ間数ヲ幾程アリトモ爰ニ引縮メ摸シタル所ナリ

○此口ヲ求程ノ縮ト云是本座ヨリ目的マテノ間数ヲ幾程アリトモ爰ニ引縮メ摸シタル所ナリ

△此口ヲ假借ノ縮ト云是開地ヨリ目的マテノ間数ヲ幾程アリトモ爰ニ引縮メ摸シタル所ナリ

毎術⊠此口ヲ渾発ニテ量リ合セ其渾発ノ口ニテ○此口ヲ量ル時ハ遠程立所ニ知ル、也△此口ハ假借トテ假物ナリ故ニ大成ノ後ハ不用



なる故に。渾發の矩かく此四の口寸三爻あらバ。即其遠程三十間なり。四爻あらバ其遠程四十間なり。もしゆき二爻半あらバ其遠程二十五間なり。すべて幾數里幾十里の遠程を量るも其理ハ一なり。また高低廣狹淺深を量るも。遠程をはかる法に異なる事なし　まこしく異傳ある事ハ。併て其術の下にしるす

## 量盤術器械品々の事

量盤術の器械古制新作大小精粗すべて其異同一般ならねば。今其無益の品を除き。有用の物ばかり採て。左に圖して知らしむ。所謂量盤定規渾發の三器ハ。就中其樞要たるものなり。又釣玉垂針箆筆壓鎭標木間繩間竿等。是其當用するものなり。其外學者の辨知すべき品物少からずといへども。急務ならざれバ。後卷に記す。又盤針術渾發術算勘術ホあり。



器物にいたりては。皆其編の卷首に圖し。異同古新の差別いづれのハ或問の編に論ず。然る中に分度の規矩ハ。量地術の神器大寶なるが故に。いかしめ初學の士に知らしめんが爲に量盤術にいづるといへども下に小圖をも

量盤　量盤ハ遠近廣狹高低淺深のかぎりを量るが盤面に引壓をもて知る器ホして即當術の肺とする所なれバ。其要器たる事今更述るに不及ところなり。其制ハ方正平直ホ本とし。盤ハ檜ばかりて。其臺柱ホハ欅ばかりとらむ但し大躰其大きなるものハ竪長一尺四寸。横巾一尺なり。其小なるものハ竪長一尺横巾七寸ばかり。高程ハ何れも一尺四五寸を節とし其余の制作ハ恰好よろしきに應ずべし。尤大小ハ好むところに隨ふべしといへども願くハ

大なるハ志く事なし。猶審なる事ハ。下ニ圖して是を明く示すを見るべし

**定規**　定規ハ盤面ニ載せて見込見通再見見返の摸範となる器なり。其制ハ檜又ハ橿をもつくる。長一尺八寸余。横巾一寸弱。厚三分。是其大畧なり。猶量盤の大小によりて長短心得有べし。其器尤正直ニ制すべき事いふに不及。又不時の需ニ應ぜざる為ニ。片方ニ曲尺の星をきりつけおくべしと云

**渾發**　渾發ハ盤面ニ現さる圖形を是をもつて量り。遠近廣狭高低浅深をしるす器なり。或ハまた規ニ用ひ。矩ニ用ひ。分割ニ用ひ。界引ニ用ひ。錐ニ用ひ。假量地ホにもちゆる也。此器紅毛國より来るをもつて上品とす。其制黄銅をもつて作る。又鐵をもつて制するもよし。彼も得失あり。此も得失あり。強て拘泥する事なく。こゝろニ任て造るべし。長五寸余。其形扇子の上骨二本合せたるニ似たり。下を太くし鋒を細くす。下の方八分ばかり去て要を施す。要の蹤を固くすべし。又鋒の内頬ニ墨溝を設くべし。又外頬ニ曲尺の星をきり付るもよし

**釣玉**　釣玉ハ盤面の平正を定る器なり。其制針ニ糸を施し鉛玉の錘をつけ盤の四隅ニ降るなり。此糸の曲直をもつて盤の平正を定るなり。糸針ハ尋常ニ用る品をもちゆ。鉛玉ハ稱目三四文目ばかりなる銃丸のごとき制を用ゆ

**垂鍼**　垂針ハ盤面の平正を極むる器なり。其制黄銅をもつて作る。恰好惣体下ニ圖するごとし。形天秤ニ用る所乃針口といへるに似たり。其理もまた是ニおなじ。制作の

大小精粗其望みに任すべし。あまり異作を好むときハ。其理をうしなひ會得せず。用るに害あるべし

【筭筆】筭筆ハ盤面に於て定規に随ひ墨を引器なり。竹をもて作る。平生に工匠木客のもちゆるところの器物にひとしき故に敢て贅言を不記

【間縄】間縄ハ間町寸尺を定る具なり。長六十間たるべし。太さ鍼管ほど汝吉とす。上品の麻苧をもて作る。大躰微索の連綿あるがごとく固く綯りて三糾にすべし。或ハ油を蝋を引。澁を引て染るもよし。水に濡て屈伸なからしめんが為なり。其一間毎に印を付置て急用に便すべし。まゝ遠程一町に及て引渡事あれバ。かりそめにも麁むものなり。兼て其心得有べし。又無用の時藏め置べき





又ハ簏篗に捲て置もよしと云

【間竿】間竿ハ間町寸尺を定る具なり。其制檜又ハ橿をもつてすと。長九尺。方二寸ともに三尺づゝふしくて胴金を入べし。枚に寸尺の星をうち付るがよし。片方三尺を。其厚の半分を削去て。間尺をさる時に。竿二本づゝ組ちがへてつなぐごとくすべし。又或制おほし。試てのち其よろしきに應ずべし

【標木】標木ハ開印（見通の印）殘印（本座の印）種印係印等に用る具なり。竹木をもつて制す。長二三尺。徑二寸。内外其大躰なり。尤長短大小其時の宜しきに随ふべし。兼て貯置具なきとあらバ。期に臨て作るべし。但開除一町以上の印ハ。標木の頭に紙まくも帛ほどを目あてある物を結付

施し不然にてハ見分がたくして。誤まる事あり。一町よりかゞざる用除ちかしバ別て目印を付おくに不及ぶし　或ハ又州郡の地圖などを勤る時に用ゆる印ハ此制にあらざれバの彼制作。盤針術編中に委し

**蹙鏡**

蹙鏡ハ眼勢の不及ところをおぎなひて。遠里遠町の目的を明らかに見定むる器なり。其制紅毛國の作物を佳とす。其上品なるものは數十里をてらし。其中品なるハ數里をてらし。其次品なるハ數十町をてらし。其下品なるものハ數町をてらすと其家上乃品にいへり。されバ求るに得安からず。されど上制ならずとも數里まではてらし見る物なれバ求めて携へし。此器の制作吾邦尋常の工人の能するところにあらざれども。爰に其作用を洩さず名工ありて是を制せバ。永く倭朝の重寶ならん

**規矩**

分度の規矩ハ。地理の遠近廣狹疎密方角をさとりてのち。其圖を紙上に摸を器にして。規矩兼備の要物也　或ハ是を條貫に用ひ。或ハ是を曲尺に用ゆ。故に規矩兼備の要物といふ。其外かくのごとく機轉をもつて。代りとして用べき事甚おほし

尤此器規矩の妙をつくすべし。方圓の理をはくとが故に。古今の量地者家。大寶神器とあがめて是を秘藏す。誠に此器乃要用に識達せざれども量地の底蘊を會得しがたしといふべからず。爰をもつて量盤術樞要の具にあらざれども必ず下に圖して初學の參攷に備ふ。其制黄銅をのべ徑一尺の周圍。十二分の一分なり。名工に課せよ。分釐毫髪あやまりも其制差誤るときハよからざるべし。其形象寸分の審なる事圖を按して知るべし

**盤**

竪一尺四寸
横一尺
厚サ五分弱
両端端込ヲ施ス

**算**

長七寸五分
巾四分強
高五分強
両端栓穴ヲ施ス

**柱**

長一尺二寸
太方一寸
臺入枘 長一寸 太方七分強
算詰溝五分強
算立溝三分強
伞入穴 長一寸余 巾四分
三所栓穴ヲ施ス

**伞**

長一尺四寸
太方四分強
算夾 長一寸三分 巾九分
算詰 長六分 巾四分
両所栓穴ヲ施ス

**臺**

蛛手
長七寸
巾一寸四分
枘穴 方八分 深一寸

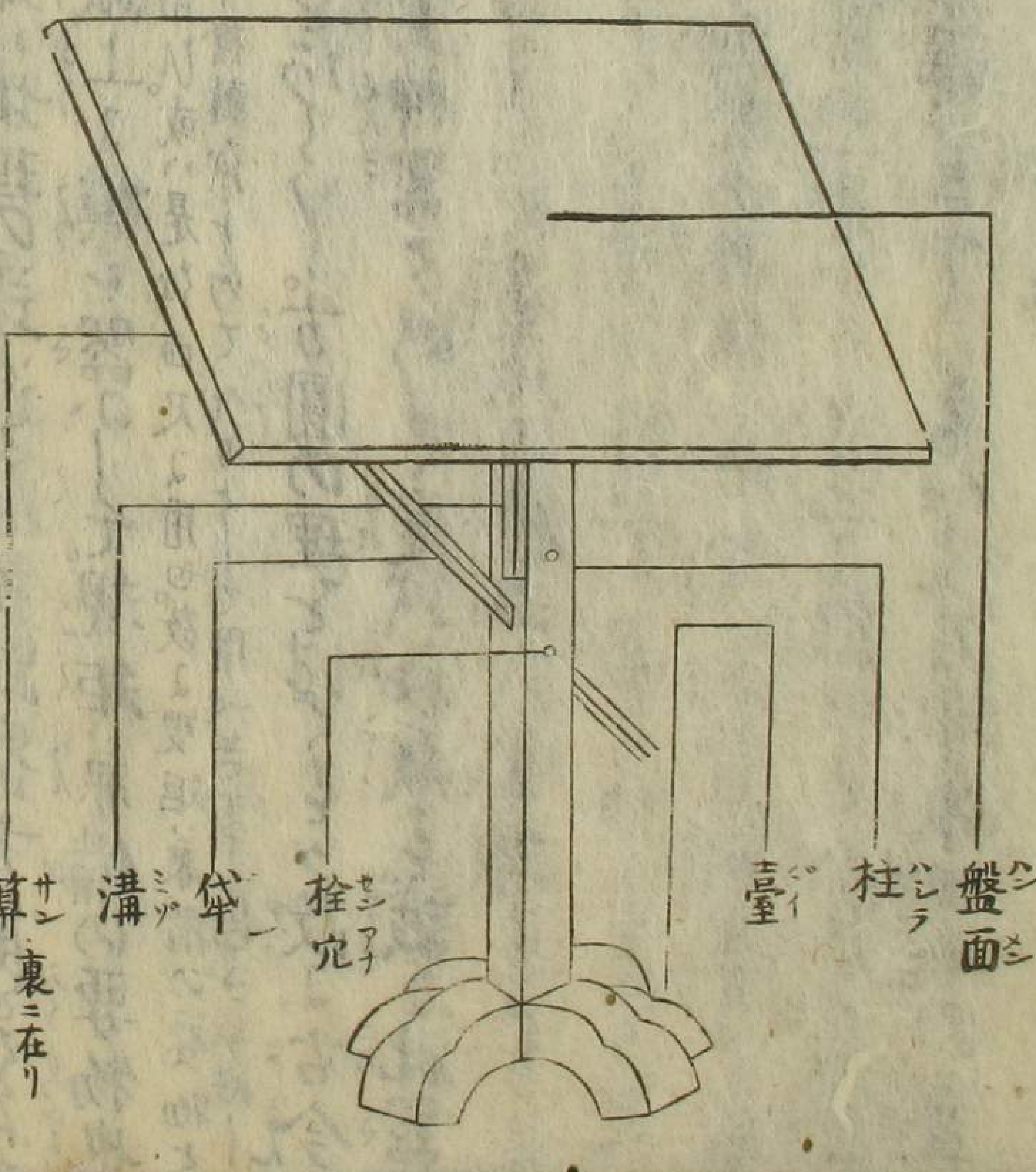
**栓**

長一寸余

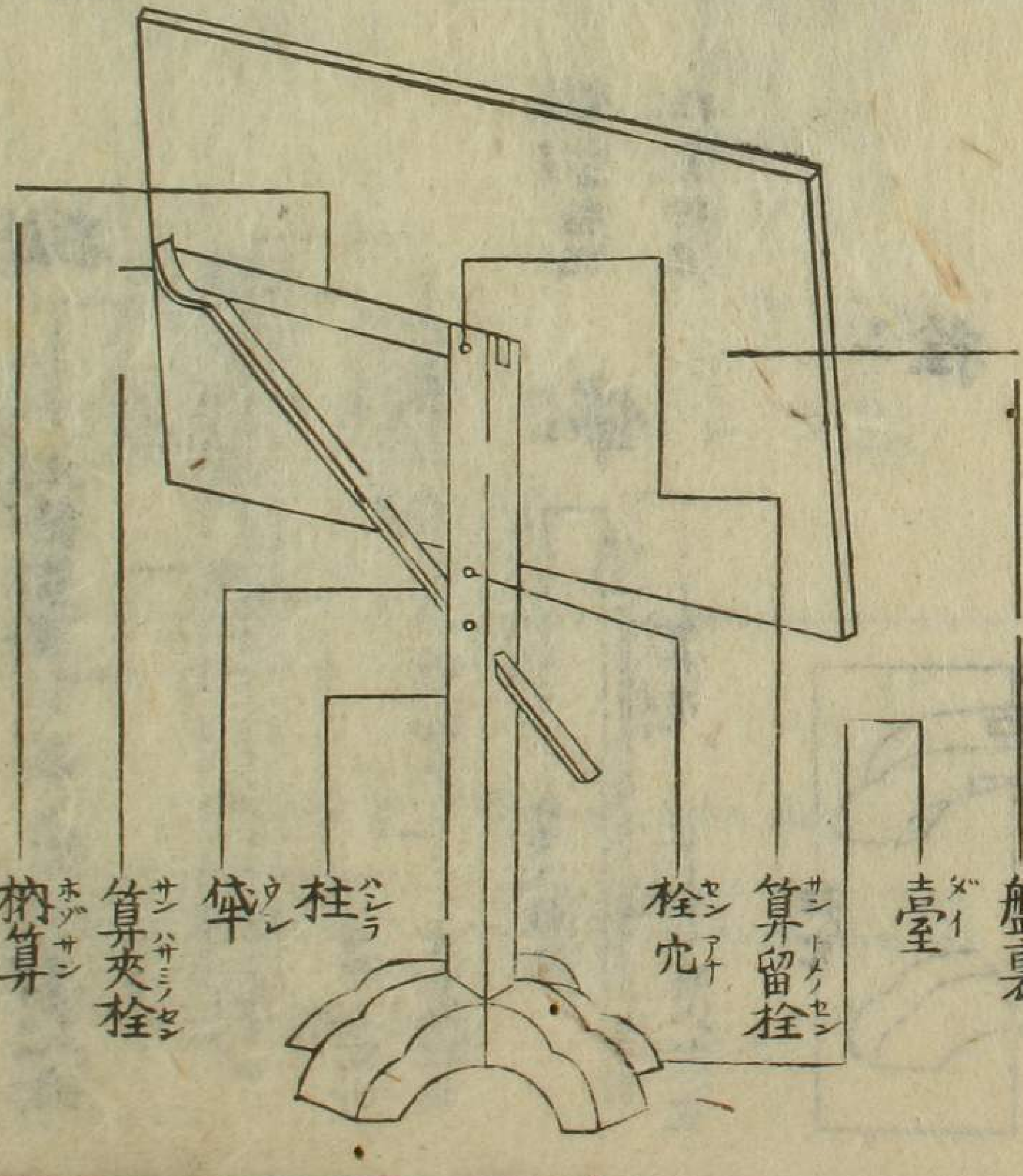
**總高一尺四寸**

但臺下ヨリ盤上ニテ

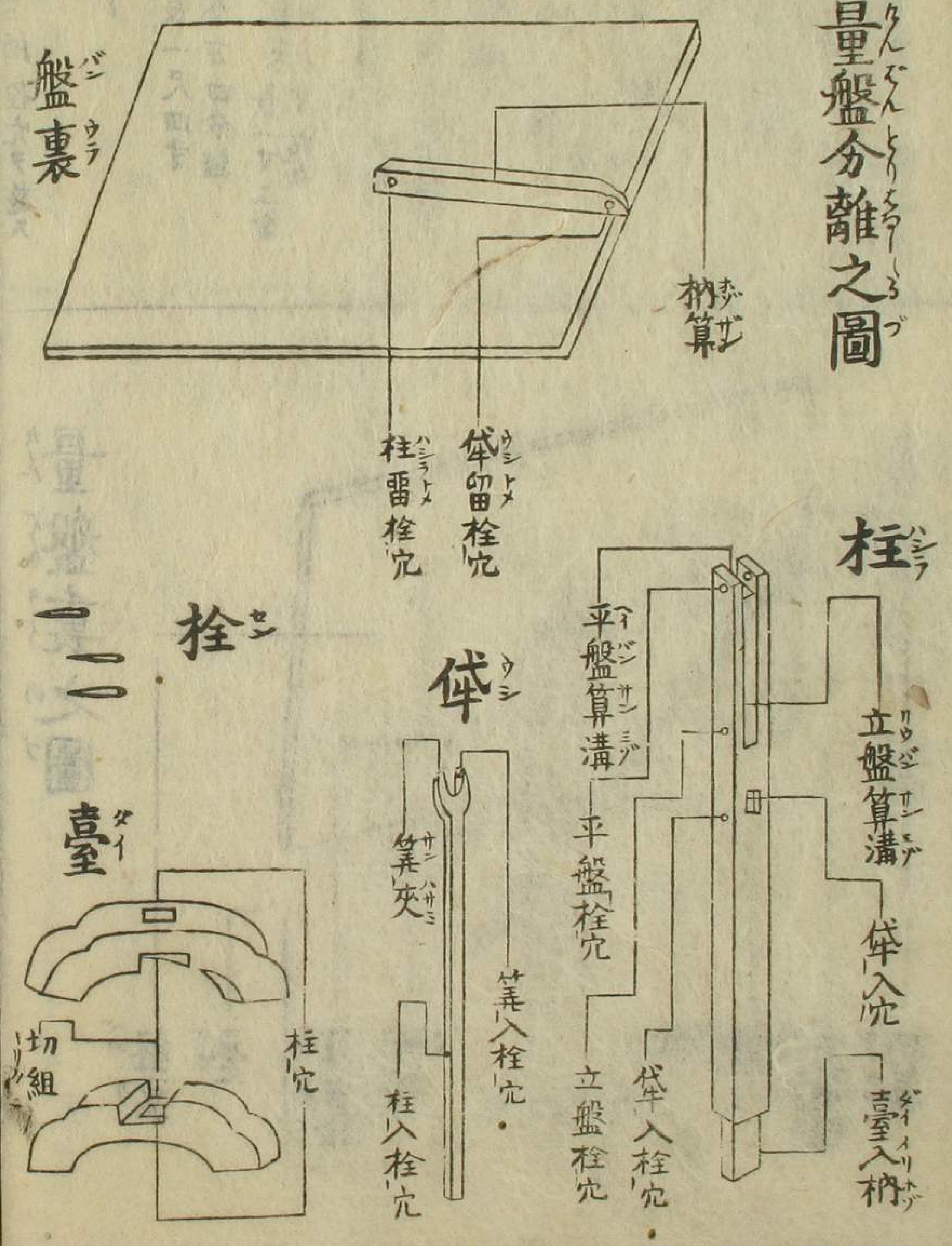
量盤表之圖




量盤裏之圖



# 量盤分離之圖

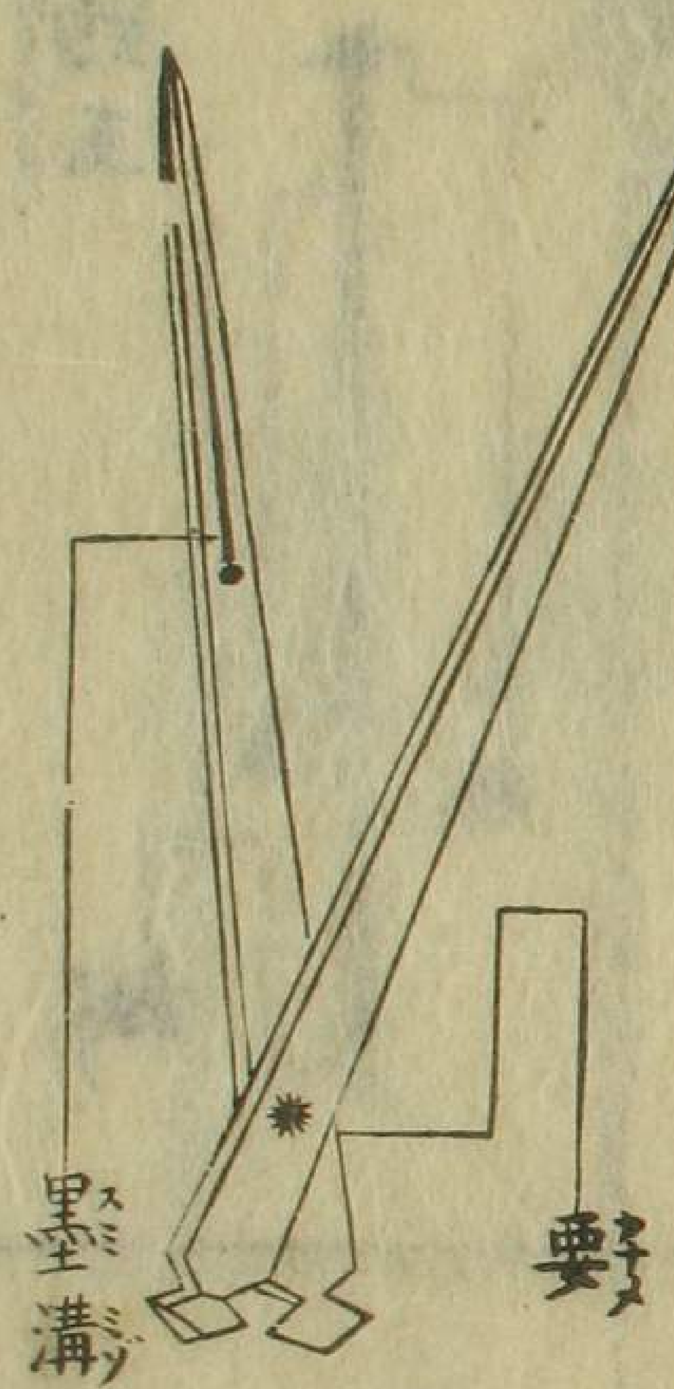




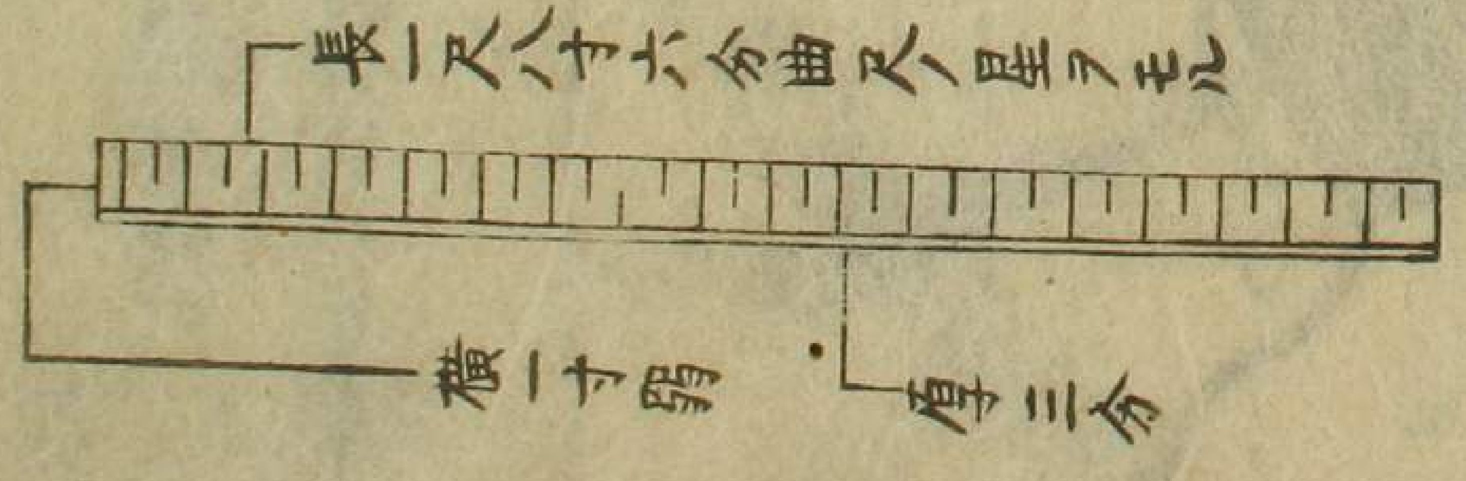

# 渾發爲開圖

長五寸五分　太サ方三分強
爲ニ刑形ヲ象ル方錐ノ如シ
頭形蜻蜓ノ頭也但好ニ依ヘシ

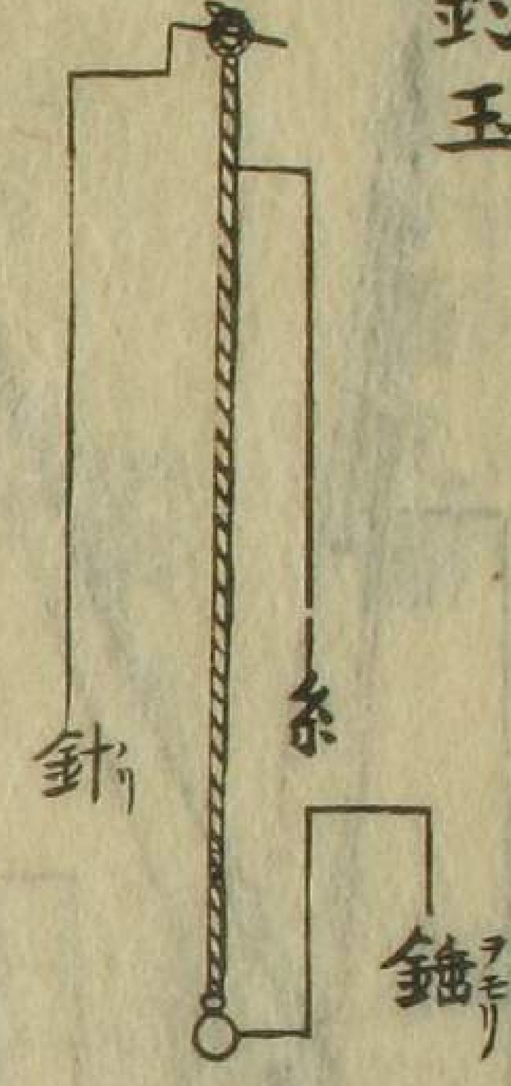
# 渾發爲開圖



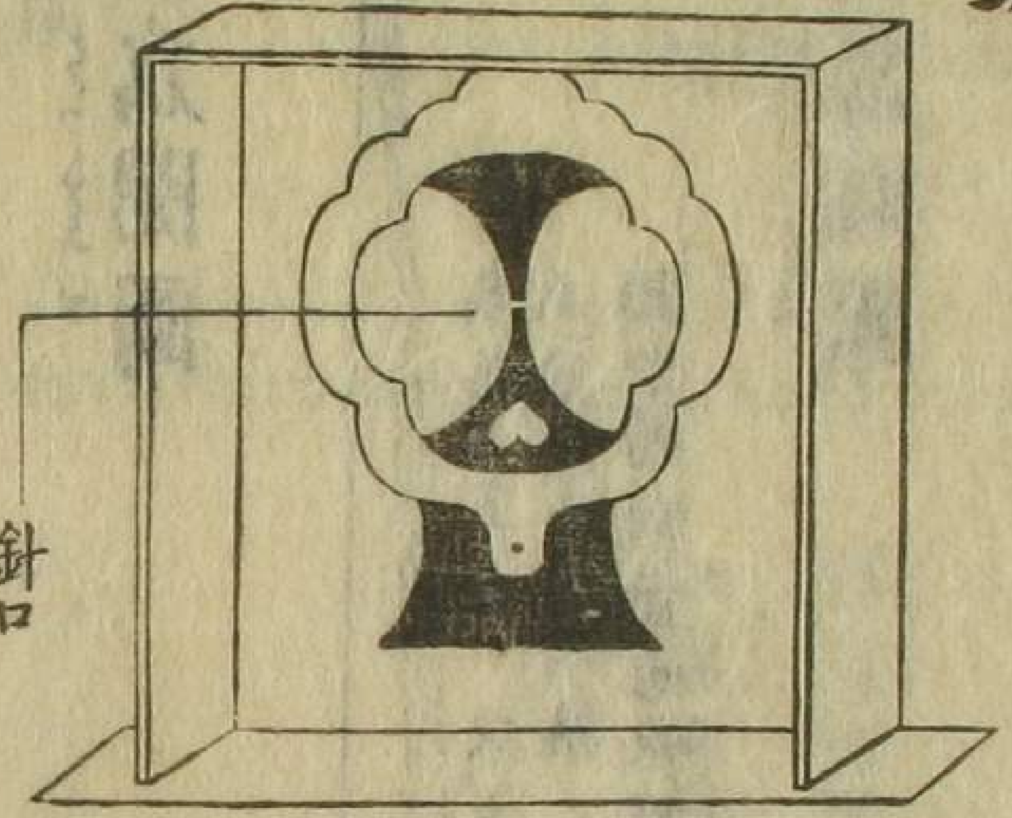

# 定規



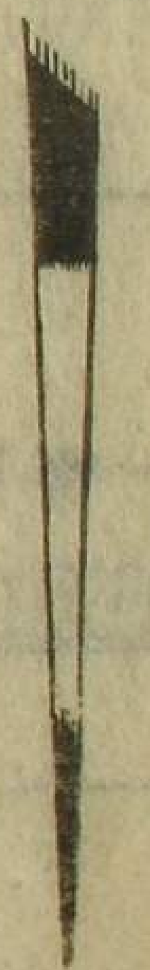
釣玉




垂鍼

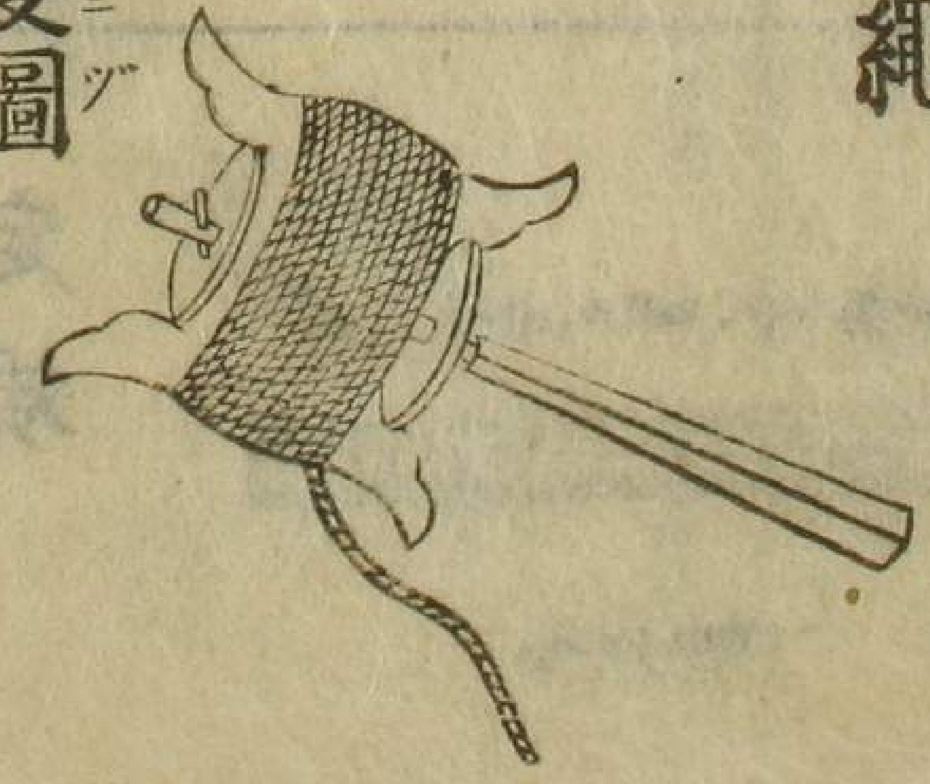



筬筆



間縄

捲籆圖

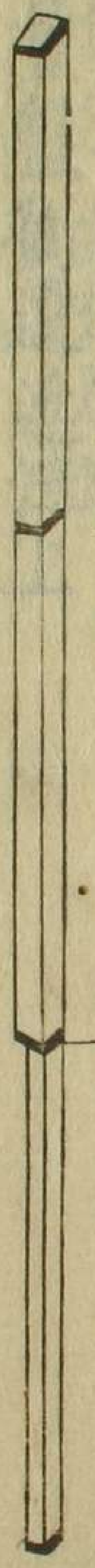






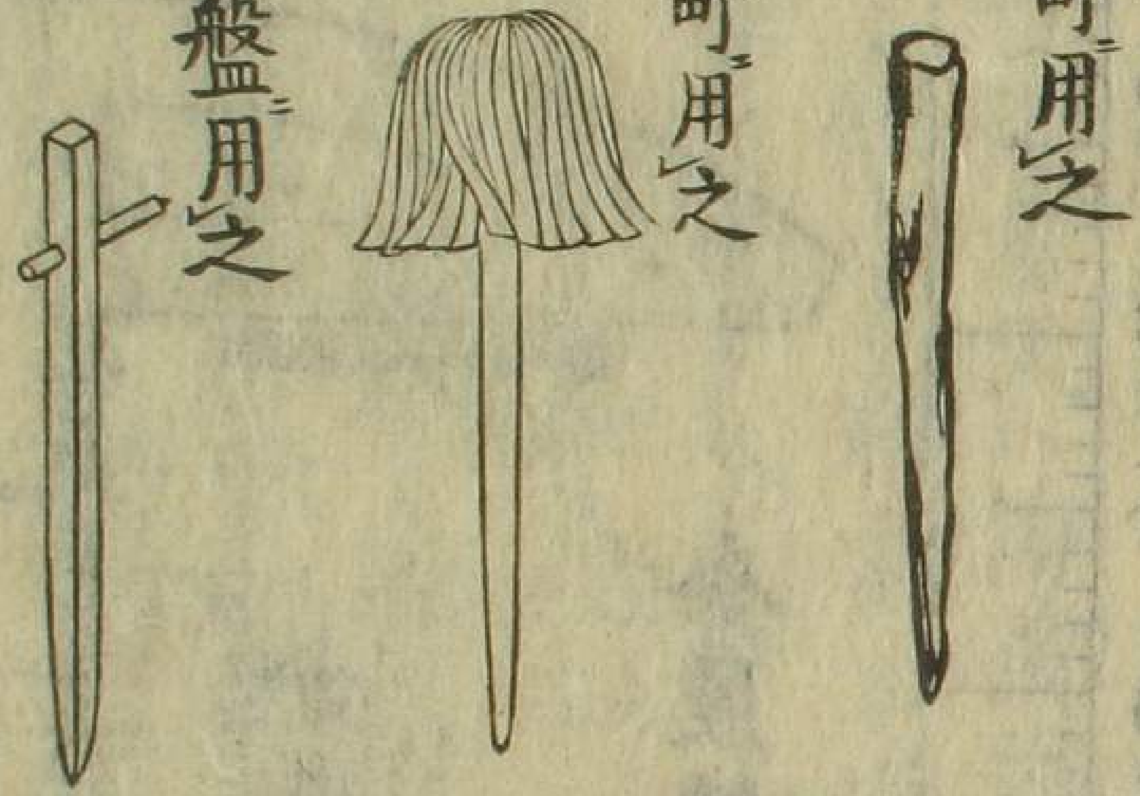
間竿

長九尺
方二寸
胴金四所



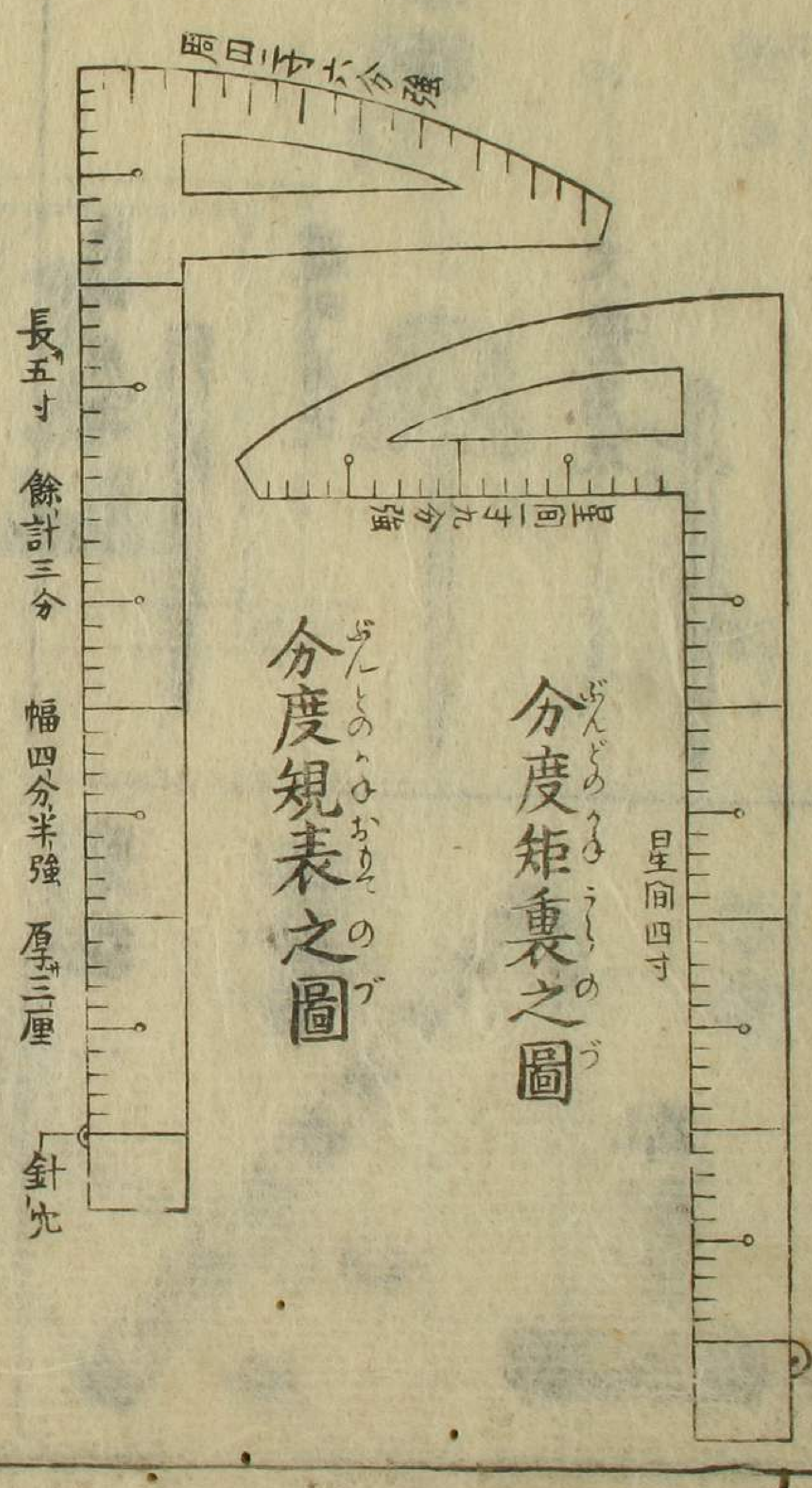
自是以端半剣去

標幟




遠鏡

量地指南巻之一終




量地指南巻之二

## 量盤術遠近法上

勢南　處士　村井昌弘編述

### 左右正開方

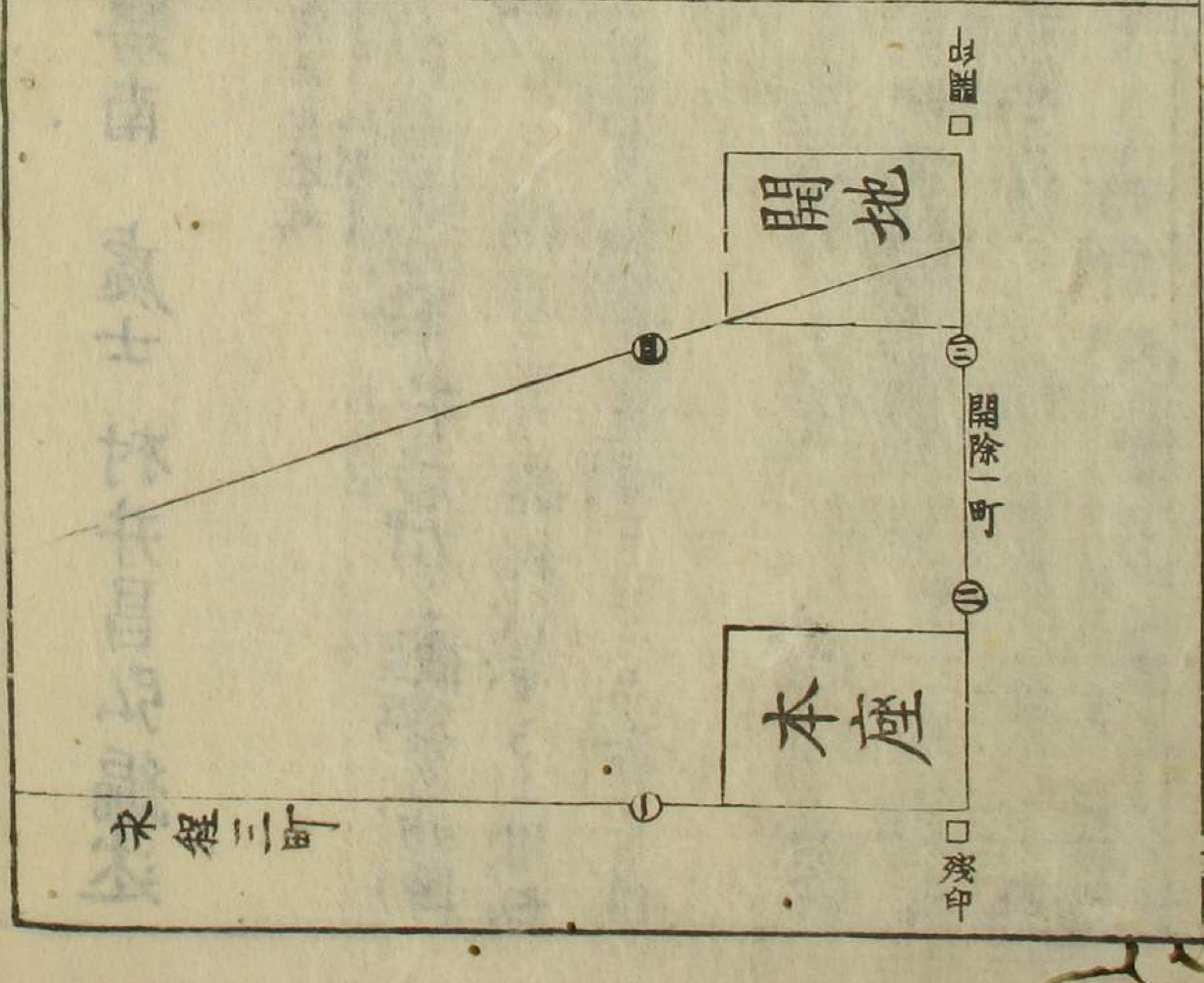
是ハ右正開の作法を述ぶ。左正開の法も准じて知べし

此術ハ廣野平易又ハ海濱田面等にて。左右に觀察の妨障なく。開地心に任せて求安き場取より。遠程を量るに用也。其法左右何れへ成とも。正當に開除して量るなり。委くは術中に記せを勤て知るべし

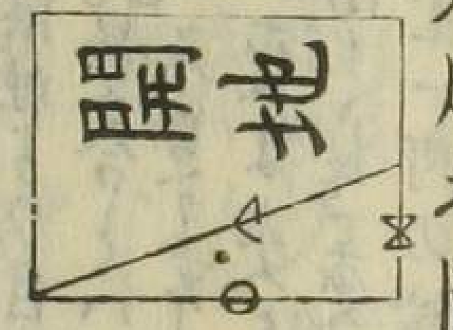
術云下に圖する（取をとりく云）往々初巻に述れおとく。先本座を選び目的を定め。本座より目的までの里町を大槩幾程ぞと先量し。（先量とハ空の目づもりを云。其法くハしく初巻にあるを）其遠近に應じて假に開除の地を求め。（開除の作法大畧古法の。三十分一に随ふべし）かされおとくに始計（始計とハ。本座を選び。目的を定め。開地を求る類ひさるべく

盤を居る以前の法を云。以下皆是になずらへしの作法
悉く整ひてのち。㊀本座に
盤を方正に居 盤南を彼とし。盤北を此とし。
盤東を左とし。盤西を右とし。毎術これにおなじ。定規を
ことごとく いはまをこれは用ゆべし。定規ハ見込。見通。再見。見返。
盤東より正に目的を見込
其盤を揺うぬやうに居置
見通の法おりくまぐく。本座の盤を。
もとうしも揺さゞれ事。毎術おなじ
㊁始計ふく假に 右方へさゝうとき正當に 定置
くるめる開地まぐく竿をめ(ぐ)く
正に間數 右間一町 を量り。彼方へ
開印を立させ。がごとく。今こゝに圖する求程の

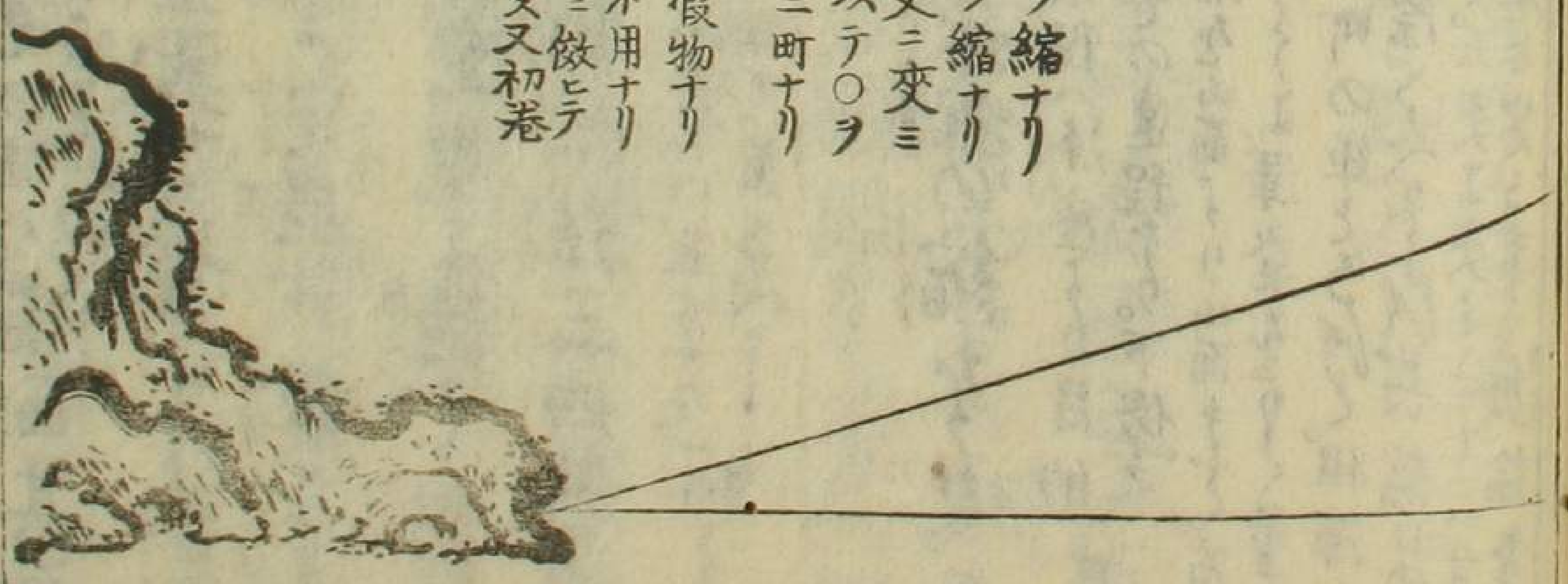
町数三町のときハ。開除の間数六間とする事。古法三十分一に相叶といへども。下に図すれ所ハ小畧なるゆゑなり。其織密なるハがくる畧して三分一を用ひ。一町の開と定む。往々後章にいふ取をまぐられゆるへひく。すなはち定規を見るの用捨あるべし 即定規を
盤北に載。正に彼印と見通。まのあたりにことを
開印と定規と。正に合ときハよし。
若不合ときハ。いくたびも彼印を進退せしめて。定規と 然りして
正に合ごとくさとくべし
本座に殘印を立る事 のこしおきて開地へ迁むとするとき。
毎術同じ。下是に倣へ㊂開地に
いたり定規を盤北に載せ
殘印を再見して盤を方
正に居。まへ。殘印と定規と。合ときハよろし。不合ときさハ。




大成之圖




此〼ロハ三也開除一町ノ縮ナリ
此○所ハ四也求程三町ノ縮ナリ
今渾発ヲ以テ〼ロヲ一変ニ変ミ
一町ノ矩ト名ケ其矩ヲ以テ○ヲ
量ルニ三変アリ三変ハ三町ナリ
是求程ノ町数ナリ
此△所ハ五也假借トテ假物ナリ
故ニ大成ノ後ハ省ヒテ不用ナリ
凡量知ノ作法毎術此例ニ倣ヒテ
察スヘシ委ハ本文ニ記ス又初巻
ニ往テ審カニスヘシ



幾度も盤を居直して残印と正にあふべし。尤此再見の法ハ。開地なく。盤を方正に居べき為の。作法のミにして別用にハあらざれ ㊃其再見あつる盤の定まる作法のごとく再見あつる盤をそこしも不揺して居置たり盤巽に會ふし必しも盤巽を會にあふべきにハあらざれ。目的の遠近開除の多少によりて異なるべし。爰ふハ図をる取によりくわふ斜に定規を載て見返。目的と定規の本と末と。三所を一平に成やうに。幾らびも定規を置直して。目的によく合すべし即定規に随て盤面に墨を引委しく初巻に記を盤面に墨を引作法。然するときハ鈎股弦三四五の形盤北ハ三なり。盤東ハ四なり。今引渡したる。盤中の墨ハ五なり。一かくの通。あつさ鈎股弦。三四五の事。或向の編にくわしく記を。往て見るべし

盤面大成を

今現れたる所の。三ハ開除右正開一町の縮なり。四ハ求程の縮なり。五ハ假借の縮なり。開除ハ本座より開地までの遠程。求程ハ本座より目的までの遠程。假借ハ開地より目的までの遠程なり。下傚之 其ハ三を開除の間數一町に量り合。量合とハ。其縮を山而より山而まで。有余も不足もなきやうに。渾発をもつて量るを云。其法渾発の口を開きて。此三を一夾に夾みて。一町の矩とさだめ。但渾発をとつて量り合する事。何れの術にても。一夾にハ際るべからず。其縮口の廣き時ハ。五夾すると十夾するともすべし。尤一町の縮口を。五夾に夾みたらバ。其口を十二間の矩と定め。十夾に夾みたらバ六間の矩と定る事。勿論なり

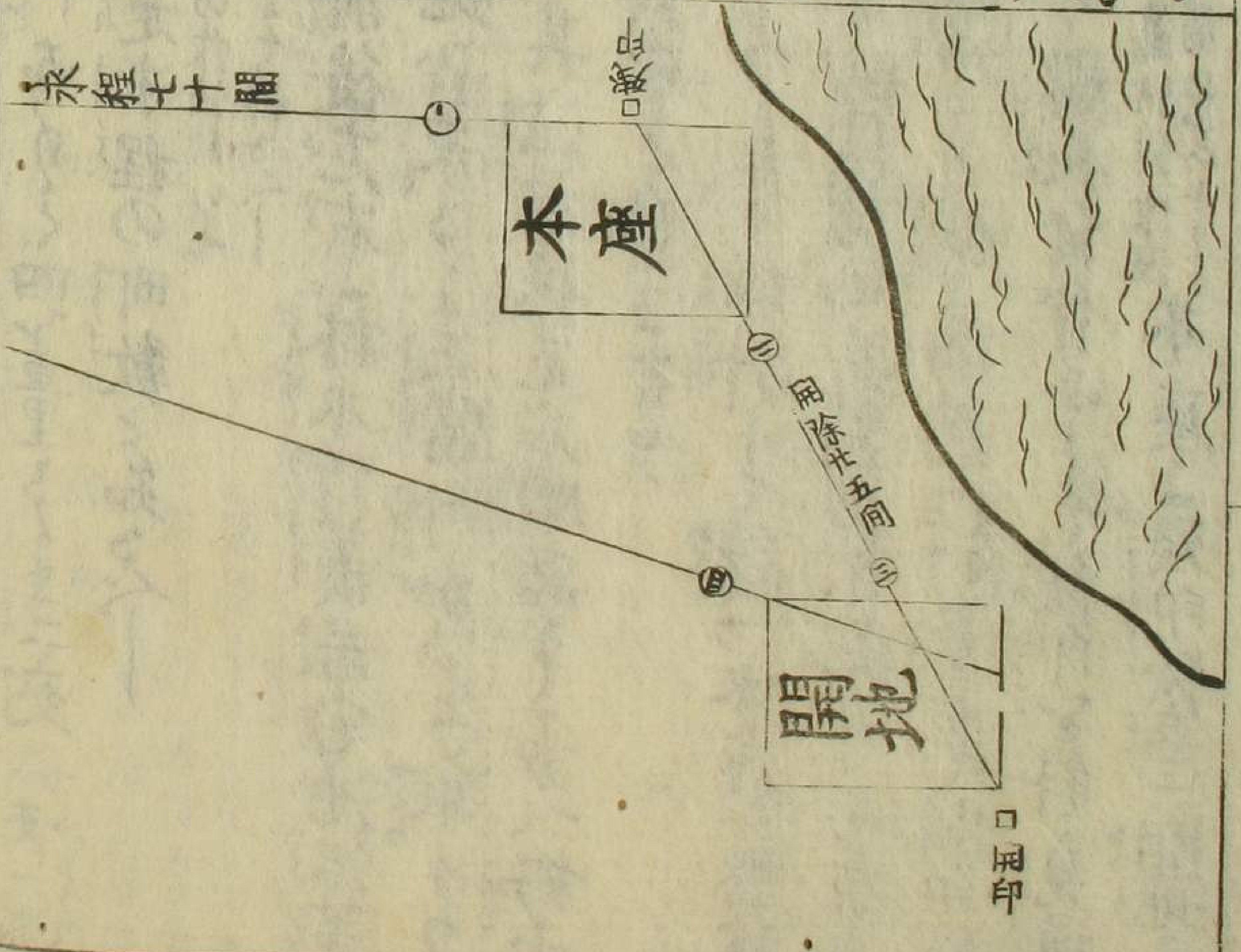
其矩 其矩とハ渾発を以て夾る口を云。下皆おなし をもつて四を量るに三夾 一夾一町なり ありて三夾ハ即三町なり是求程の町數と知るべし

〔左右斜開方〕 爰にハ左斜開の作法を以よ。右斜開も是によりて悟るべし

此術ハ本座の地形前後左右に。林木竹叢居宅池沼等のあるときの障になりて。開地を求るに正當叶がたき所あり。遠程を量るに用也。其法前後左右順路なる方へ好ふ從ひ。斜當に開地を求て量るなり

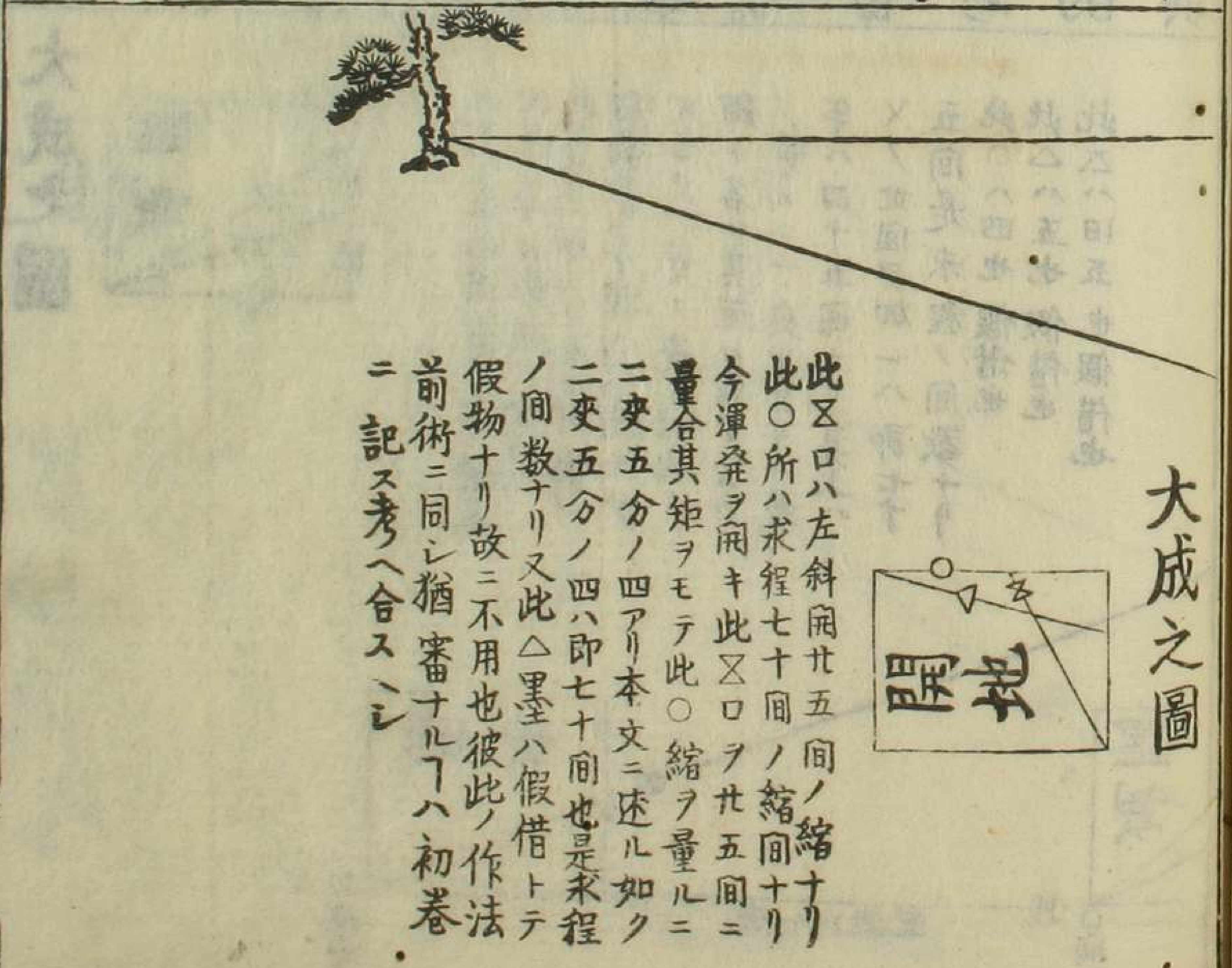
術云 下に圖をあらわす 作法れごとく品々始計して後 ㊀本座に盤を方正に居 耿をめぐる云 盤西より正に目的を見込。其盤を不揺やうに居置 ㊁假に 左方の斜後へ 定置たる開地まで斜に間數を 二十五間 量りて開印を立させ即盤西の中程より盤良を會にして彼印を斜に見通定規に随てひく墨を引 墨を引作法前のごとし 本座に残印を立 ㊂開地に

いふりく。本座よそ引るる盤面の墨よ定規をとりそく。残印抄再見して盤抄方正よ居。盤面の墨と残印と。一平よ不合時ハ。幾度も盤抄直して。方正よ居る事。前のごとし　四其盤北より盤坤を會ふして斜よ目的抄見返し。定規よ随ひく墨抄引然もる時ハ斜よ三四五の形盤西より盤坤へかきりく。斜よ小く現きころ抄用ゐ。盤北より盤乾へかきりく。ひろりまころをハ不用現きと盤面大成をを今現るを取れ。三八開除






左斜開廿五間の縮なり。四八求程の縮なり。五八假借の縮なり。其三を開除の間數廿五間よ量合。渾発をかけく。此三を一変よ名ゐる事。前よいふが如し　其矩変ゑ。其口抄廿五間の矩と其三抄変ゑゐるをもく。四抄廿五間の矩なり量るよ二変五分の四なり。五分の四とハ。右二十五間の矩を。五分よわりて其四分をいふなり二変五分の四八即七十間二変八五十間なり。五分の四八廿間なり。都合遠程七十間と知なり。是求程本座より目的の遠程の間數と知るべし




大成之圖

此〼口ハ左斜開廿五間ノ縮ナリ此○所ハ求程七十間ノ縮間ナリ今渾発ヲ開キ此〼ロヲ廿五間ニ量合其矩ヲモテ此○縮ヲ量ルニ二変五分ノ四アリ本文ニ述ル如ク二変五分ノ四八即七十間也是求程ノ間数ナリ又此△墨ハ假借トテ假物ナリ故ニ不用也彼此ノ作法前術ニ同シ猶審ナルコハ初巻ニ記ス考ヘ合スヘシ

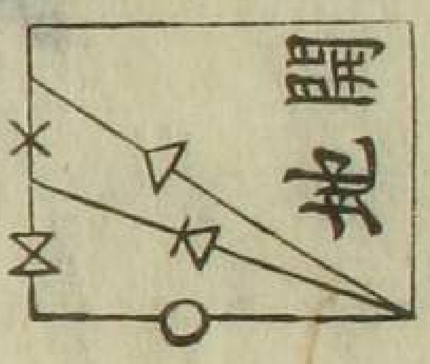
## 前後當開方

後當開もこれに准じて知るべし

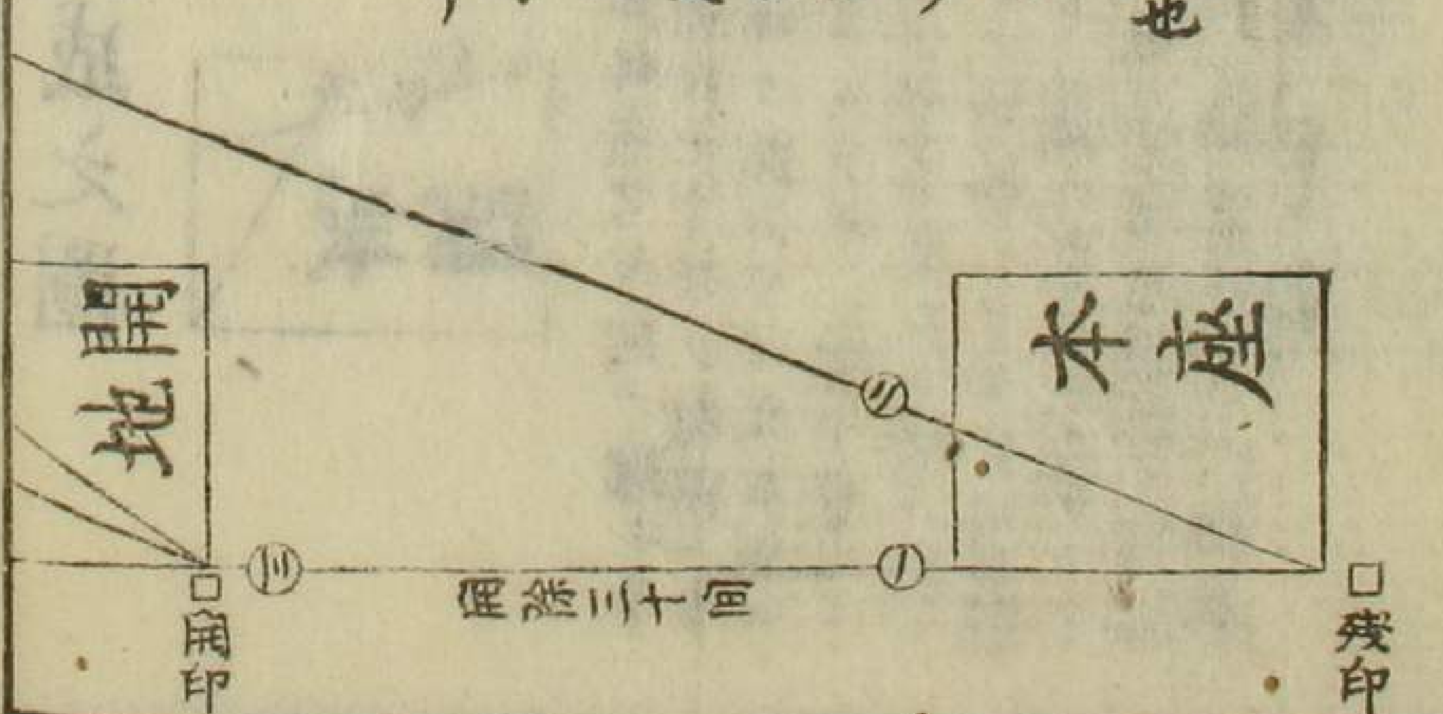
爰に八。前當開の作法をいふ。

此術ハ本座の地形或ハ畷塘田疇又ハ窄道橋上等にして左右へ々正する事を斜にする。開地求かたき所より遠程を量るに用也。其法前後何れへ成とも勝手よろしき方へ正當に進退して開地を求め量るなり。但此術ハ目的の外に假目的を定め其

## 大成之圖




此×ハ差也開除卅間ノ縮也
又⊠ト合メ求程ノ縮トス
此⊠ハ三也×ト合メ求程ノ
間数ナリ今渾𥘉ヲ開キテ
×ロヲ一夾ニ夾ミ卅間ノ
矩ト名ケ其矩ヲ以テ⊠ロ
ノ量ル二一夾半アリ一夾
半ハ四十五間ナリ其上ヘ
×ノ卅間ヲ加レハ即七十
五間是求程ノ間数ナリ
此○ハ四也假借也
此△ハ五也假借也
此▽ハ旧五也假借也

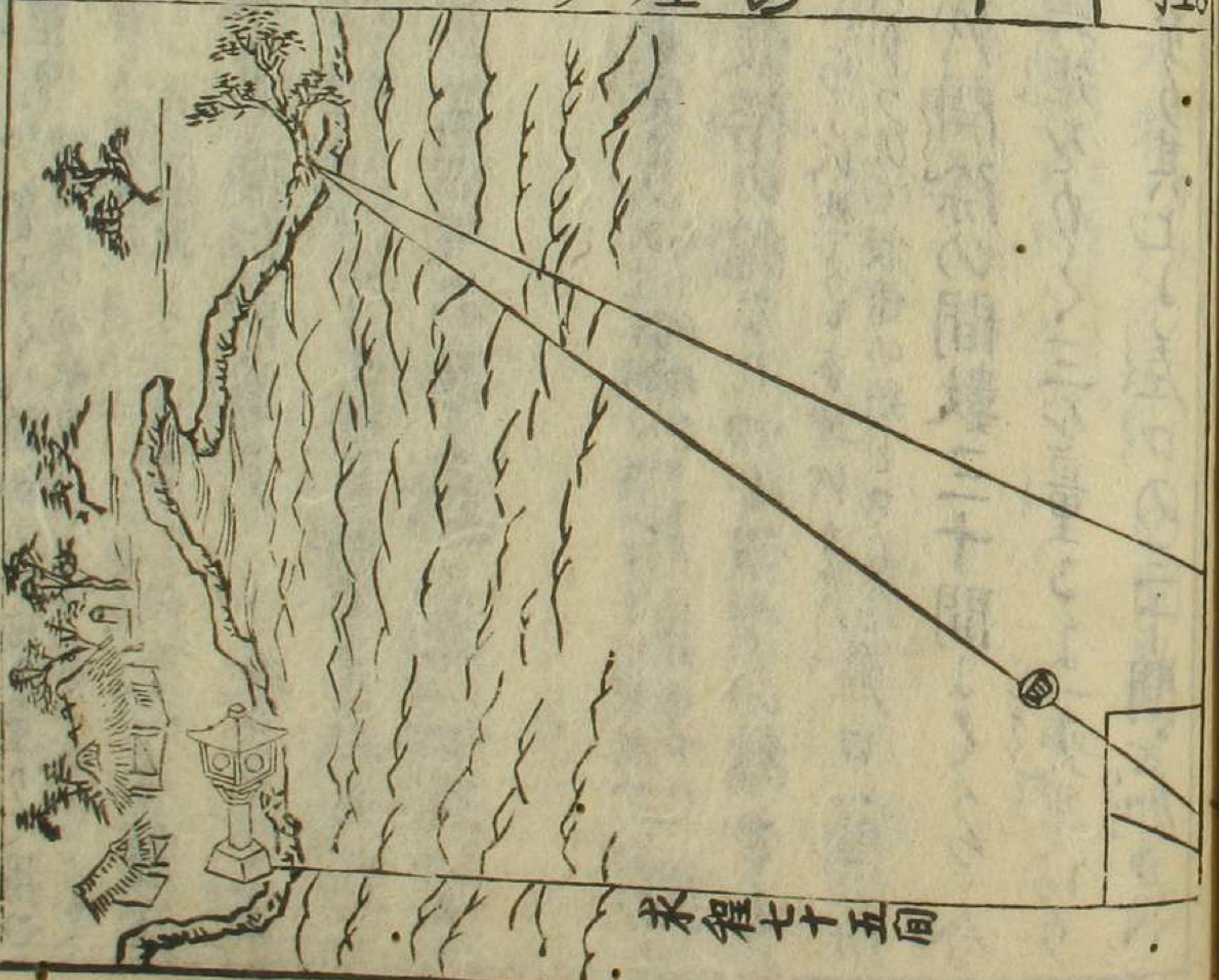







両目的の間の間數を種々として進退の間へ移し量るなり其くハしき事は術中に記す

術云下に図する品々作法のごとく始計して後㈠本座に盤を方正に居盤東より正に本目的を見込其盤を搖に居べく事。㈡其盤良を要前のごとくにし定規を斜に載せて假目的へ見込墨を引夫より正を不外やうに彼方へ竿を



をく何程にくも間數を量り。今爰にくハ。前間三十間ニ量りて用ゆ。（此前間の間数をまてミ三十分一と吉口とゝを）開印を立（此時ニ本座の盤を其侭ニ居置。見通の心にく、盤東より本目的と此間印と定規と。一平ニ見渡ふるハ弥よくよろし）本座に殘印を立置直（三）扨開地ニ迂りて殘印を再見して盤を方正に極（四）盤良を要（最初本座にて見込みつる墨を要とも）にして假目的を見返定規に随ひて墨を引。然るときハ三四五の形と別に差一口現ず。即盤面大成を

今現れたる所の三ハ求程の縮なり。（此三本理に随ふときハ求程の縮にハたがはじ。然れども其法を用ゆれバ遂て其術鑿ゑるゝが故に今略法をこゝろひく三を求程の縮とも）五ハ假借の縮なり。四も假借の縮なり（四もまた本理をいふときハ假借にハあらじ。然れども本理をかてしやされバ其術鑿かるがゆへに。略法をもちひて假借の縮とせり）差口ハ開除（前當間三十間）の縮なり。其差口を開除の間數三十間にもろるに合（渾発をめく此差口を一変に変ハ其口を三十間の矩とすと）其矩をめく三を量るに一変半なり（一変弐間なるり）一変半ハ四十五間なり。其上に差口の三十間を加ふれハ。

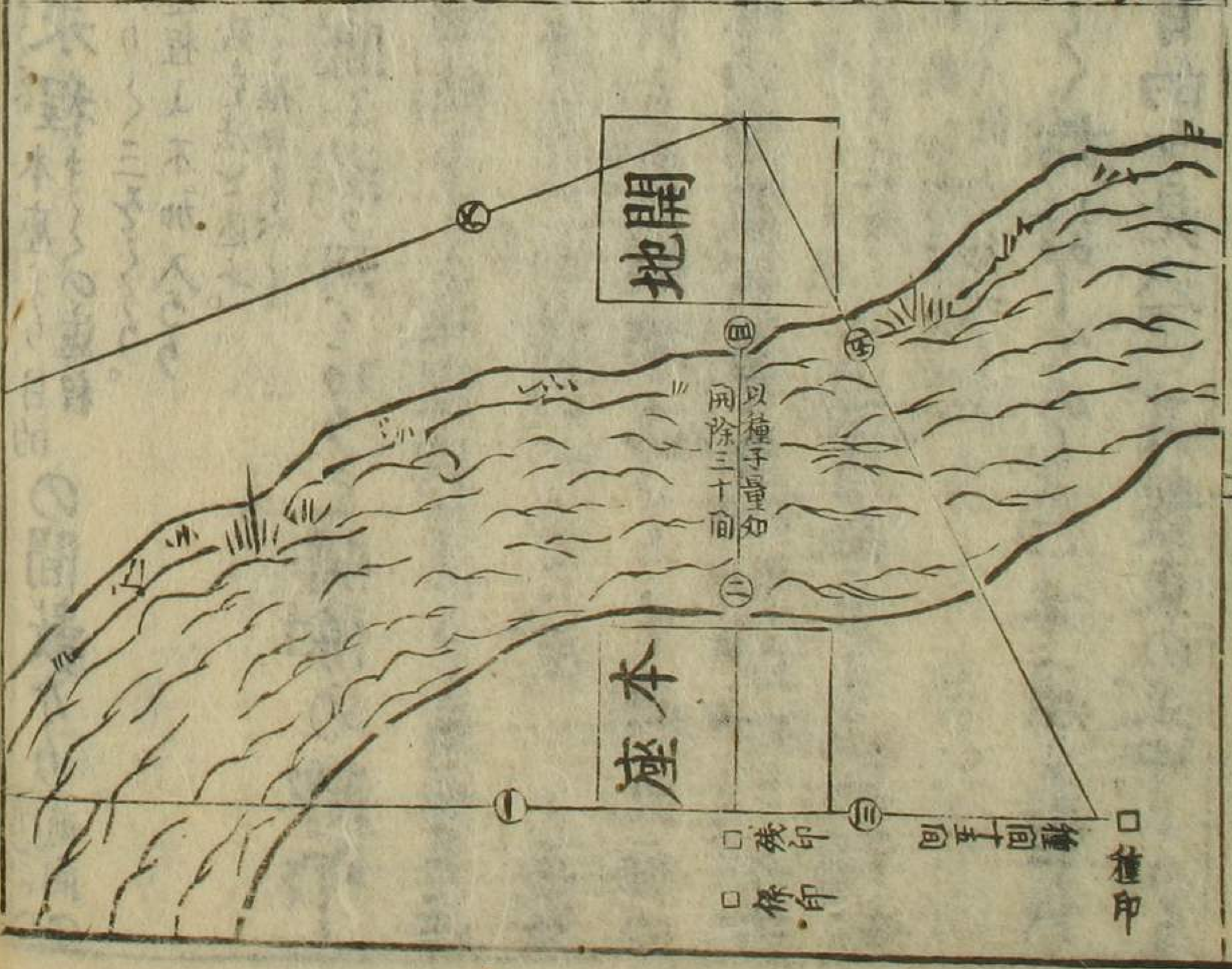
都合七十五間なり。是即求程（本座より目的までの遠程）の間數なり（所詮ハ前間の作法なり。後間の量法ハ。差口をのぞく三をとる。即是を求程とし。差口をハ其遠程に不加入ゆゑ）

殘子一開方（爰にハ後に種を残すと法を述ふ。前に種と残との法も推知すべし）

此術ハ本座と開地との間に沼か河かありて開除の間町幾許もはかりがたき場所にて遠程を量るに用ゆ。其法開除の間數に應じて。本座の前後いづれへ成とも。正當に間數を定め。種印を立置。開地にいたる時。此種の印を見返てまづ開除の間數を量知（種印を間とるして開地の間数と知れ。）然してのち其求程（本座より目的までの遠程）を量り知るなり（開除の間ハ沼河などのはかりなくとも。開除の間数あらはさバ。此術を用る事可なり。くハしくハ勘て知べし）

術云（下に図をあらはす所とかく云）作法のごとく始計してのち（一）本座に盤を方正に居。盤東より正に目的を見込（二）其盤東の正中よりも

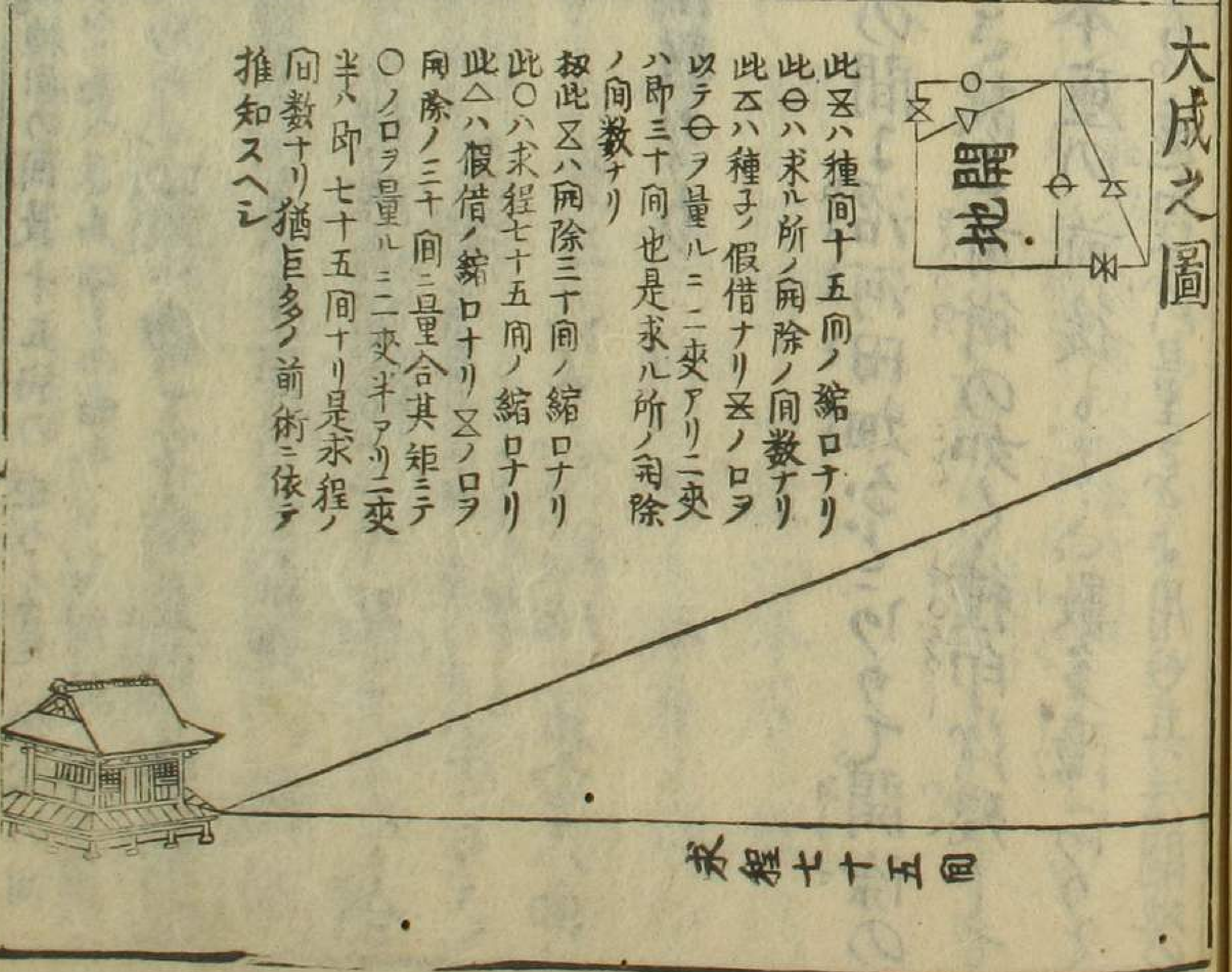
もとし下なく正ゝ開地右の方ゝありを見通此開地の印ハ。何ゝても其地ゝ有合せる品物を用へし。若其品なくハ本座ゝ係印を残すべし定規ゝ随て墨を引㊂次ゝ間数を定後當開十五間本座の後ゝ正ゝ種印を立させ。○此種印ハ本座の前ゝ立ても其術ハおなじ。本座より種印まての間数ハ大旨開除の間数を空眼ゝつもりて。半分乃又ハ三分一ほどを用る事よろしと云本座より此印をとも亦正ゝ見込然してのち残印を立開地の印をなくハ係印をまた立べし㊃開地ゝ移り。盤中ゝ引る墨ゝ定規を






當残印を再見して盤を居㊄其残印を再見しられ盤西の墨乃端を要ゝして種印を見返墨を引㊅又同所を要ゝしゝ目的を見返墨を引然る時ハ盤東と盤西と上下両所ゝ三四五のかゝらいつゝまで盤面大成を今現る所の。盤上の三四五ハ本座開地種印の縮形なり其三と種間本座と種印の間の間数

大成之圖



の間数十五間に量合其矩（此矩は種間の間数十五間の矩なり。是ハ開除の間数をも知へき為のこの矩にして。別用あらん）をめぐ其四が量るに二丈なり。二丈八即三十間是開除の間数なり（此三十間と。本場の三の縮口に名付て量合なり）盤西の三四五八本座目的開地乃縮形あり。其三が種の為に量知る。開除の間数三十間となるに合（三の縮口長短いりなと有とも。種の為に量得る間数にあるを合をとなり）其矩（盤西の三が一丈に求べて三十間の矩なり）をとめて。其四（盤西に現る四八求程の縮口なり）を量るに二丈半。なり（一丈弐間つもり）二丈半八即七十五間なり是求程の間数なり

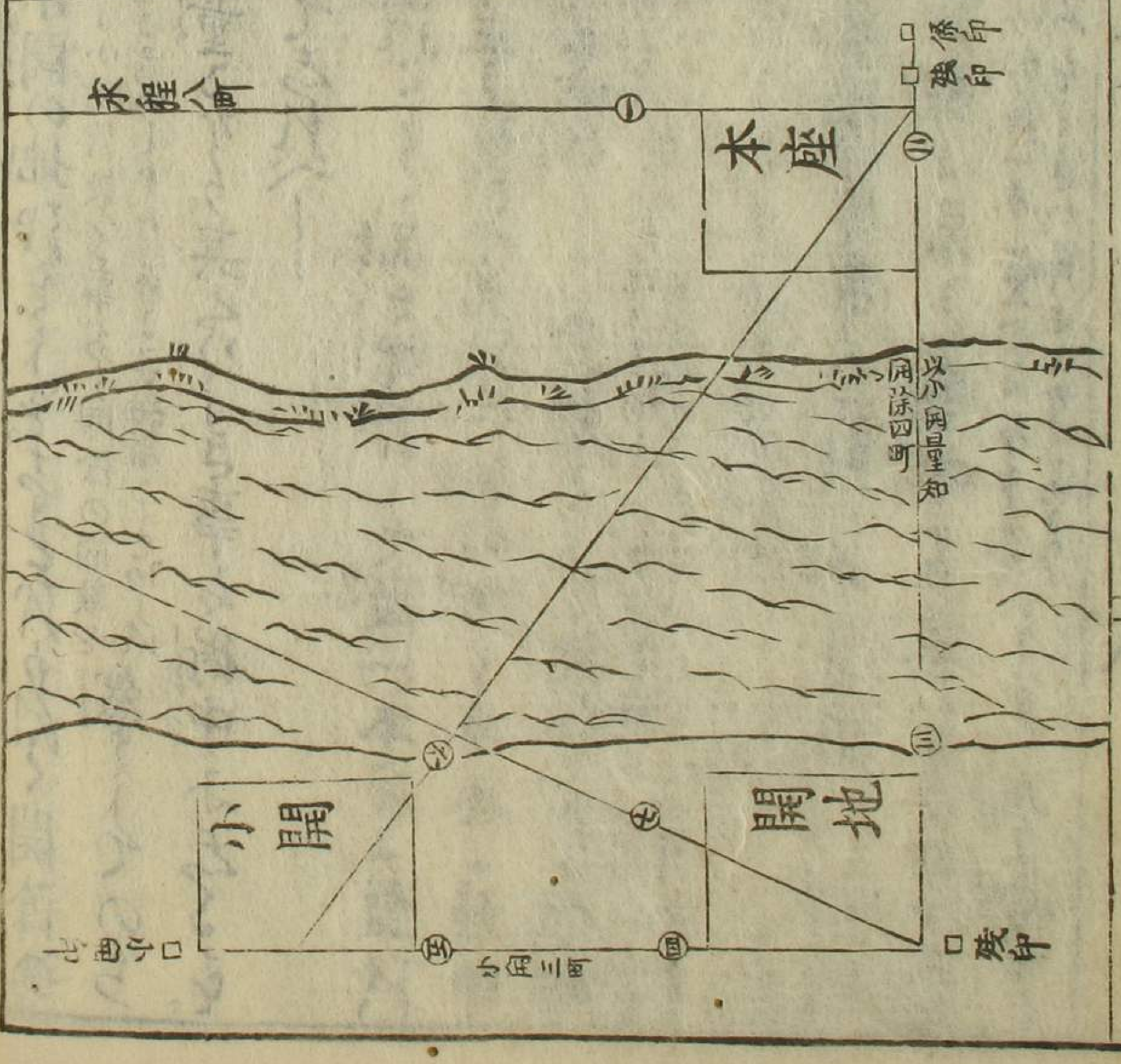
## 正當両開方

此術ハ本座と開地との間に沼河田畑などありて。開除の間数幾許とも量がたき故に前術の如く種印が残して開除べきとすれども。本座の前後もなく。数多障ありて其事成がたき所あり。遠程が量るに用ゆ其ハ法開地の外に。又正當に小開の地がとらへを。あらとがめぐ開除の間数が量り。（別に小開が設る事なで開除の間数をしるし量る為のことなり。外に子細有るにあらん）然らしてのち其遠程が求め量るなり。其くわしき事ハ術中にあるを。猶又圖を按してしるべし

術云（下に図をとる取とめく云）作法のごとく品々始計して後㊀本座に盤が方正に居。盤西より正に目的を見込㊁例の如く本座に残印（此残印の立やうもまさ毎術におなじ）を立其印より五七間ばかり除ひて正に係印（残印と係印と間の間数ハ。まより猶多少の心得有べし）を立（此二本の印正に定りがたし。不合時ハ々開地の正當尤念が入て立置べきなり）拐開地の印が見通ごとく。本座の盤（本座ふく目的を見込されば盤がハ少しも不揺して居置）而く彼二本の印と盤面の定規と三所一正に見渡（此見渡即見通のこころなり）

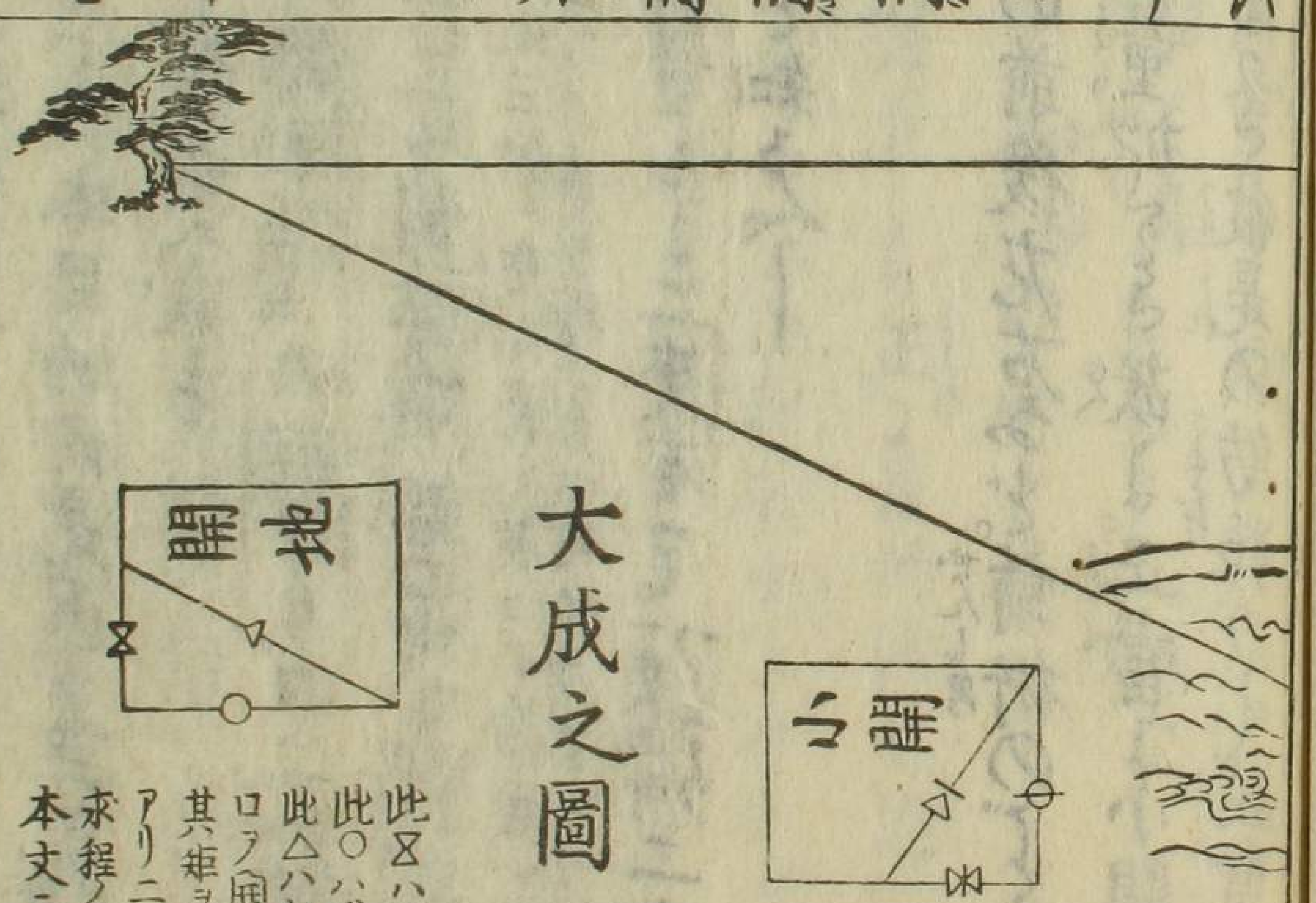
㊂開地まいらり盤が假に居て。盤北より彼二本の印と三所一正に再見し。（二本の印が一本に見ゆるほどに見ゆるをとさハ。即正になるなり）よく正に合せく

盤は方正に極（四）然して其盤の彼方正面に小開の地は求め（前當開三十間）印を立て（開地の印より小開の印まで間縄間竿を用ひて何ほどにも間数を定むべし。大躰其間数ハ本開の半分か三分一程を其法とすべし）開地より正に是を見通。（五）扨小開の地に行り盤は居て開地印を再見し（開地印は残印として再見を）（六）又盤面に定規を




載て本座の残印は見返墨は引爰りおのく種の三四五の形現れる。三八小開の縮なり。四八本開の縮なり。此三を小開の三町に量合其矩（小開の町数三町の矩）にて四は量るに一変三分一あり。（二変ハ三町より三分一ハ一町より）即開除の川幅四町と量知れ（此四町を後の三量知れ縮口になげく）

大成之圖




此⊠ハ小開三町ノ縮口ナリ此⊖ハ求ル所ノ開除ノ間数ナリ此⊠ハ小開ノ假借ナリ⊠ノロヲ以テ⊖ノロヲ量ル二一変三分一アリ一変三分一ハ即四町ナリ是求ル所ノ開除ノ間数ナリ此小開ハ開除ノ間数知サル故ニ此術ヲ用テ量リ知ルナリ開除ノ間数ヲ量リ得テ後ハ此図形ハ不用也

此⊠ハ開除四町ノ縮形ナリ此○ハ求程八町ノ縮形ナリ此△ハ假借ノ縮形ナリ⊠ノロヲ開除ノ川幅四町ニ量合其矩ヲモテ○ヲ量ルニ二変アリ二変ハ即八町ナリ是求程ノ間数ナリ委シクハ本文ニ就テ明ラムヘシ

⑦然して後開地に立帰り。初のごとく盤が方正に居。定規が斜に載せて盤艮より本目的が見返墨を引。然ざるときは三四五の形現ずを。盤面大成を
今現在る所の。三八開除（左正開 四町）の縮なり。四八求程の縮なりて五六
假借の縮なり。其八三を開除の川幅四町に（此四町ハ種の為に小開して別にかう知る町数なり）
量合（渾発がかく此三が一変に変じ。其口の廣狭いろ程成とも。種の四にかく量り得たる四町の矩となげく其矩（の矩なり）川幅四町）
をとりて其四が量るに二変有て。一変四町つるり二変ハ即八町なり。
是求程の間数と知るべし

**正斜両開方**

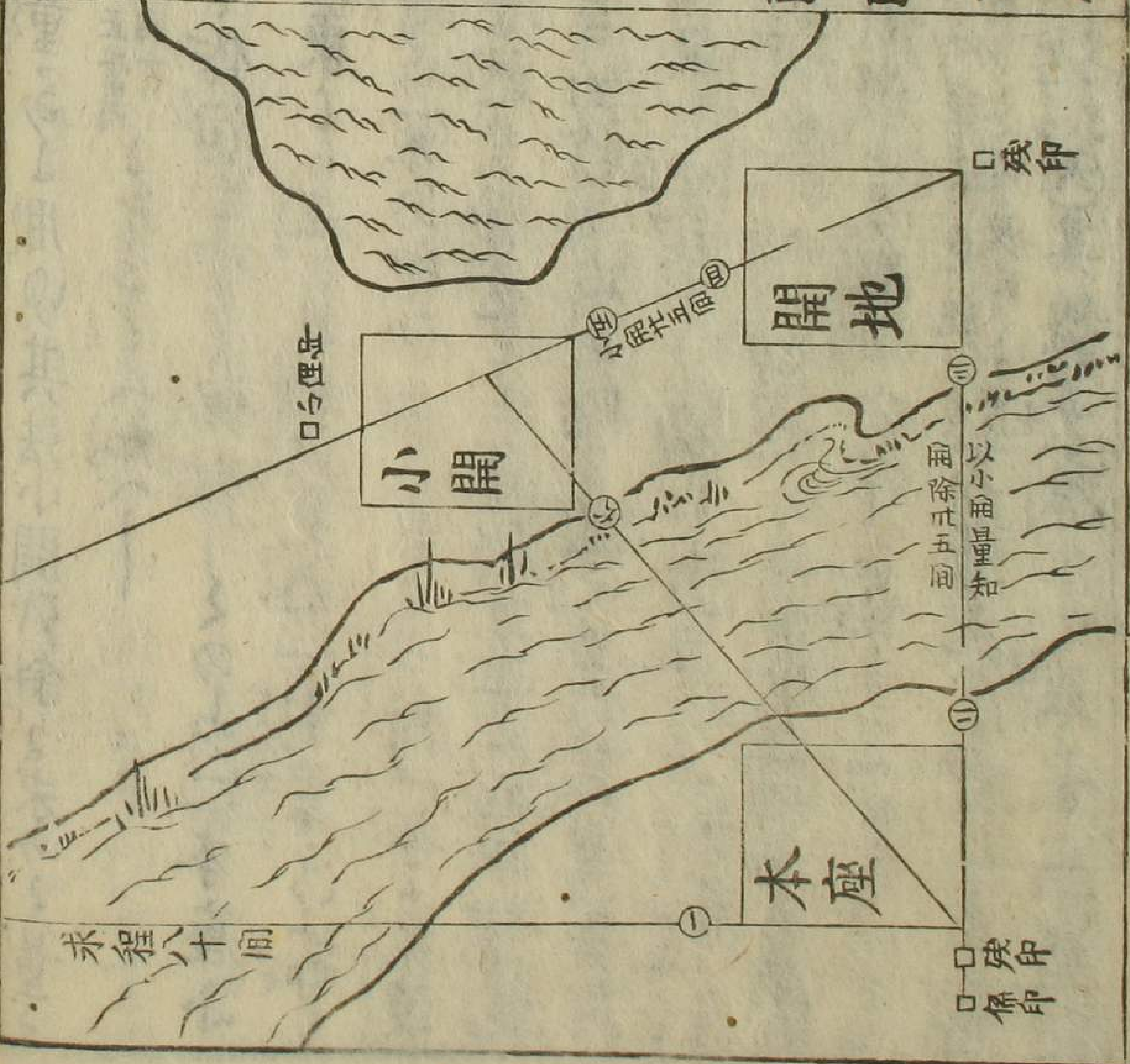
此術ハ本座の前後左右なれど。前術のごとく不障りおほく。開除の間数量がたき故に。正當に小開がなさしむとすれども。其地にまりて彼是の妨げありて。正當開叶ひがたき



所より遠程が量るに用ゆ。其法小開が斜に求めて量るなり。大略前術（正當両開方）になぞらへ知べし
術云（下に図をあれ 所をわかく云）品々作法のごとく始計しそのち㊀本座に盤が方正に居。盤東より正に目的が見込㊁前章にいふ如く其所に残印と係印と二本の印が立させて。三所一正に見渡（是見通のことなり）㊂扨開地に迁り。再見して盤が方正に極㊃盤乾を要にして斜に本目的が見返定規に随て墨が引其墨が條理にして彼方へ間数を定斜に小開印が立させ（正に小開を求る事ならず しといへども。今其全地なさざる故に。不得止して此墨に随がい。斜を用ゆ）地にいたり。開地にて引渡する。盤中の斜の墨に定規をつけて。㊄即小開の開地の残印（此残印ハ。本座より見通ぜる開印なれども。今残印とする）を再見して。盤を正に居。又此所において。本目的を見返するときハ。盤面いよいよ方正になるなり㊅其盤を不搖して直に本座の残印

をを見返定規に随て墨坂引。然するときハ盤の南北両所に三四五の形おのづから盤面大成すと

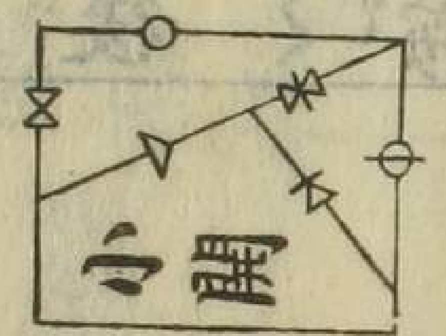
今現るゝ所の盤北の三四五八。本座開地の小開の縮形なり。其三を小開の間数二十五間に量合其矩をそ其四を量るに一夾と五分の二あり。一夾ハ廿五間



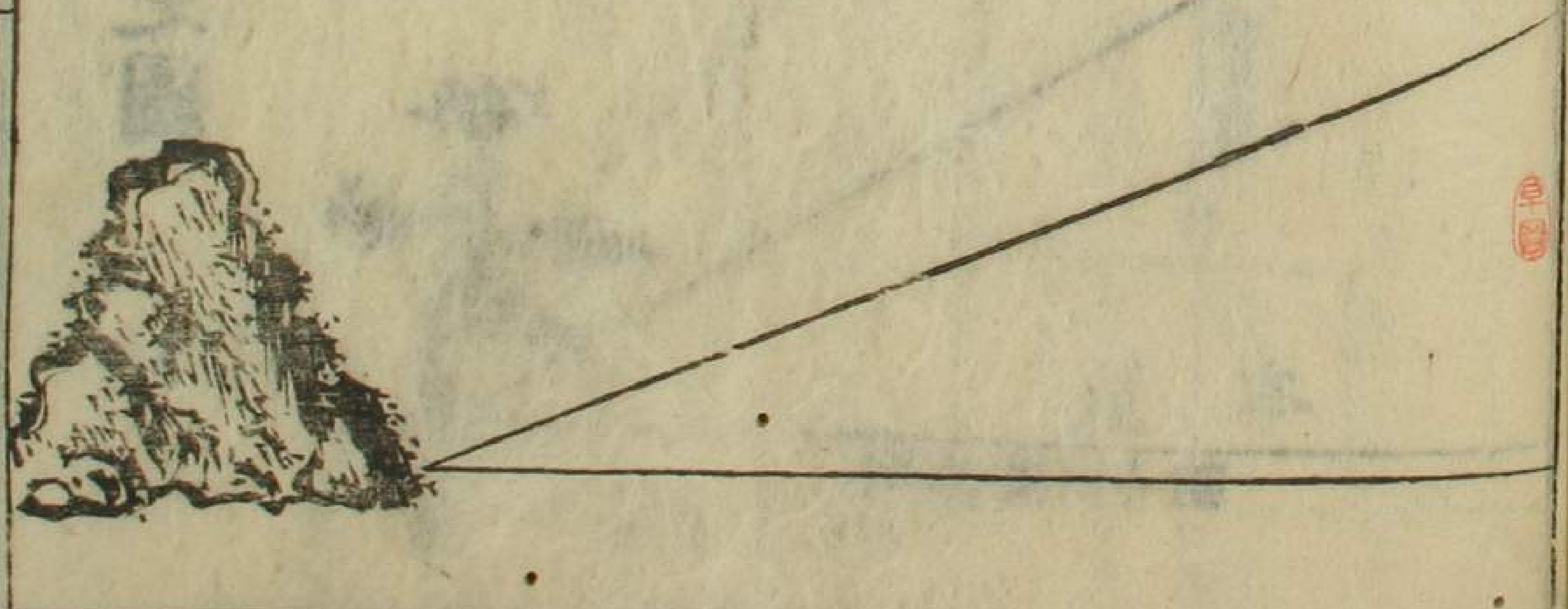



五分二ハ十間なり 即開除の間數三十五間と量知。此三十五間を後の三の縮口となづく 扨亦盤南の三と。開除乃川幅廿五間に量合 量合の作法。往々前術に述る所に准して知るへし 其矩 開除の川幅廿五間の矩 によく四を量るに。二夾と七分の二あり。二夾ハ七十間 七分二ハ十間なり 二夾七分二八。即八十間なり。是求程の間數なり

## 大成之圖




此⊠ハ小開廿五間ノ縮口ナリ
此⊖ハ求ル所ノ開除ノ間数ナリ
此△ハ小開ノ假借ナリ⊠ノ口ヲ以テ⊖ヲ量ルニ一夾五分ノ二有リ一夾五分ノ二八即廿五間ナリ是求ル所ノ開除ノ間数ナリ
扨此⊠ハ開除廿五間ノ縮口ナリ
此○ハ求程八十間ノ縮口ナリ
此△ハ假借ノ縮口ナリ⊠ノ口ヲ開除ノ廿五間ニ量合其矩ヲ以テ○ノ口ヲ量ルニ二夾七分ノ二アリ二夾七分二八即八十間ナリ是求程ノ間数ナリ猶又本文ニ考合スヘシ



# 両知一開方

爰には左右を量る法なり。前後を量るも其術もおなし

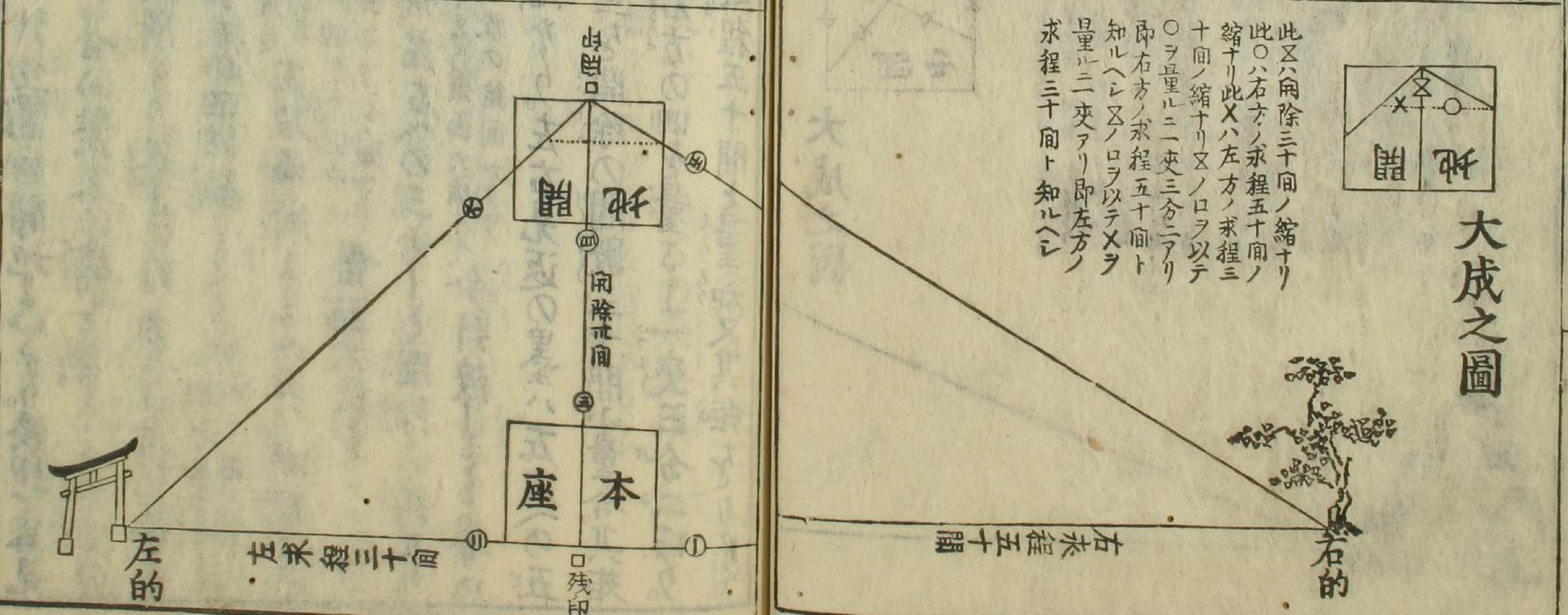
此術ハ今此所よりして或ハ左右の遠程を量或ハ前後の遠程なと知むと欲するに。一術をもつて両旁の求程を。一同に量知るに用ゆ。其法本座を正中に敷て。左右にても前後にても。心に随つて操て量るなり。猶又図を按

もつて工夫をなすべし

術云（下に図する所をかく云）まづ作法のごとく品々始計してのち㊀本座に盤を横に方正に居。（盤南を右になし盤東を彼になし　盤北を左になし盤西を此になす）盤西より右方の目的を正に見込㊁同所より左方の目的を正に見込㊂扨開除の間数（前当開三十間）を定て。彼へ正に開印を立させ然して盤の東西の正中に正横に墨を引渡し此墨に定規を當て。

## 大成之圖

此✕ハ開除三十間ノ縮ナリ此○ハ右方ノ求程五十間ノ縮ナリ此✕ハ左方ノ求程三十間ノ縮ナリ✕ノロヲ以テ○ヲ量ルニ二夾三分ニアリ即右方ノ求程五十間ト知ルヘシ✕ノロヲ以テ✕ヲ量ルニ二夾アリ即左方ノ求程三十間ト知ルヘシ



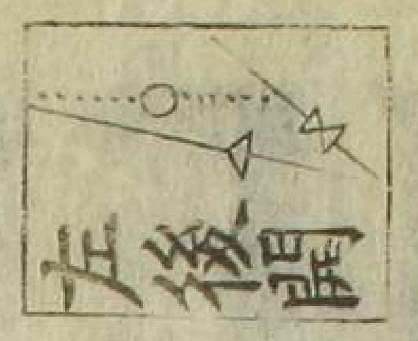
開印が見通。本座に残印が立置㊃開地にいたり。残印を再見して盤が正に居㊄正中の墨の盤東の端を要にして右方の目的が見返墨が引㊅同所より左方の目的を見返墨を引。
(界)然して割盤法がりく。左右の四が極るときハ。（割盤法をかく四を極るとハ。左右の見返の墨を図のごとく横に界を引つらし。切ちぢめくたるところなり）左右両所に三四五の形現ハる。（左右となる。今引渡しくる界ハ四なり。正中の墨ハ三なり。左右見返の墨ハ五なりと知べし）盤面大成さと今現るゝ所の正中の墨ハ。左右への三にして開除の縮なり。（盤の正中に家初引つるしたる竪墨。盤面大成してのちハ。左右の三となる。これ即開除の縮間なり）今引渡しくる界ハ。左右への四にして求程の縮なり。左右見返の墨ハ。左右への五にして假借の縮なり。其ハ三を開除の間數三十間に量合。其矩（開除の間數三十間の矩）をとれば右方の四を量るに一丈三分二なり。（一丈ハ三十間なり三分二ハ廿間なり）即右方の遠程五十間と量知。又其矩をとらく。（右方の四が量りくる開除三十間の矩なり）左方の四が量るに一丈なり。（一丈ハ三十間なり）是即左方の遠程三十間なり。爰に於て左右の求程倶に知得し（をよそ割盤法をかくする術ハ。此盤法が用ひても其理同事なり。爰に書中混さる故に其事を省く。くハしくハ或向にあるさ）

## 一知雙開方

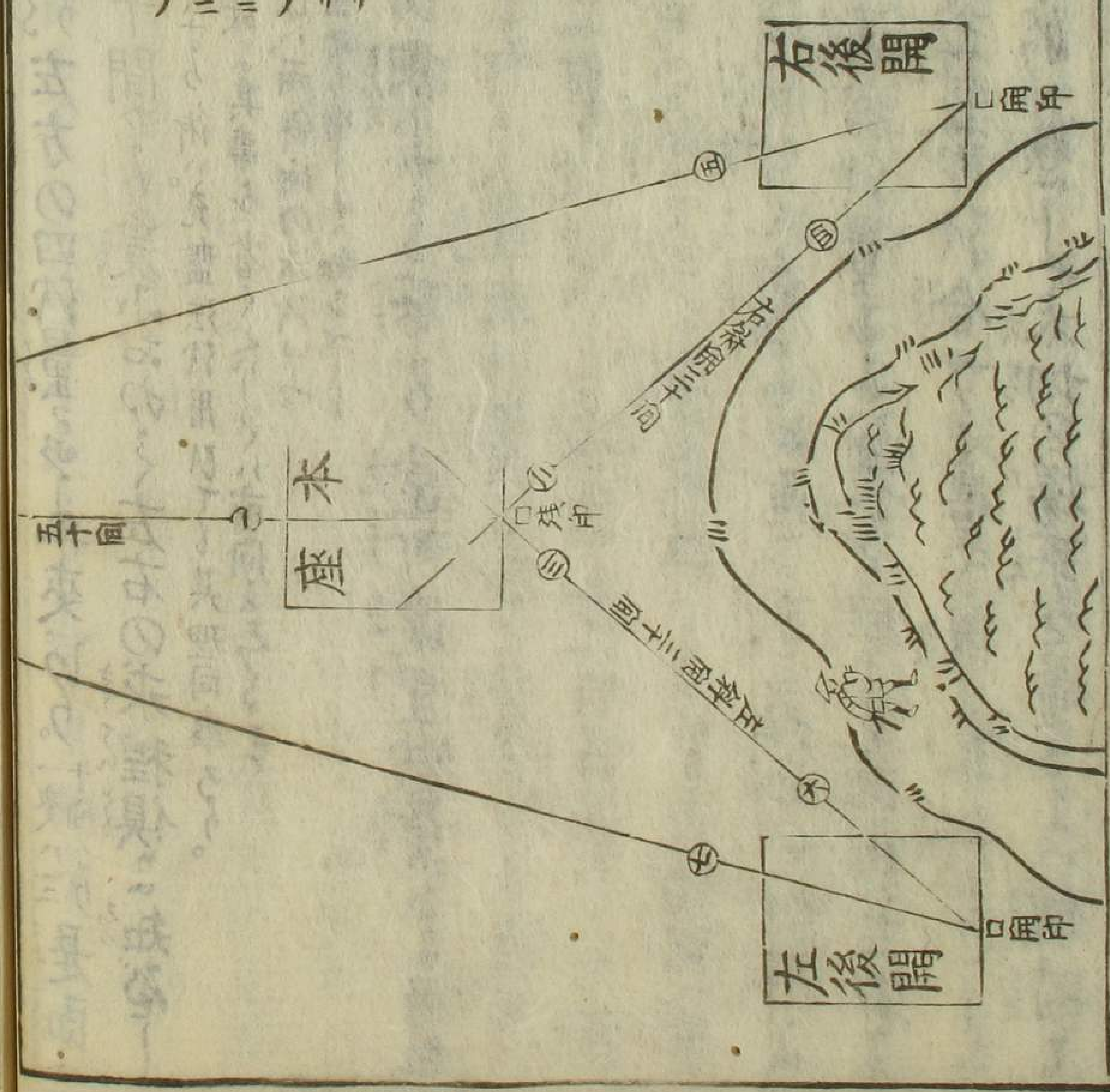
（爰にハ。両斜開の法がいふ。両正開も准して知るべし）

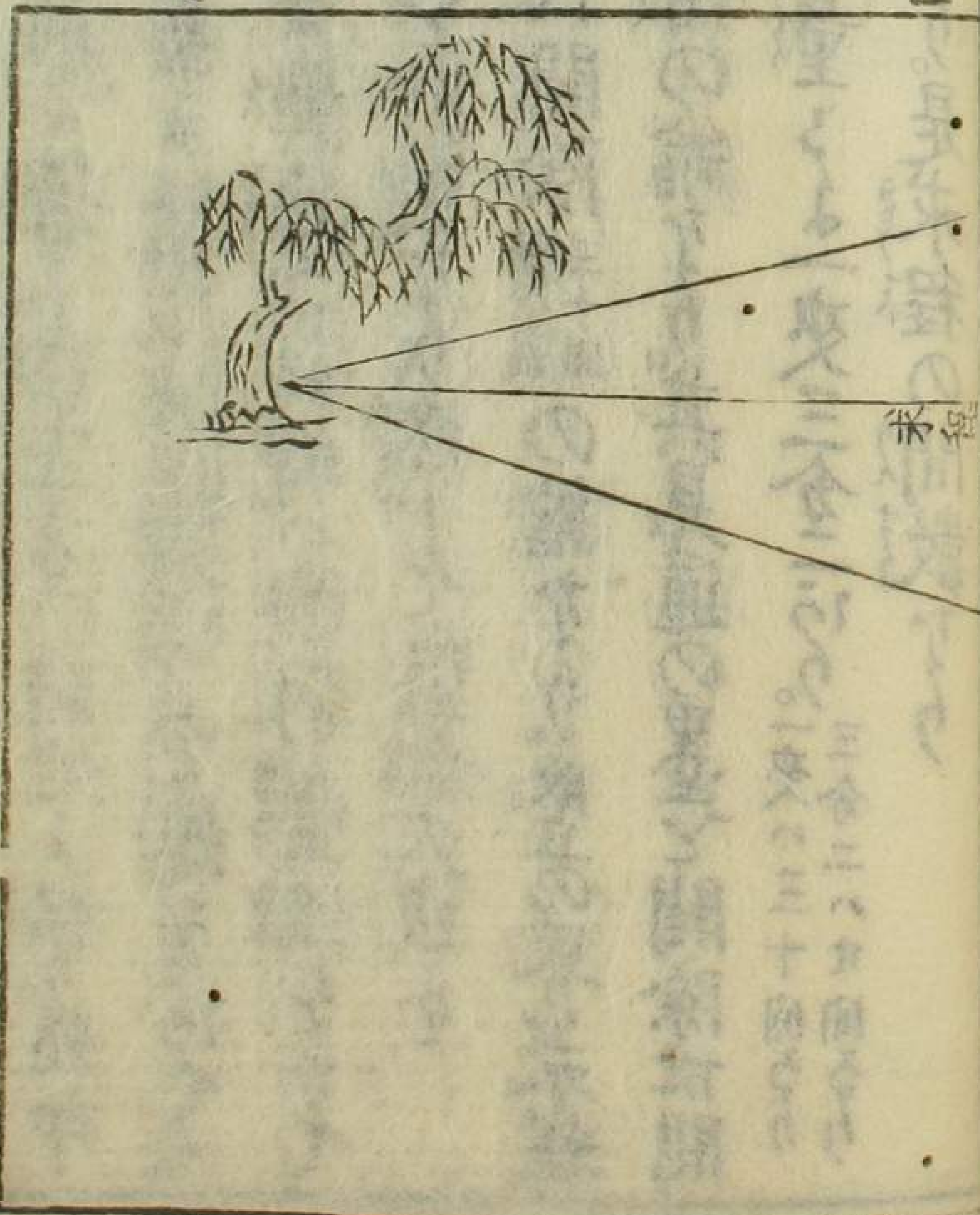
此術ハ本座の狭小なる所より遠町遠里が量るに用也。をよそ一里またハ遠程が量らむと欲するときハ。其開除の地径三町を求むべし。是三十分一の古法なり。然どと見渡三町の間に全く眼目のはなれたる場所ハ平陸易地といへども充すくなきものなり。故に狭小の地形にして莫大の遠程が量るには是を佳とす。此術ハ左右に開除を求め。其符節が合せて量る故に。事術ごとにしも差異なる事なし。惣じて太切の場所を量るにハ。何時も

# 大成之圖



此〆ハ開除三十間ノ縮ナリ
此○ハ求程五十間ノ縮ナリ
此△ハ假借ノ縮ナリ此〆ノ
斜ロヲモツテ此○ヲ量ルニ
一寸三分二アリ一寸三分二
ハ即五十間ナリ是求程ノ
間数ナリト知ルヘシ



此法然る簡し又いぶかし の術なくと家初量置 くる法とし眼力のみや まり有哉と疑ハしき 事等にあらバ此法とめて 改正すべし。其中否立 どころ小頭ふ旁として 良法と謂べし

術云（下ニ図をあれ又如かく云）まづ盤の正中ニ（盤ニ南より盤北へ正取立ニ引渡あり）墨かね引きて㊀作法のごとく本座ニ盤を方正ニ居。其盤中の墨ニ定規を當く正ニ目的を見込㊂斜ニ右後へ間數（右斜開三十間）を定。開印を立させて。盤中の墨の盤北の端を要ふして盤東より是を見通

㊂斜に左後へ右後を同間に開印を立させ盤中の墨の盤北の耑を要にしてく盤西より是を見通㊃扨右方の開地に遷りて。殘印を再見して盤を極㊄其再見の墨は耑と要にして定規をはらく本目的を見返墨を引。然して今見返る盤西の墨を。毫釐も違いなきやうに盤東に摸し㊅左方の開地に移り。殘印を再見して盤を極㊆其墨に右方の見返の墨をうつしさる墨なり定規をとりてく。本目的を見返扨左右の墨齟齬ある時は㊚剸盤法をかて見返の墨の盤南の端より見通の墨へ正取立に界を引渡なり。然して盤面大成さを今現るゝ所の。見通の墨は開除両斜開三十間の縮なり。竪の界は求程の縮なり。見返の墨は假借の縮なり。其見通の墨と開除卅間に量合其矩をとりく界を量るに一丈三分二厘り。一丈ハ三十間なり三分二八九間なり一丈へ三分二八即五十間なり。是求程の間數なり



# 量盤術遠近法下

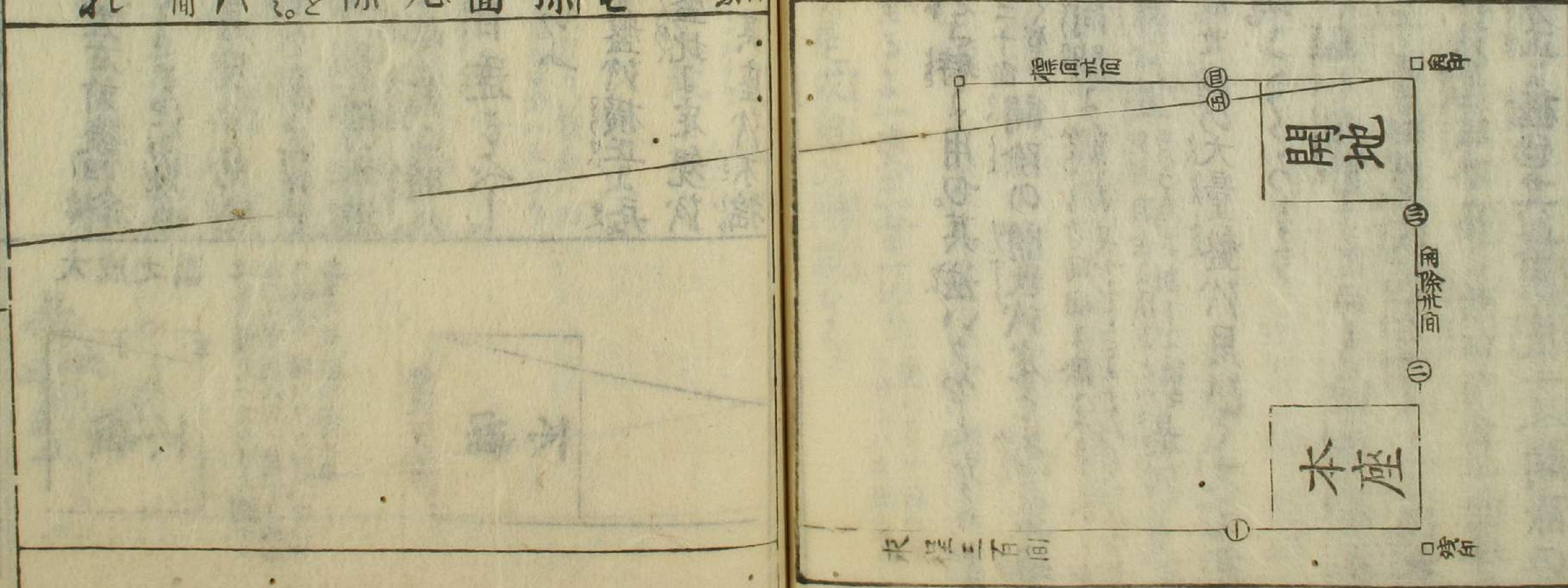
## 神速大盤方

此術ハ目的遠く開地少き時に用也。其法いかほどなりとも五間七間より十間十五間乃至二十間三十間までも其地によりて用くべし開除の間數を定て見通の印を立其彼方へも開除の同間にかるしむ同間に除るべきなれども多き時は其やうにもよろしくいふなり。間數を定正に合せて標を立。此印自余に用るといふは異なり。其制下に記を是をとく量るなり。畢竟方面十間卄間の大量盤を用ひて。大元方大元方の作法ハ委しく後に記もの術を勤るところなり

術云下に図をあらハして云所をわりて云作法のおとく品を始計してのち㊀本座に盤を方正に居。盤東より正に目的を見込㊁右方へ正に間數を定右正開三十間開地を求るこれを見通本座に殘印を立㊂開地に移り殘印を再見して盤を方正に極㊃其盤の彼方へ開除の

同間に間数を定め。開印と正に成ごとく標を立。此印開印と正を外さぬやうに。随分念を入て立べし。正當いさゝか違ふときは大差と成るなり。標の制作もさして尋常と異なり。竿をもつて作る。方面二寸竪長二尺二三寸ばかりにて但地に入るかどは外なり。盤の惣尺をかく此長尺の節とし。下に石突有り。頂より五分去りて定規を徹るを小竅なり。猶作用宜きに任べし

○盤乾より小斜に見返す時に。彼標に徹し置きたる定規の先を差出して。盤面の定規と目的と彼標に徹る定規の先と三物一正に見渡なり。然ときは三四五の形






現に盤面大に成を 此作法は右にいふごとく。方三十間の大盤なれば大元方を勤るところ持なり

今現る所の標より差出を定規は三なり。開地より標までの地径は四なり。盤面の定規より標の定規の先までは五なり。其三を開除の間数に量合 三の定規と三十間の矩と名るなり 其矩をもって四を十ごとに十変なり 一変三十間なり 十変は即三百間なり。これ求程の間数なり

規矩大元方

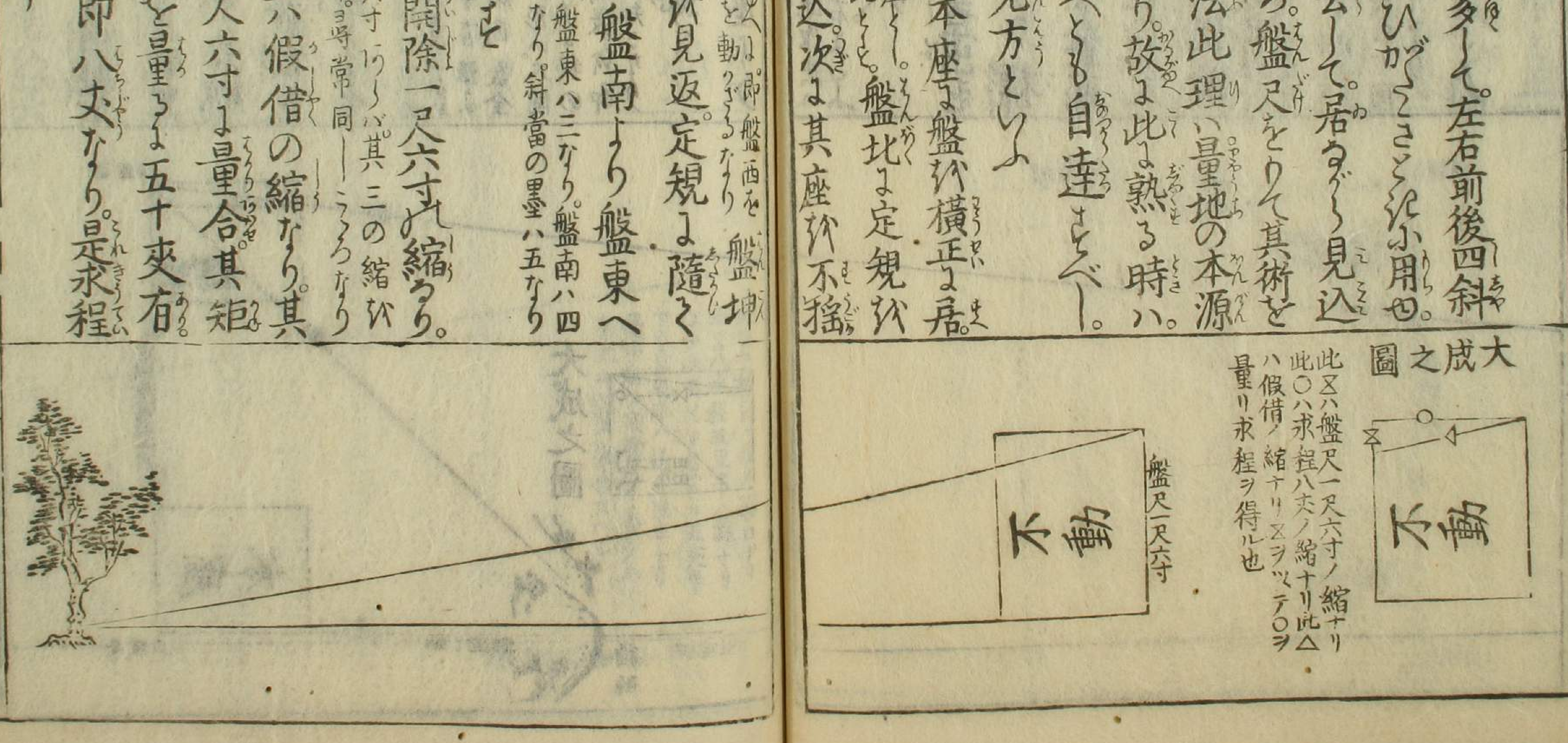
此術ハ四方障礙多して。左右前後四斜の開除とかなよ叶ひがたきときに用也。

其法本座ヲ不去して。居ながら見込見通の事ヲ勤め。盤尺をとりて其術を竭さとり。抑此法此理ハ量地の本源量盤の玄微なり。故よ此よ熟る時ハ。其他ハ不學といへとも自達すべし。

此謂よ號て大元方といふ

術云 下よ図する取とかく云 まづ本座よ盤ヲ横正よ居。盤南を右とし。盤北を左とし。盤東を彼とし。盤西を此とす。盤北よ定規ヲ載て正よ目的ヲ見込。次よ其座ヲ不揺すへく 盤尺の術なるがゆへは。即盤西を開除よ用て其座を動かざるなり 盤坤を要かし斜よ目的ヲ見返定規よ随く墨ヲ引。然さる時ハ盤南より盤東へかをく三四五の形 盤東ハ三なり。盤南ハ四なり。斜當の墨ハ五なり ゆうしま。盤面大成を

今現する所の三ハ開除一尺六寸ハ縮なり。盤の長尺たとへバ一尺六寸ゆうしバ其三の縮ヲ一尺六寸の口と名る事。ヨ等常同しこゝろなり 四ハ求程の縮なり。五ハ假借の縮なり。其三ヲ開除の盤尺一尺六寸よ量合。其矩 盤尺一尺六寸の矩 をもりて。四を量るよ五十変有 一変ハ一尺六寸宛なり 五十変ハ即八丈なり。是求程の間數と知るべし



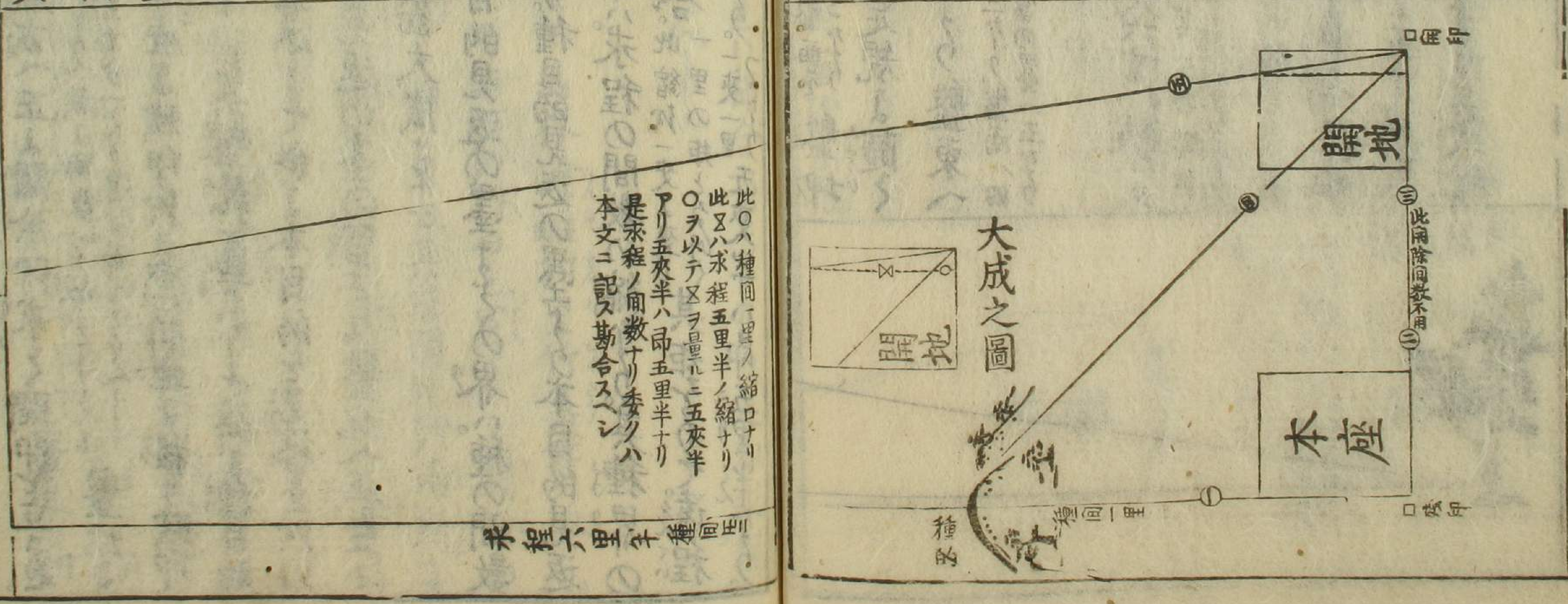
## 幽遠大量方

此術ハ郡郷を累𛂞州國を隔く。十里廿里乃至卅里五十里の遠程を量るふ用其法種の小目的を設き。此間數を求程の矩として量知るなり。たとへハ卅里の遠程を量るふハ。其間除一里ふるへき事古法ふ叶えりといへとも。一里の間数全眼力の行とゞかさる地形ハ。大国の中ふも稀なるへし。此故ふ種の小目的をもふけて其間数を即間除となして求程を量知さるなり是を大量方と號く

術云（下ニ図をもる所をわかく云）先本座より



空眼なりて山頂ニ目的を定。遠里を量るときハそれとも目的ハ山頂を用ひさるかし。次ふ本目的の此方ふて山林なりとも堂塔なりとも。里町の知れてる種目的を定（種目的の間数。兼て不知ハ。其期ニ臨くまいり種の間数を量るさり。今其遠程假ニ一里と定む。）次ニ左右いづまへ成ともを雨の目的の見へ安き方へ開地を定め。（下ニ図をもる取ハ右方へ開くるり如此ニ始計）して後㊀本座ニ盤を方正ニ居。盤東より種の目的をかきらく本目的を正ニ見込其。



盤が不揺やうに居置㊁右方へ正に開除が求く開印を立させ。此開地の間数ハ求程の種ふハ不用なり。故に間数いかほどにてもくるしからず。但種目的までの遠程三十分一ぐらゐを節とすべし 盤北に定規が載く是が見通本座に残印が立㊂開地に移り残印を再見して盤が方正に居㊃其盤乾を要ふして斜に種目的と見返墨が引㊄同所を要ふして斜に本目的を見返墨が引

㊀界 扨剸盤法をもく。盤南の見返の墨の留より。盤北へ正竪ふ界を引渡を然する時ハ盤面大成まて

今現れし所の。盤北より種目的見返の墨までの界ハ。種の間数 本座より種目的までの遠程なり 一里の口なり。種目的見返の墨より本目的見返の墨れ盤南の留までの界ハ。求程の間數の縮なり。其種界の縮口が。種の里町一里に量合。此縮が一夾に夾こ一里の矩とるべく 其矩をもりて遠程の界を量るに五夾半なり。一夾一里つなり 五夾半ハ即五里半なり。

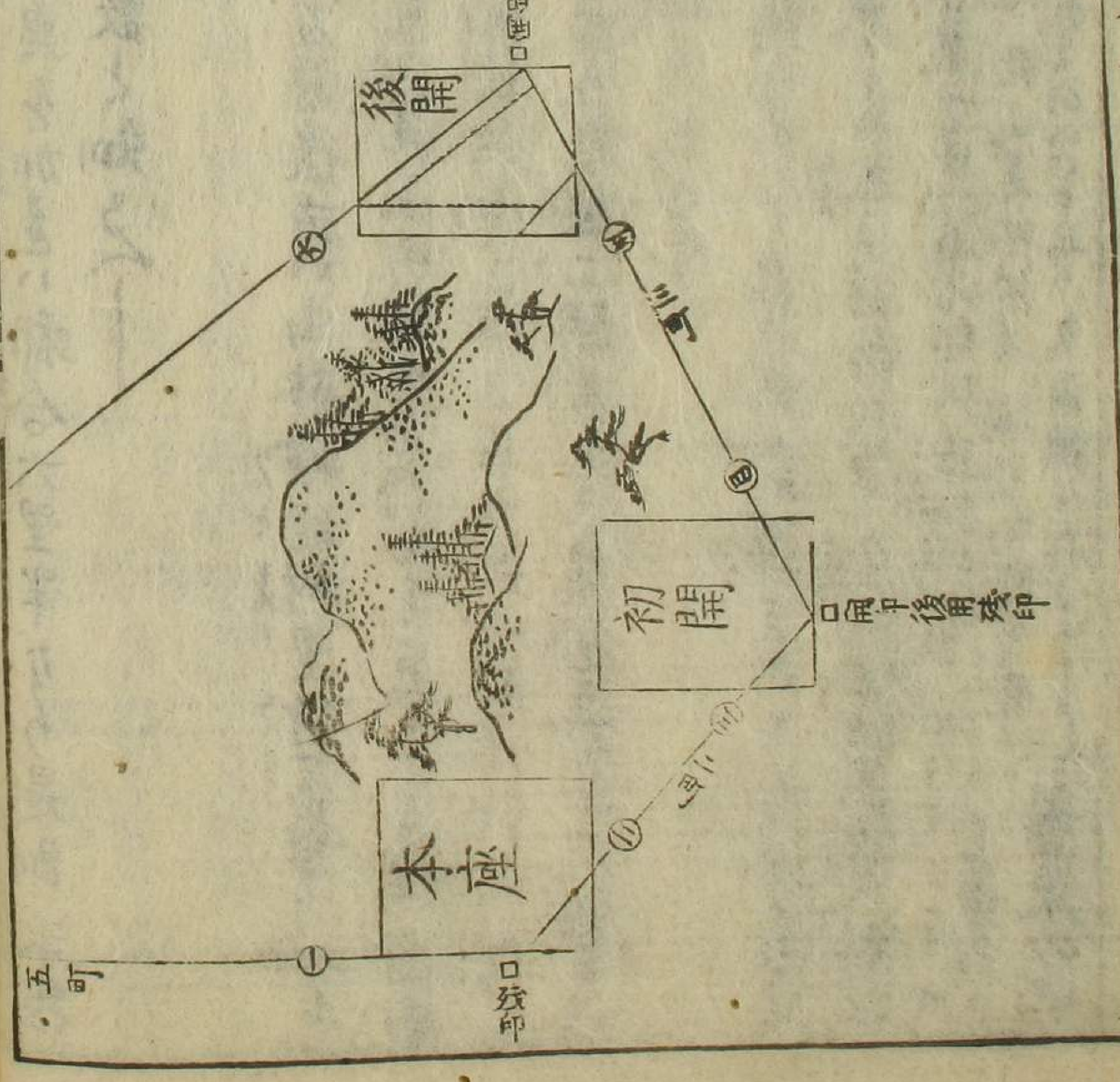
其上に種の間數一里を加ふれハ都合六里半なり。是即求程 本座より本目的までの遠程なり の間數と知るべし

## 二地重開方

此術ハ。本座の左右前後或い山林嶮岨村里竹叢等の地にて。一町二町の間より。乃至三町四町の内ふと宜しき開除の場なき所より。遠程が量る時に用ゆ。其法開地が両所に累ね求て量るなり。尤彼二開方とくハ其術異なり。委くハ術中に記す。勤くあるべし

術云 下に図ある 取がもく云 作法のおとく品を始計畢てのち㊀本座に盤が方正に居。盤東より正に目的が見込㊁右後の方へ斜ふ間町を定 二町 斜開 開地を求て見通の印が立。開除の法。いかとても正吉とるもとハへども。爰ふとくい前後左右にいりおほき故に。是非が不論して斜を用ゆ。もぐく斜開がもらゆれものハ皆あるなり。前後これまるうえ 盤東の中

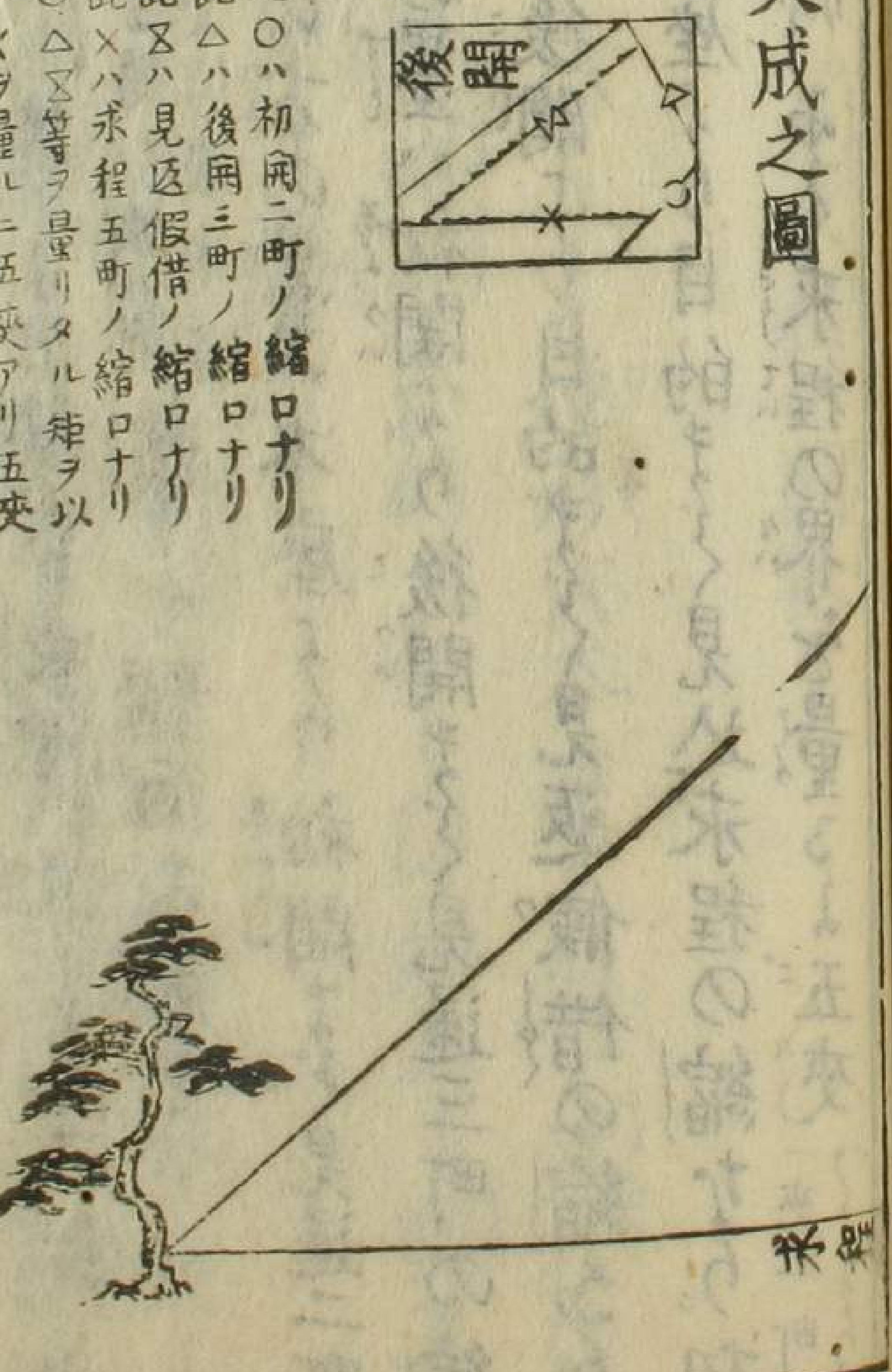
程より以下の方ふく。斜に初開の地を見通。定規にしたがひて墨を引本座に残印を立。㊂開地に移て残印を再見して盤を方正に居㊃右前へ斜に間町を定め。斜開三町後開の地を求め。見通の印を立さ。初開の墨れ盤北の






峃を要ふしく。彼見通の印後開の地の開印をふを見通。其定規に随ひて墨を引㊄後開の地にいるり。初開の印を残印ふなし。初開の見通の印差すて残印とそ是を再見しち、盤を方正に極㊅今再見しる後開の墨の盤西の峃を要ふしそ本目的を

大成之圖




此○ハ初開二町ノ縮ロナリ
此△ハ後開三町ノ縮ロナリ
此⊠ハ見返假借ノ縮ロナリ
此×ハ求程五町ノ縮ロナリ
○△⊠等ヲ量リタル矩ヲ以テ×ヲ量ルニ五夾アリ五夾ハ即五町也是求程ノ間数也其作法ノ審ナルヿ本文ニ記ルス考ヘシ

見返墨を引㊛界 扨軫盤法をもて。見返の墨乃盤南の留より。初開の見通の墨まつすぐ。南北へ正竪に界を引渡（此界即求程の縮となるなり）其界と墨との會より盤北の要まつすぐ。初開の墨と其間數（初開の間数也）二町に量合。（會より要まで二夾に夾ミ合セ其渾発の口を一町の矩と名く）其矩まて後開の墨を其間數（後開の間数也）三町量取（量取といへど成とも其矩をもて其間数わどくなり。其墨のあまり余くある分をバ用ひざるをいふ量合と量取とハ。其こゝろ違つり混ずべからず）其なろつて留より求程の界まつく。又斜小界を引（此界ハ見返の墨に随ひ曲節るゝさやうに斜平に引渡ゑし）然して盤面大成を今現れ所の。盤艮の方の墨ハ。本座より初開まつく見通二町の縮なり。盤乾の方の墨ハ初開より後開まつく見通三町の縮なり。盤坤の方の界ハ後開より目的まつく見返假借の縮なり。盤東の方の界ハ本座より目的まつく見込求程の縮なり。扨初の矩（初開後開をとるとき渾発の口なり）をもて求程の界を量るに五夾（一夾一町）てなり

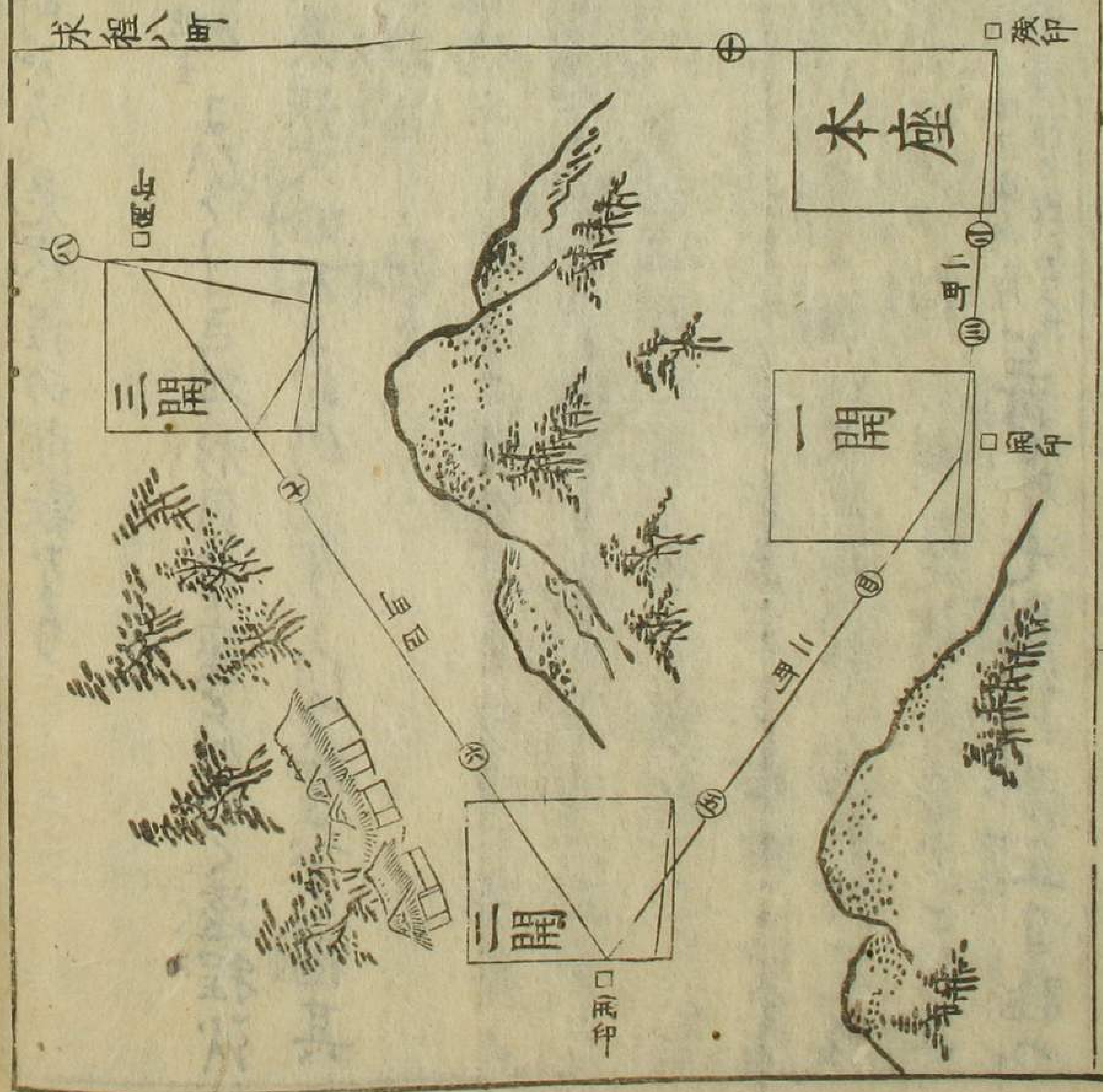
あり。五夾ハ即五町なり。是求程の間數なり

## 三地重開方

此術も前術（二地重開方）にひとしき地形を本座とおしく遠程を量るに用也。其法大略右におなじ。なつらひく知るべし猶其審なる事ハ術中に記す

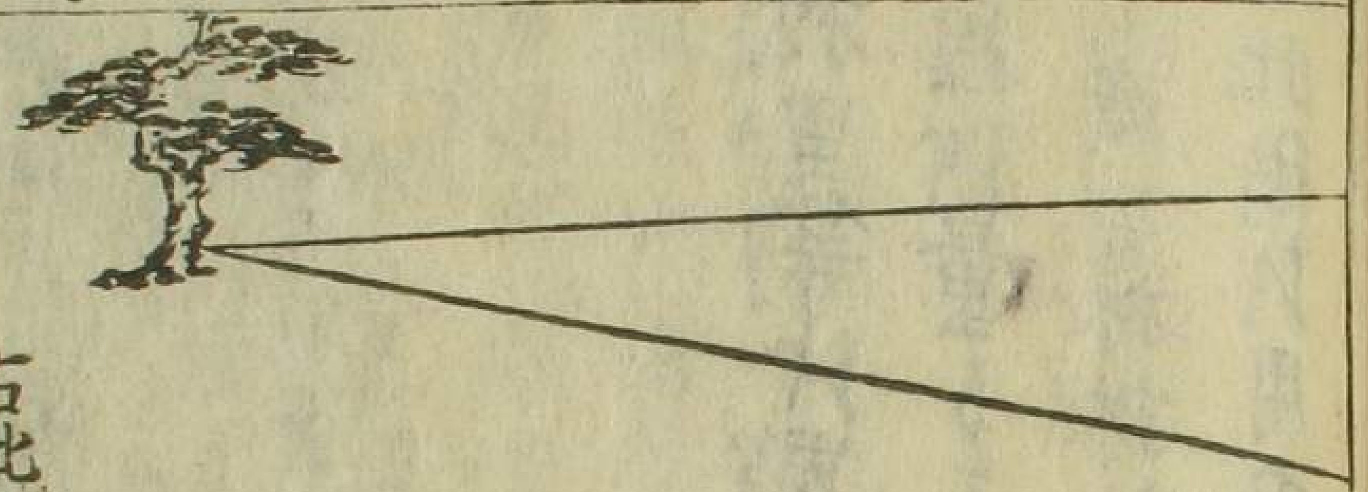
術云（下に図をあらはく云）作法のごとく品々始討してのち㊀本座に盤を方正に居。盤西より正に目的を見込㊁左前の方へ必し斜に間數を定（左斜開二町）見通の印を立させ。盤乾よりこれを見通。定規に随ひて墨を引。殘印を立㊂一の開地にいたる。殘印を再見して盤を方正に極㊃又左前へ斜に間數を定め。（左斜開三町）開印を立て。盤北の正中程より斜に是を見通。墨を引㊄二の開地に遷り殘印（一開の開印即殘印と成るなり）を再見して盤を方正に極め。

㊅右前へ斜に間數を定。（右斜開四町）開印を立。一の開地の殘印を再見しる墨の盤東の岾を要ふして。開印を見通墨を引
㊆三の開地に移り殘印（二開の開印印）我印と成るりを再見して盤を方に極

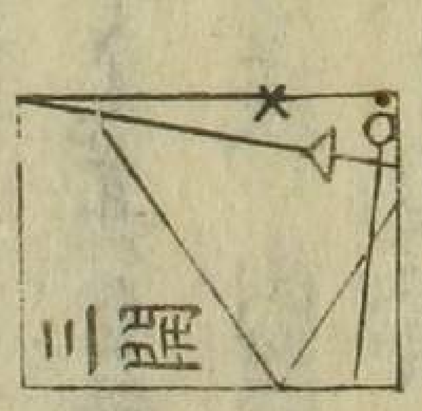





㊇今二の開地を再見しる。盤西の墨の岾を會ふして。盤北より斜に目的を見通定規に隨ひて墨を引時ハ。盤西より盤北へかきく。三四五の形現ハる。然うして盤面大成を



大成之圖




此○ハ初開二町ノ縮町也
此×ハ求程八町ノ縮町也
此△ハ假借ノ縮町也
○ヲ以テ×ヲ量リ其求程ヲ得ルヿ他術ニ同シ

右此一術本法に據るときハ還く學者惑を生し略法を用るときハ速に初心會し安し爰をもて今其ハ本法を措て其略法を図を覽る者よく此旨を察して妄にこれに拘泥せずとも彼をも此をも倶に用ゆべし

今現ずる所の。三ハ初開の縮なり。四ハ求程の縮なり。五ハ假借の縮なり。其ハ三を。初開の間數二町ニ量合（此三を一変ニ変じて二町の矩と名るなり）其矩ニて四を量るハ四変（一変二町ニつもり）四変ハ即八町なり。是求程の間數と知るべし

まどくに比法のごとく纖密幽妙なるものハ。倏忽ニ記しつくしがたし。なかなかくハしく注釈を加へざりしかども。なをさとく初學の人の曉しかたきをおもひはかるべき事ならんとおもへば。此故ニ今其大略を爰ニ述て巨細を残すも。是併参攷工夫の為なり。なんぞひさしきに日を逐ひ月を祢りて切瑳琢磨し。黎明の白昼ニいたるがごとく。ひとのつらく其理を尋ねもとむべし。奥ぬくむつかしき事とのミいたづらにして捨置なれば。悟る期終ニ有べからん。學者よくよく思ふべし

## 累隔指正方

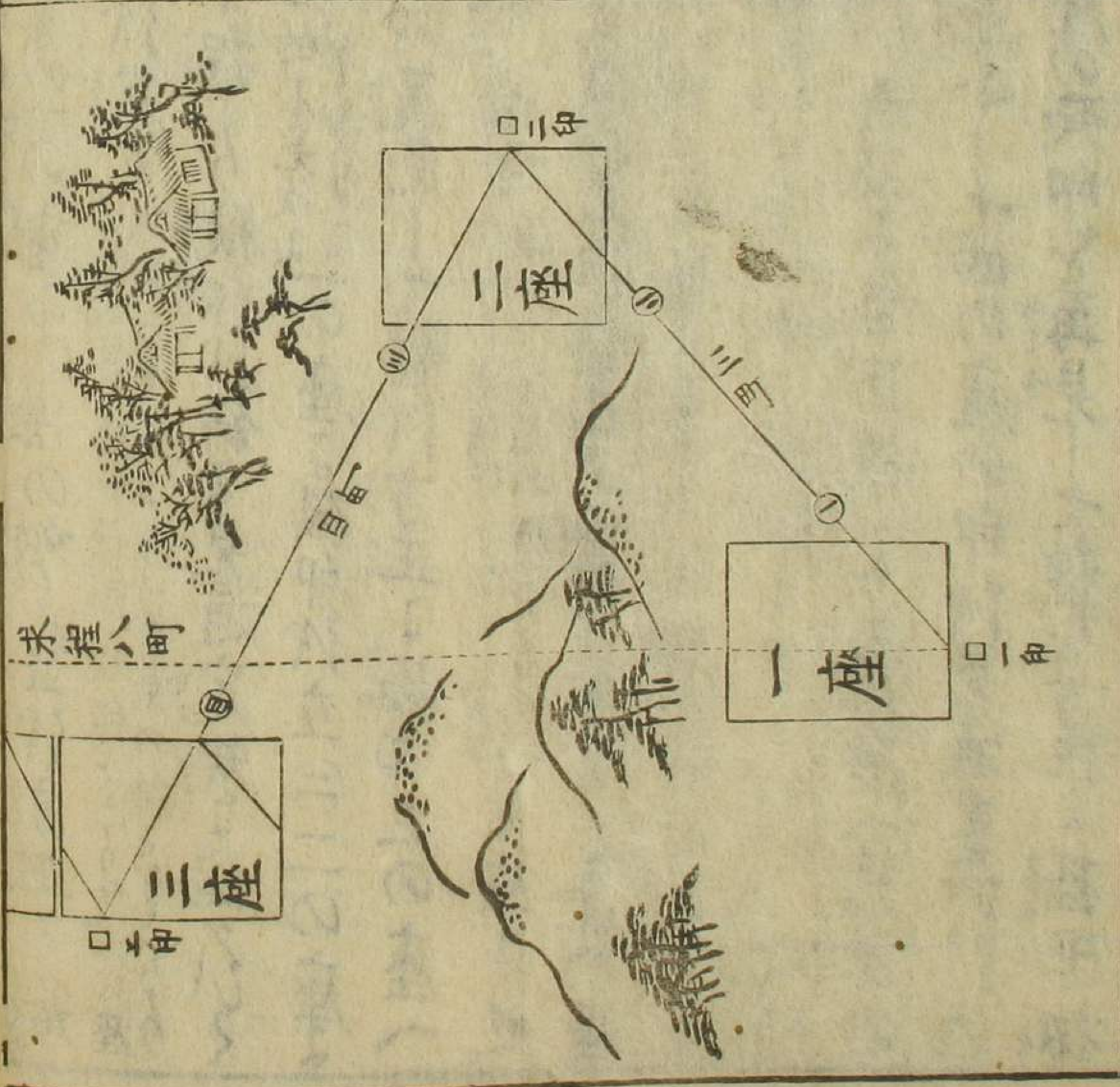
此術ハ山林村里等を累隔て。其目的不見ところあり。正當ニ遠程を量るニ用ゆ。或ハ山腹を穿ちて溯水を此方へ通し。或ハ森林を超へて發貢の幕場を定等のたぐひ。皆此術を用ゆべし



術云（下ニ図する所をかく云）㊀まづ一の座ニて。法の如く盤を方正ニ居。二の座へ斜ニ間數を定て（右斜開三町）開印（此印。即。残印となりて。三の座より八再見の種となるなり）を立させ。盤北の中程より彼印を斜ニ見通。定規ニ随ひて墨を引。（本座より目的不見故ニ。見込の作法ハなきなり）一の座ニ残印を立㊁二の座ニ遷り。一の座乃残印を再見して盤を方正ニ極㊂三の座へ斜ニ間數を定て（左斜開四町）開印（此印も亦。残印となりて。四の座より再見の種となるなり）を立させ。一の座より二の座へ見通の墨れ盤西乃端を要ニして。三の座の印を見通。墨を引㊃三の座ニ至て。二の座の残印を再見して。盤を方正ニ極㊄四の座へ斜ニ間數を定て（右斜開五町）開印（此所より。目的見ゆる故に。此印ハ残印ニ用ひざるなり）を立させ。二の座より三の座へ見通の墨の盤東の端を要ニして。四の座の印を見通。墨を引㊅四の座へ移り。三の座の残印を再見して盤を方正ニ極㊆扨

目的へ斜ニ間数ヲ定左斜角三町 三の座より四の座へ見通の墨の盤東の端を要ニして。本目的ヲ見返。四の座より目的見ゆるまゝニ。爰ニて見返ゟ定規ニ随て墨を引。

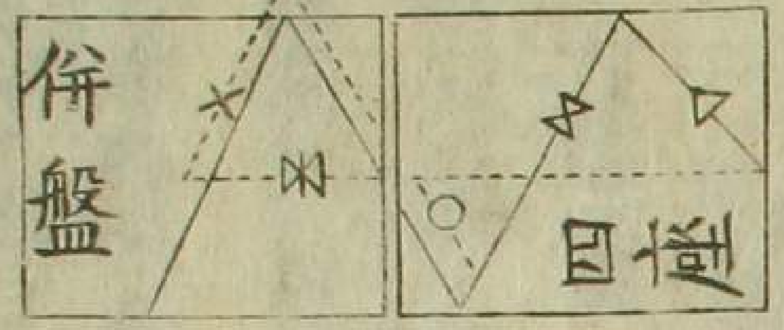
㊚扱割盤法ヲ始めて新ニ分間の矩ヲ設此走ハ。ソグもの縮ニもかゝハらず。盤面の墨の長短ニ随ひて。行ニ及ブかごとく。制ニ定れなり其矩ふく。一の墨ヲ



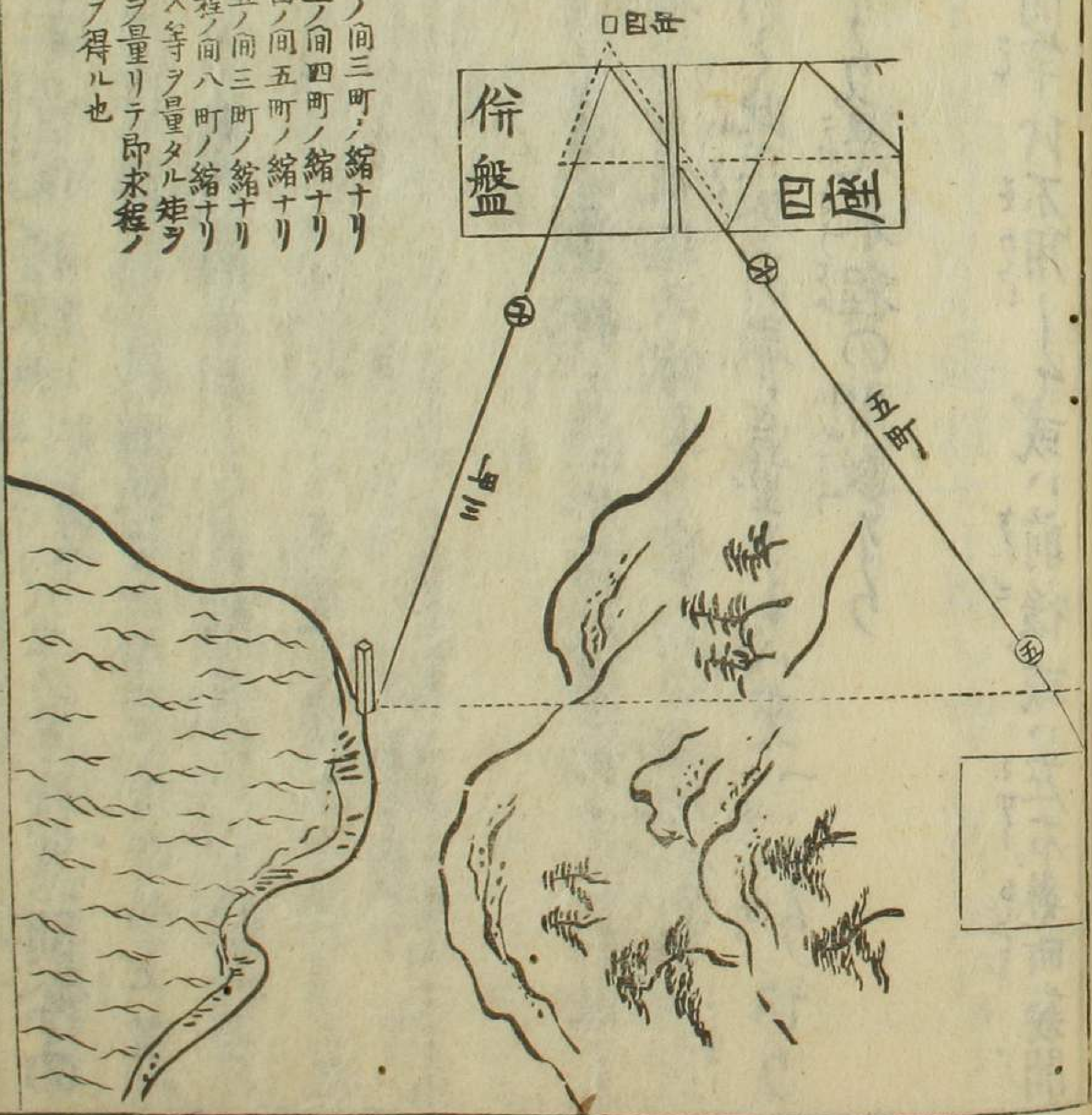





大成之圖




△ハ二ノ间三町ノ縮ナリ
⧖ハ二三ノ间四町ノ縮ナリ
○ハ三四ノ间五町ノ縮ナリ
×ハ四五ノ间三町ノ縮ナリ
⧖ハ求程ノ间八町ノ縮ナリ
△⧖○×等ヲ量タル矩ヲ
以テ⧖ヲ量リテ即求程ノ
间数ヲ得ル也



其開除の間數三町量取。量取作法くハしく前章に記せを考べし 二の墨ハ其開除の間數四町量取。三の墨ハ其開除の間數五町量取。四乃墨ハ其開除の間數三町量取。各圖乃ごとく巨細に界ハ引。扨其四乃墨の量終より一の墨の量始まで。正竪に界を引。然ふして盤面大成せり 尽して。見通がへし。術ハ畢るときハ。初の盤。やうやく尽く。見通ガへし。故にまさに外の盤をうつし合て用ゆるなり。
是ハ併盤法と名く。其ハ委しき作法ハ。或向の編中にあれバ を

今現す所の。四の墨の量終より二の墨れ量始まで引渡し ゐるれ正竪れ界ハ。即求程の縮なり。最初の矩（最初の矩といふハ割盤法にて新に分間の矩也）をとりて此正竪の界を量るに。八丈（一丈一町なり）八丈ハ即八町なり。是求程の間數なり

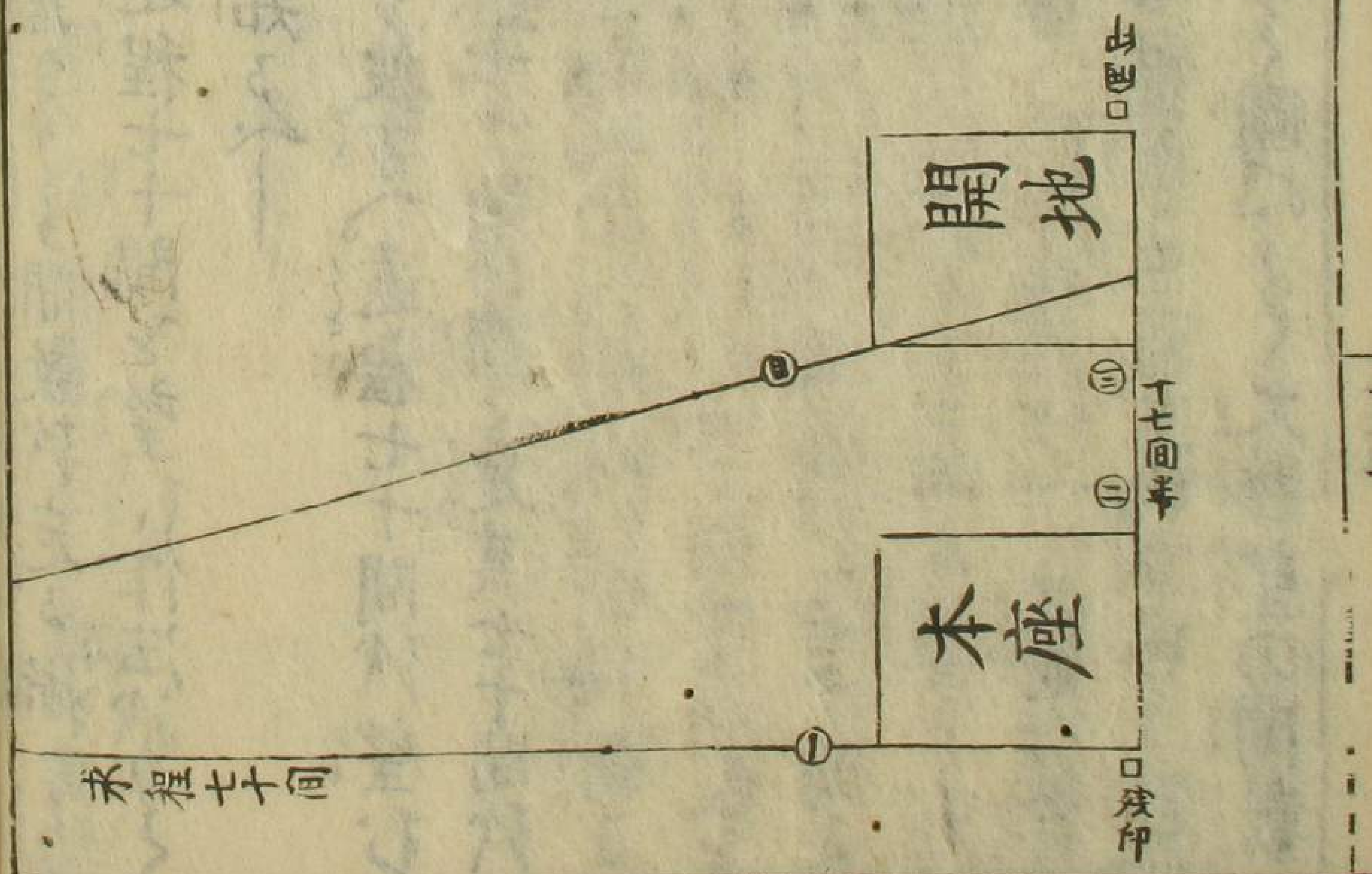
## 無的定間方

此術ハ間縄間竿ハ不用して。或ハ前後。或ハ左右。幾町幾間ありとも其望む所に随ひて。居ながら間數ハ定る術なり。

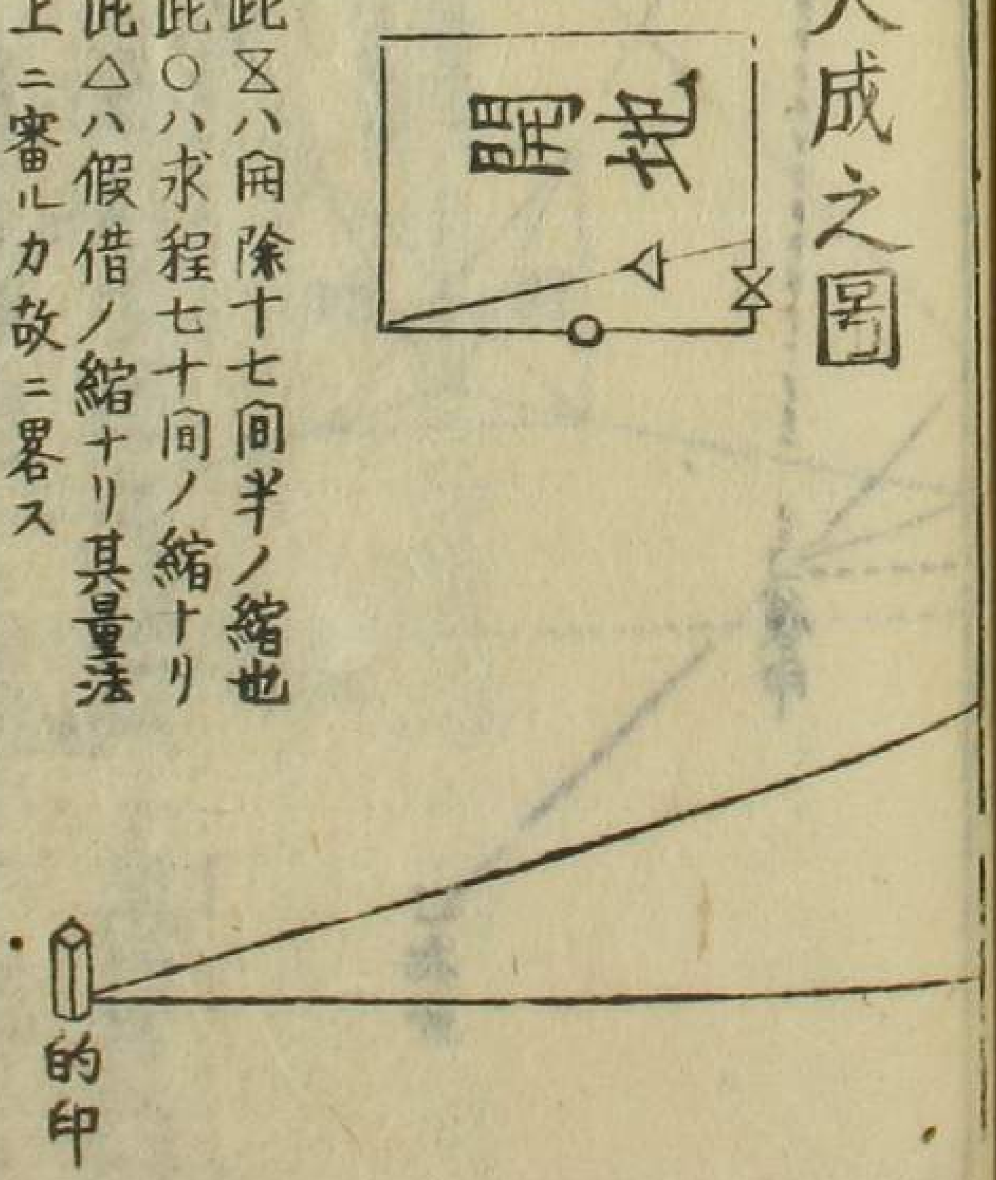
今爰に此方より彼方まで遠程七十間を望む作法ハ如く記せり。（くハしき事ハ術中に述ぶ）餘ハ推して知るべし

術云（矩ハ下に図をなせり 矩をかく云）盤を以て此方より彼方へ。遠程七十間ハ望む時ハ。まづ盤の四を（爰に盤四といふハ盤東ハ向けていふ）七十間の摸と定其七十間ハ即盤四に割合（盤東の向を。盤北より盤南まで。有余不足なき様に割合ふり。割合といふハ量合といふに。其儀おなし）新に分間の矩ハ制し置（此矩開除の間数ハ量るべき為に。かねかねめ制し置なり）次に開除の間數を十七間半と定（此間数十七間半に除るに。かのくだハ下の図によくいふあり）彼盤四を七十間に割合する矩をもて。盤三（爰に盤三といふハ盤北をむけていふ）を十七間半量て取。其矩の量留より。七十間の矩の留へ（七十間の矩の留とハ盤四をいふ…）定規ハ當斜に墨ハ引渡せ。然する時ハ。豫盤面に三四五の形ハ…れ。是まての事ハ本座に出ざる以前の法なり ㊀扨本座ごとく圖れごとく。大躰望の間數

七十間の積がかく。彼方へ正に目的の印が假に立させし。作法の如くに見込㊁右方へ正に開の間數十七間半量り。見通の印が立させたく是を見通本座に殘印を立㊂開地に移り。殘印を再見しく盤が方正に極㊃家初に設置する五の墨に定規をあてく。望の㰓を（望の㰓とハ目的の為に假に立置する。印の㰓をいふなり）見通なりとし目的の㰓。五の墨の定規と一條に不合時ハ幾度かくとも。望の㰓を進退せしめて。



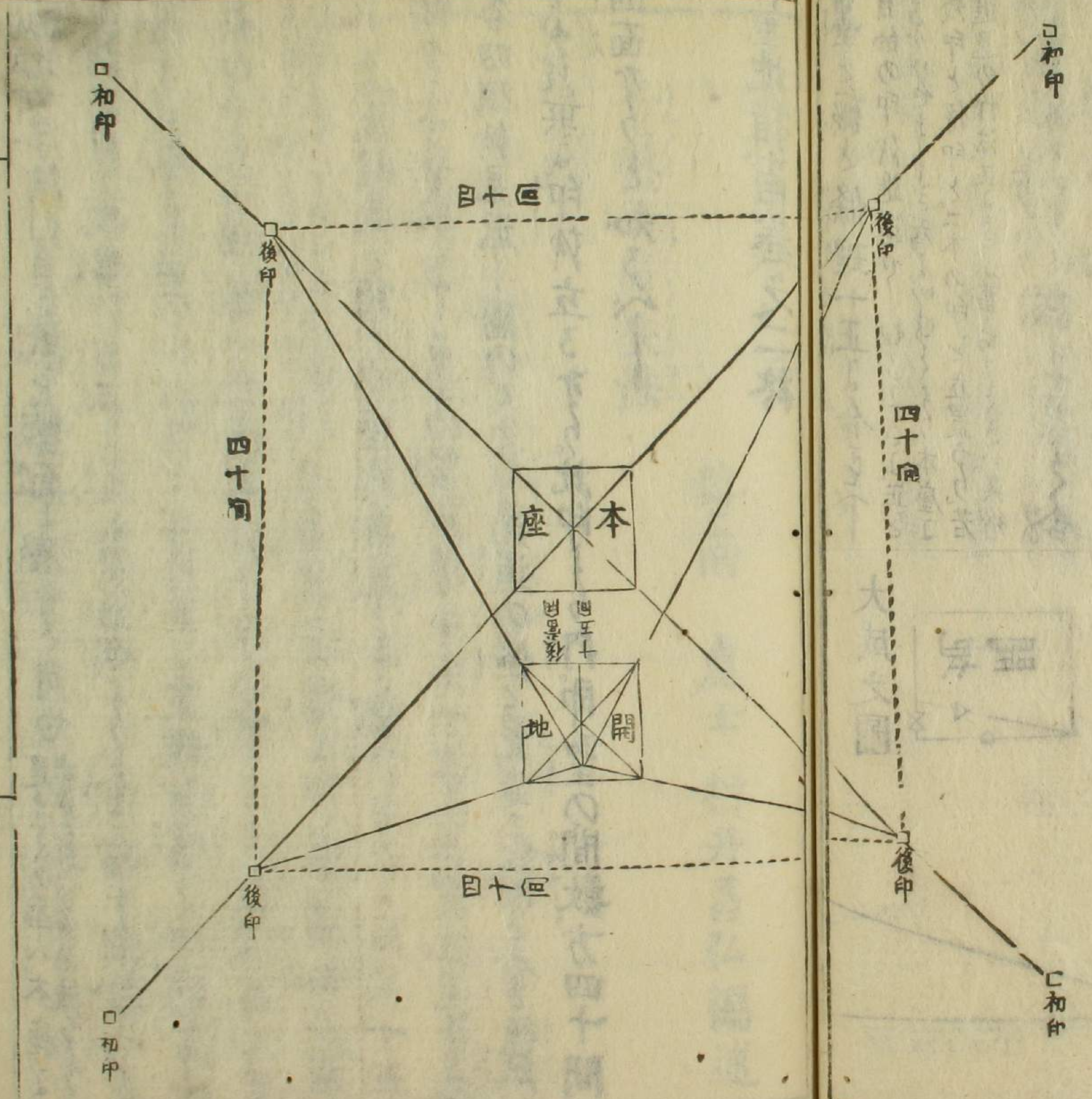

墨と㰓と條理一正に合をべし（目的の印が進退せしむるときに。正をもるがりせましき為に。かくのごとくより。本座に殘印と係印と。二本の印を立置なり。若進退の作法。正に違ふ小事あるときハ其術かふてしむ差異あり。前後九合が入るべし）然して其よく合ふる時。彼印の㰓を其取にとつと立置し。是即遠程七十間望乃間數の印と成なり




此⊠ハ角除十七間半ノ縮也
此○ハ求程七十間ノ縮ナリ
此△ハ假借ノ縮ナリ其量法上ニ審ニカ故ニ畧ス

## 暗指方面方

此術も亦右にいふごとく。間縄間竿を不用して。本座より四方面いづれど成ともと。望に任せく居ながら其間數が定むれ術なり。前法（無的定間方）と此法とハ當用無益の術に似たりといへども。初學の徒をして。千変萬化の自由が得せしむ




是れ為に其緩急を不論ぜ。仍て爰に贅を覧者好事の言なりとして。詰る事なかれ

術云 下に図をもる形をかく云 なすべし本座を正中となして。方面四十間を望む時ハ。まづ白紙一枚を四方同寸に裁て假に是を四十間四方に摸と定 尤四方同寸なるときハ其紙の廣狭に不拘。假令バ紙面八寸四方なれバ。二歩を一間とし。二寸を十間とし。八寸を四十間と定め。即此矩なり。間の間数を量ふ 圖のごとく紙面の隅より隅へ十字に墨を引べし 此十字の墨。即方面四十間の四隅なり 竪面にも又再見の為に墨を引。

扨此十字を引たる紙を。盤面に張付て用也。（是まての事ハ。本座は出ざれ以前の法なり）

㊞初 扨本座に。彼盤を方正に居。盤の四隅より。各三四十間程つゝ除きて假に見通の印を立十字の墨に定規を當て。四隅をまふ彼印を見通㊞後 盤中竪の墨を。十字の會より十五間分即三寸（右よいらの如く。八寸を四十間と定むるときハ。十五間分ハ三寸なり）量取。其量留に印を付置。扨本座より十五間退き開き。本座を再見して盤を方正に極。彼十五間分三寸量取たる墨の留を要かし。十字の當前を會かして各四隅を見返し。圖のごとく見通の條と見返の條と會に成くる所に印を立るなり。此印より内即望の間數。方四十間四面なりと知るべし

量地指南巻之二終



# 量地指南巻之三

勢南　處士　村井昌弘編述

## 量盤術廣狭法

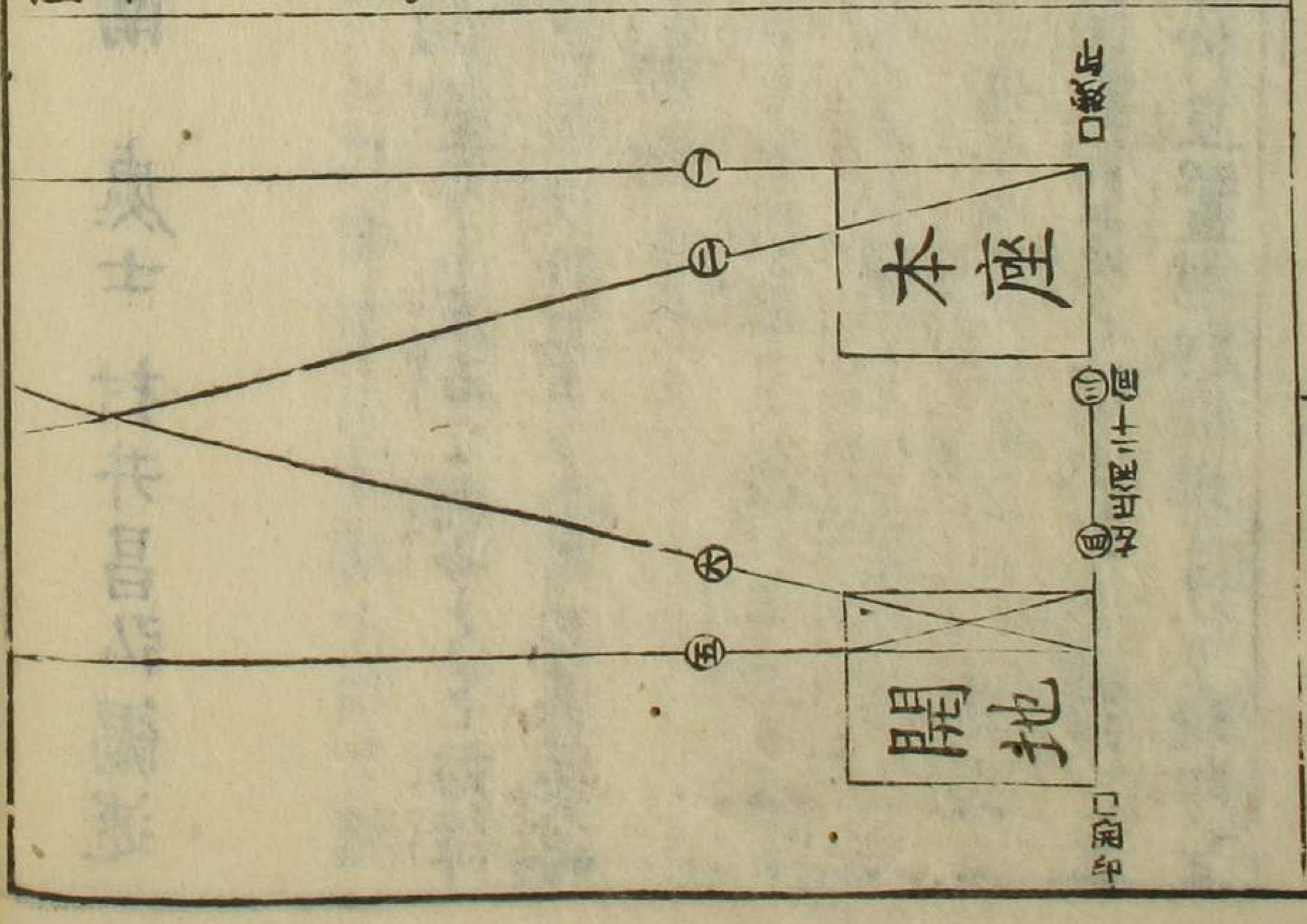
### 正面正開方

此術ハ平原曠野の地形を本座として。左右に何かくを妨障なき場所より。彼方正面の廣狭を量るに用也。其法尖略遠近術の左右開に據て。勘辨すべし

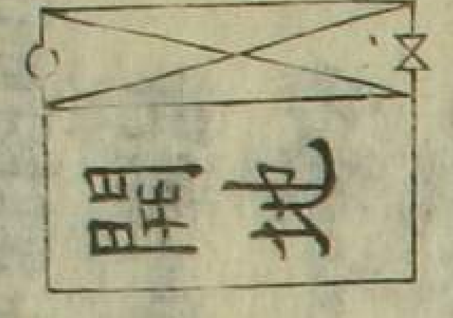
術云（下に図あれ此をとりて云）作法のごとく品々始計畢て後。㊀本座に盤を方正に居。盤西より正に目的の左を見込。（目的の左ハ本座の右より下皆是よりてえ）㊁其盤乾を要かして斜に目的の右を見込（此見通開地にて見返のごとし）定規に随ひて墨を引㊂左方へ正に間數を定て開地を求。開印を立させて是を見通本座に殘印を立置㊃扨開地に迁り。殘印を

再見して盤を方正に極㊄其盤坤を會に成ごく（坤を會にとは盤をしといふは其作法の中を知をかしくいふ）盤北より斜に目的の左を見返墨を引㊅今目的の左を見返せる墨の盤北の出前を要とし正に目的の右を見返（此見返開地して見返のごとし）墨を引。然する時は盤の南北両所に三四五の形になれ。

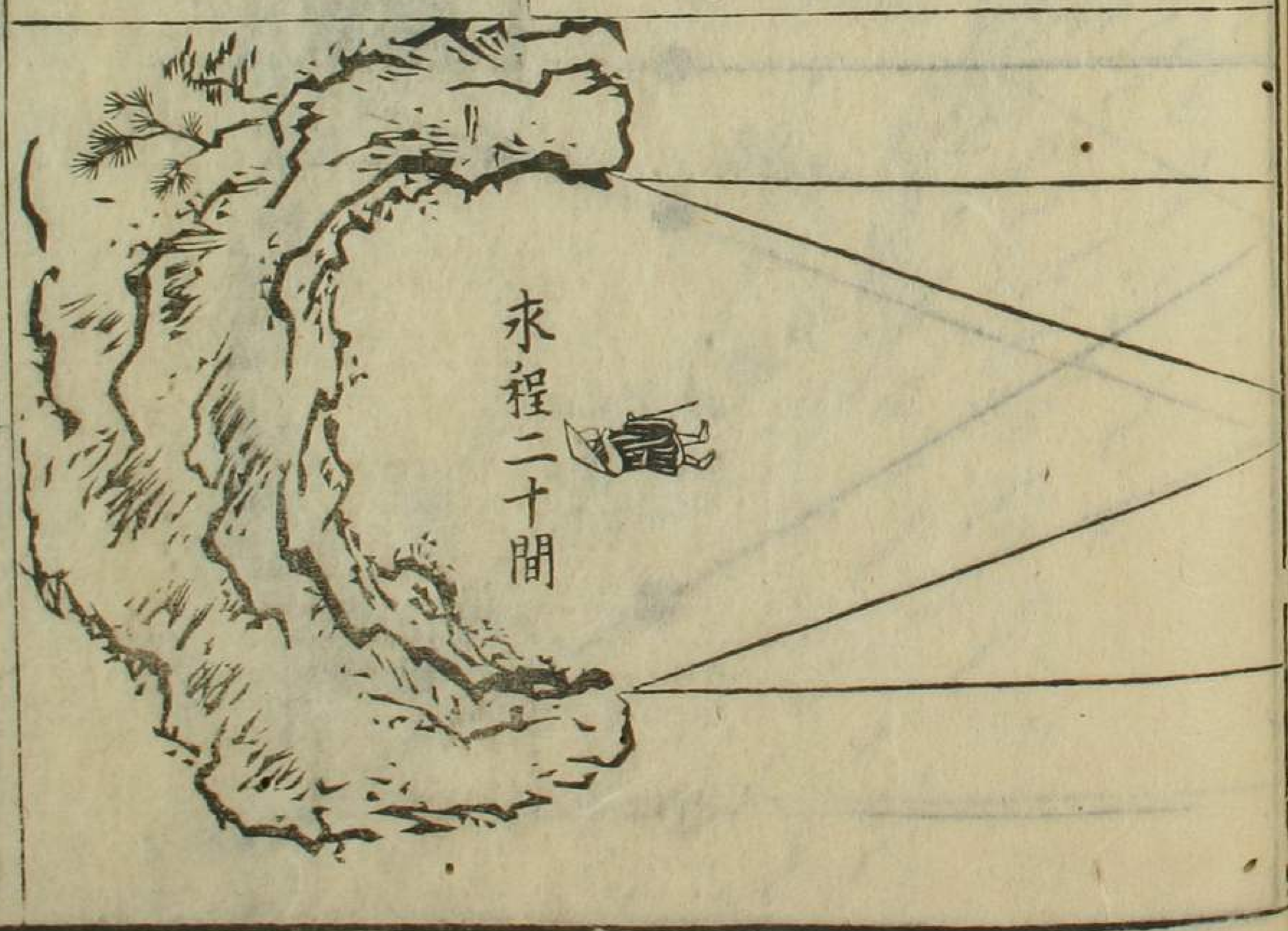
盤面大成をと今現れし所の盤北の三八開除（左正開二十間）の縮なり盤南の三八求程（廣程彼正面）の縮なり（右方の四八目的乃左方の縮なり）其盤北の三を（左方の四八目的の右方の縮なり）開除の間數廿間に量合其矩（開除の間数二十間の矩）ふて盤南乃求程の縮を量るふ同変なり。同変を即廿間なり是求程（彼方正面の廣程二十間）の間數と知るべし




大成之圖



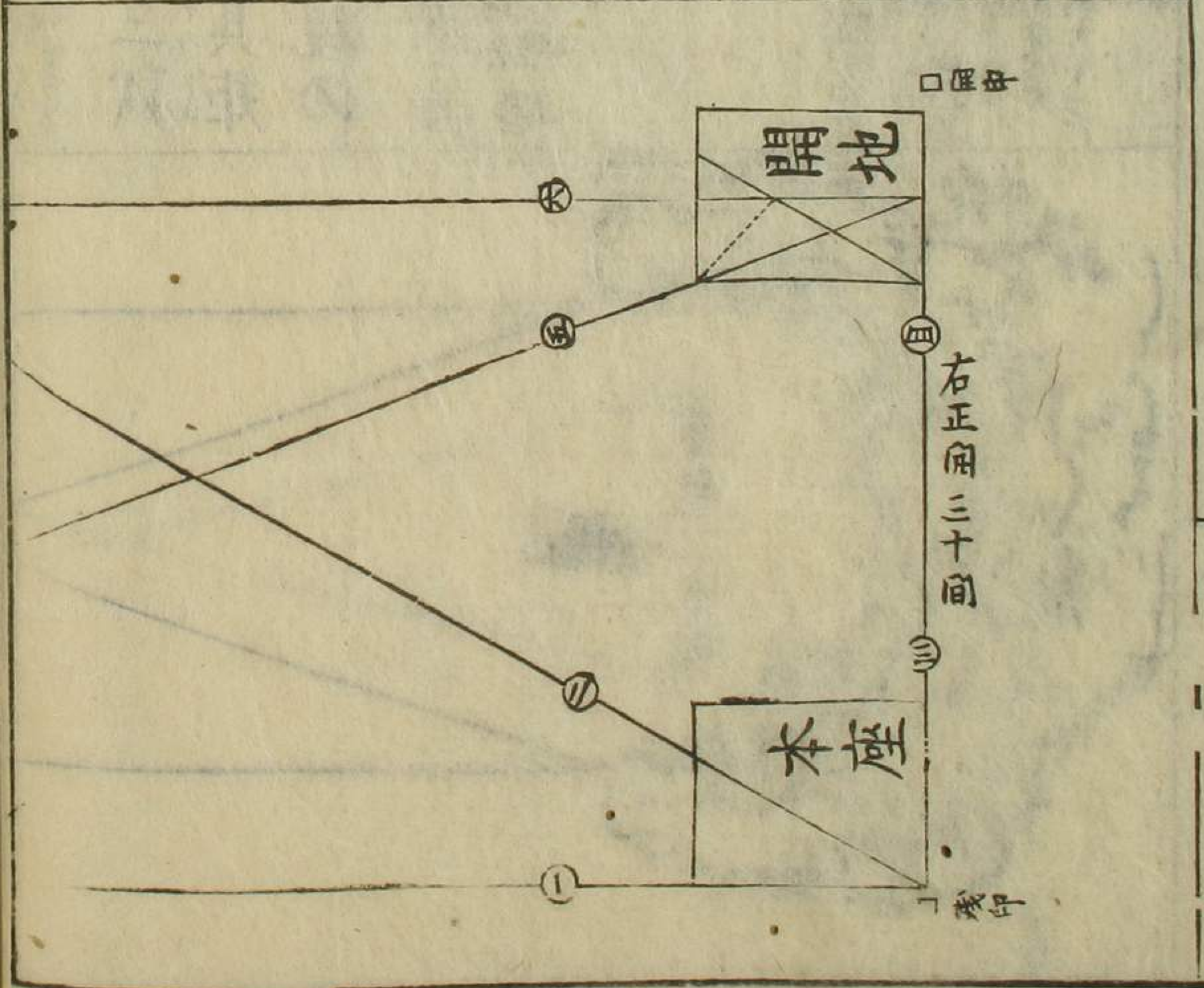

此☒ハ左正開二十開ノ縮ナリ
此〇ハ求程二十間ノ縮ロナリ
今渾発ヲ以テ☒ヲ一変ニ変ニ
二十間ノ矩ト名ケ其矩ヲ以テ
〇ヲ量ルニ同変ナリ同変ハ即
二十間也是求程ノ間数ナリ



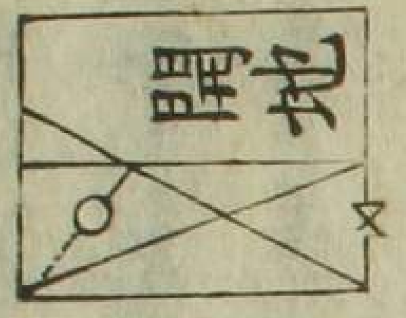
## 斜面正開方

此術もはら平原廣野の地より。彼方の斜面乃廣狹を量るに用。其法大畧前法（正面正開方）小准知るべし

術云（下ニ図ことく取とるく云）作法乃おとく始計しそのち㊀本座ニ盤を方正ニ居。其盤東より正ニ目的の右を見込㊁盤艮を要ホして斜ニ目的の左を見込墨を引㊂右方へ正ニ開除を汞（右正間三十間）開印を立させこれを見通殘印を立置㊃開地ニ移り殘印を再見して盤を方正ニ極㊄其



大成之圖



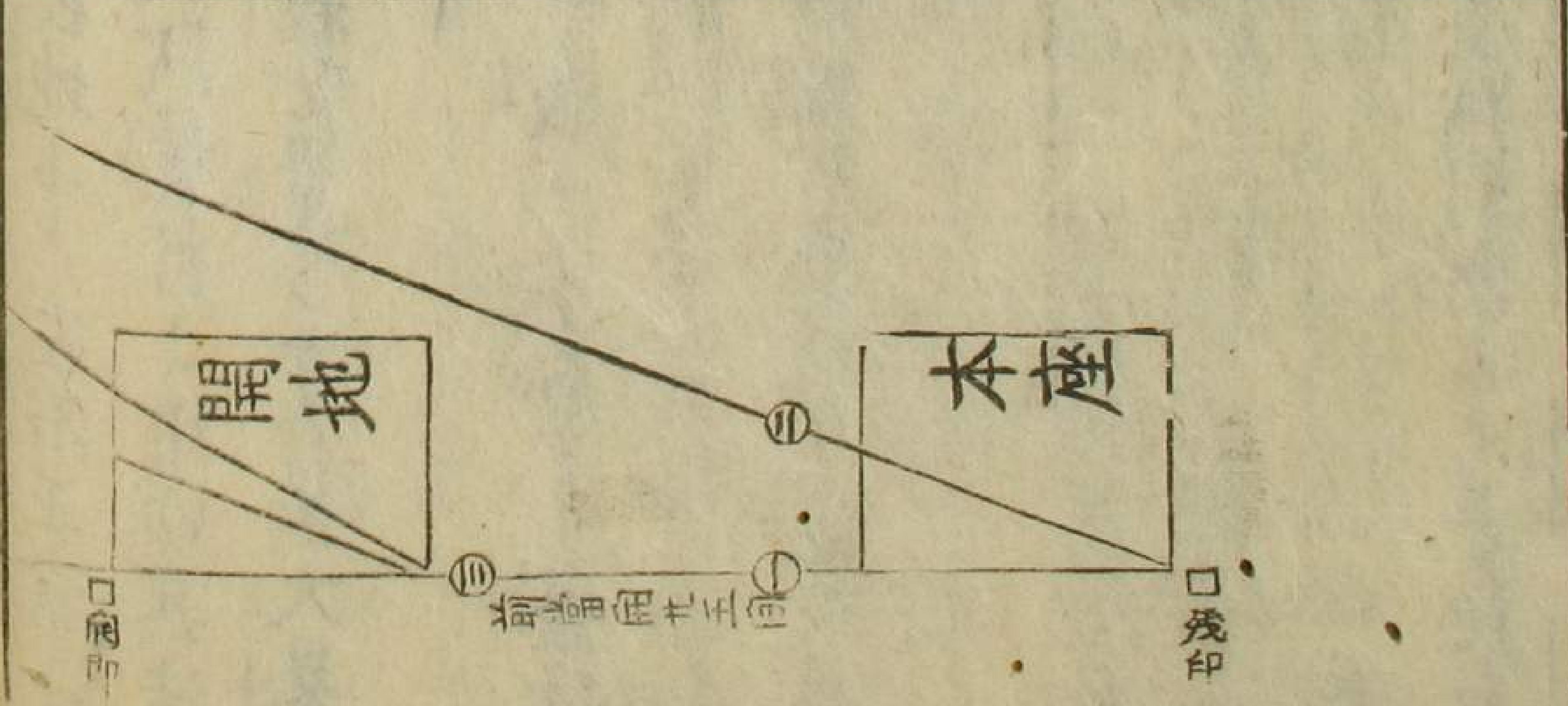

此又ハ右正間三十間ノ縮ロナリ此○ハ求程四十間ノ縮ロナリ今渾發ヲ以テ又ヲ一夾ニ夾三分間ノ矩ト名ケ其矩ヲ以テ○ヲ量ルニ一夾三分一有リ一夾三分一ハ即四十間ナリ是求程彼面ノ廣狹ナリ猶本文ニ依テ明ラムヘシ

盤巽を會にして。盤北より斜に目的の右を見返墨を引⑥其墨
今目的の右を見返して引る墨なり の盤北の尚を要にして。正 彼面の廣程莫大なれ時ハ斜より見返るなり に
目的の左を 目的の左ハ本座の右なり前後の件々これよりしえ 見返定規に随ひて墨を引
㊇扨剸盤法をもつて盤巽乃會なり。左の目的の見込見通の墨
の會まて。斜に界を引渡し然して盤面大成を
今現なく所の盤北の三ハ開除 右正開三十間 の縮なり。盤中乃斜三
斜三とハ今剸盤法をもつて引渡せる界を云 ハ求程 彼斜面廣程 の縮なり。右方の四ハ目的の左までの遠縮なり。左方
の四ハ目的の右までの遠縮なり 其盤北の三を開除れ間數三十間に量合其ハ矩
開除の間數三十間の矩 をもつて。盤中の斜三の界を量るに一夾三分一になり。
一夾ハ三十間なり三分一ハ十間なり 一夾三分一ハ即四十間なり。是求程 彼方斜面の廣程四十間
の間數なり

正面前後方 爰に前當開の作法を記を後當開も是に準じて知へし

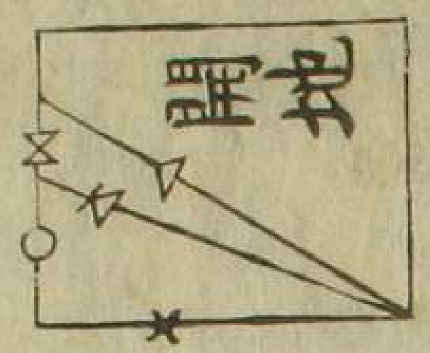
此術ハ本座の地形窄下道堤防等乃狹地にらハ。左右正當に
開除叶ひ難き場なり。彼正面の廣狹を量るに用ゆ。其法
開地を前後へ進退して求め然して求程を量るなり。大畧
遠近術前後開の格に同じ。配合すべし
術云 下に図あり點とめく云 作法のごとく品々始計して後㊀本座に盤を
方正に居。盤東より正に目的の右を 目的の右ハ盤の左なり 見込㊁其盤を不揺
やうに居置。盤艮を要にして斜に目的の左を見込。定規に隨
ひて墨を引。本座に殘印を立。夫より正に彼方へ間數を定て
開除を求め 左右へ開除叶がたきによりて。進て求る なり。退て求るも其術いはれし 見通印を立させ。
目的の右と。盤東の定規と。此印と。三所一條に成ごとく念を入立置べし。尤見込の條なるゆへに。別に見通と為には及ざるなり ㊂開地に
迂り。殘印を再見して盤を方正に極 此所より念の為なら目的の右と。正に見込ておくもよし ㊃
盤艮を要にして斜に目的の左を見返。墨を引。然されそれを

三四五の形現いまゝ。盤面大成を今現たる所の。三ハ求程彼正面廣程の縮なり。四ハ種子本座より目的の右すゝくの遠程の縮なり。五ハ假借の縮なり。差ハ開除前當間廿五間の縮口なり。扨其差口を開除の間數廿五間ありし量合其矩をもつく。三三ハ元来彼面の縮口なれども。假に差口と合して本座より目的すゝくの遠程となし。是を種に用ゆを量るに二爽なり。其上に差口乃廿五間を加倍して假に七十五間と知り。是を四に名るの種間とす。扨新矩を設て。四を其種間七十五間に量合。渾発をもつて。此四を七爽半に爽ゑ。是を十間の矩とろいへ其矩をもつく。再度三と量る此三を初度と後度と両度量るなり。初度ハ目的すゝくの假の遠程に用ひ。後度ハ求程の間數に用ゆ。元来此三ハ求程の縮なり小三爽なり。一爽十間なり三爽ハ即三十間なり。是求程彼方正面の廣程三十間の間數と知るべし

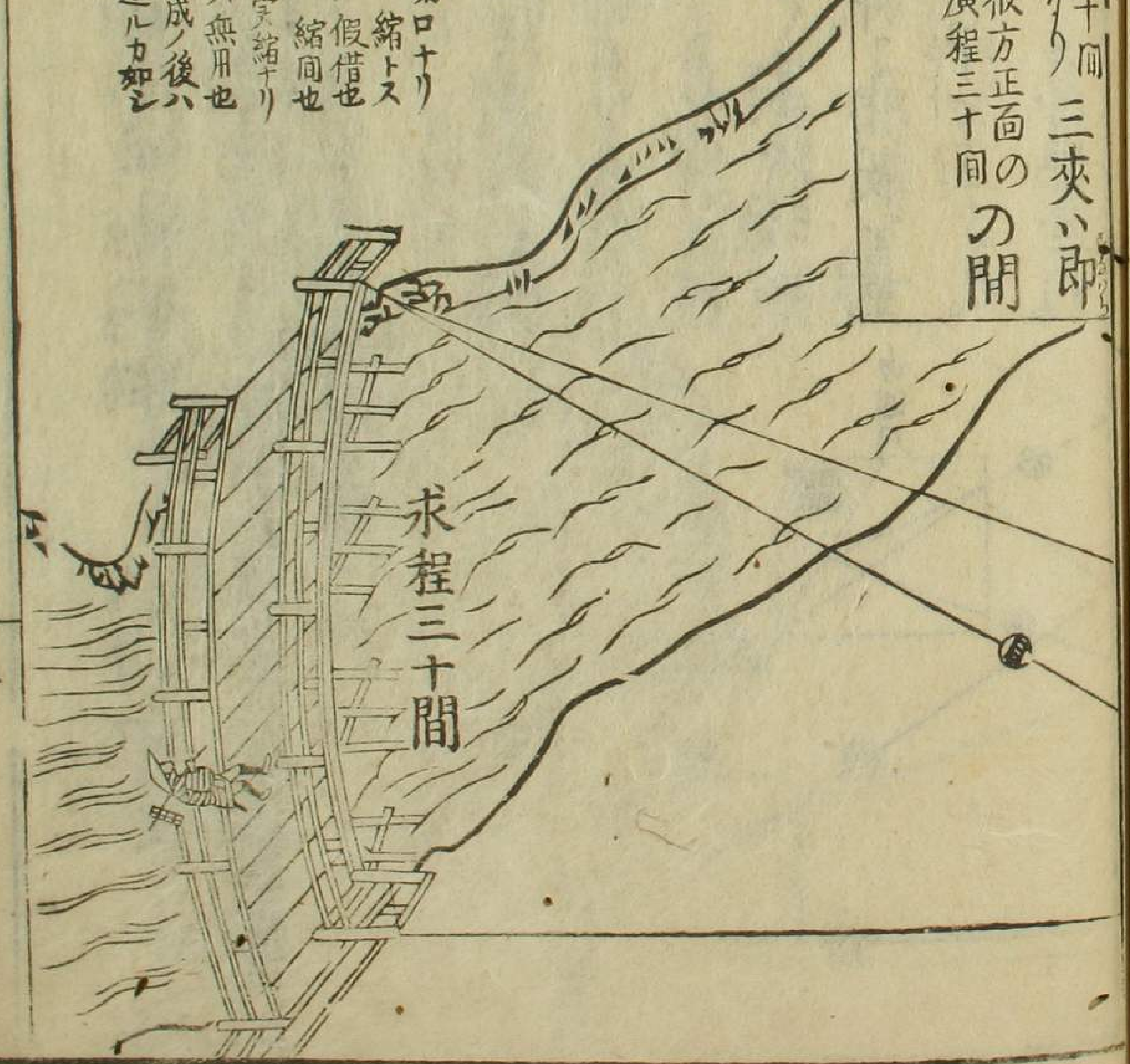





大成之圖



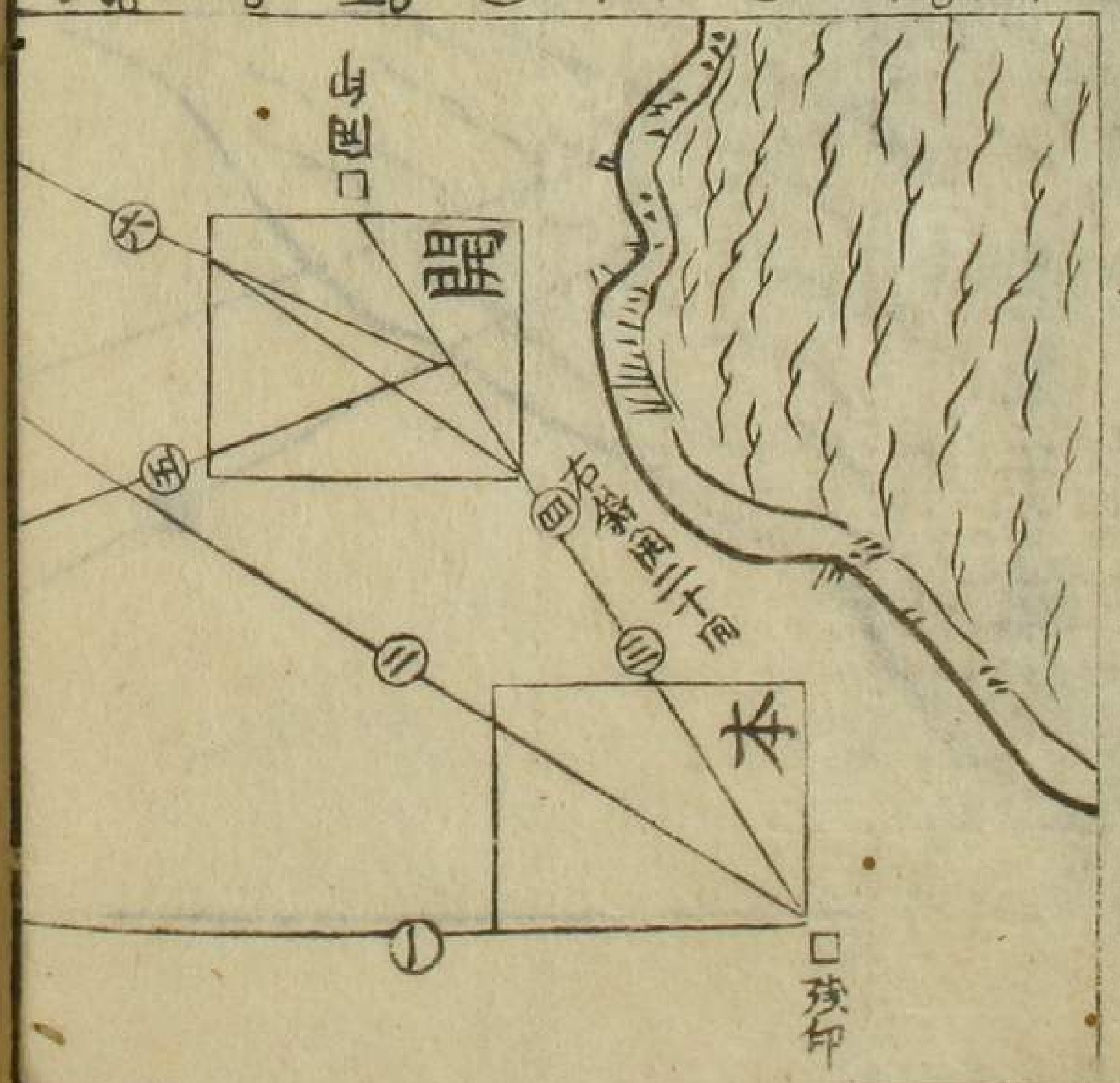
此⊠ハ差也開除廿五間ノ縮口ナリ
又○ト合一シテ求程廿間ノ縮トス
此○ハ三也遠程七十五間ノ假借也
実ハ⊠ト合メ求程三十間ノ縮間也
此×ハ四也遠程七十五間ノ実縮ナリ
此△ハ五也假借也大成ノ後ハ無用也
此◇ハ旧五也假借也是又大成ノ後ハ
無用也量法委クハ本文ニ述ルカ如シ



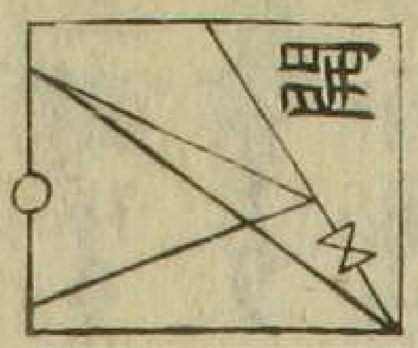
## 正面斜開方

此術ハ本座の地形茂林翳薈等ありて左右前後とも正當の開除叶ひがたき所より彼方の正面の廣程を量るに用ゆ其法大旨遠近術斜開法に據て曉るべし

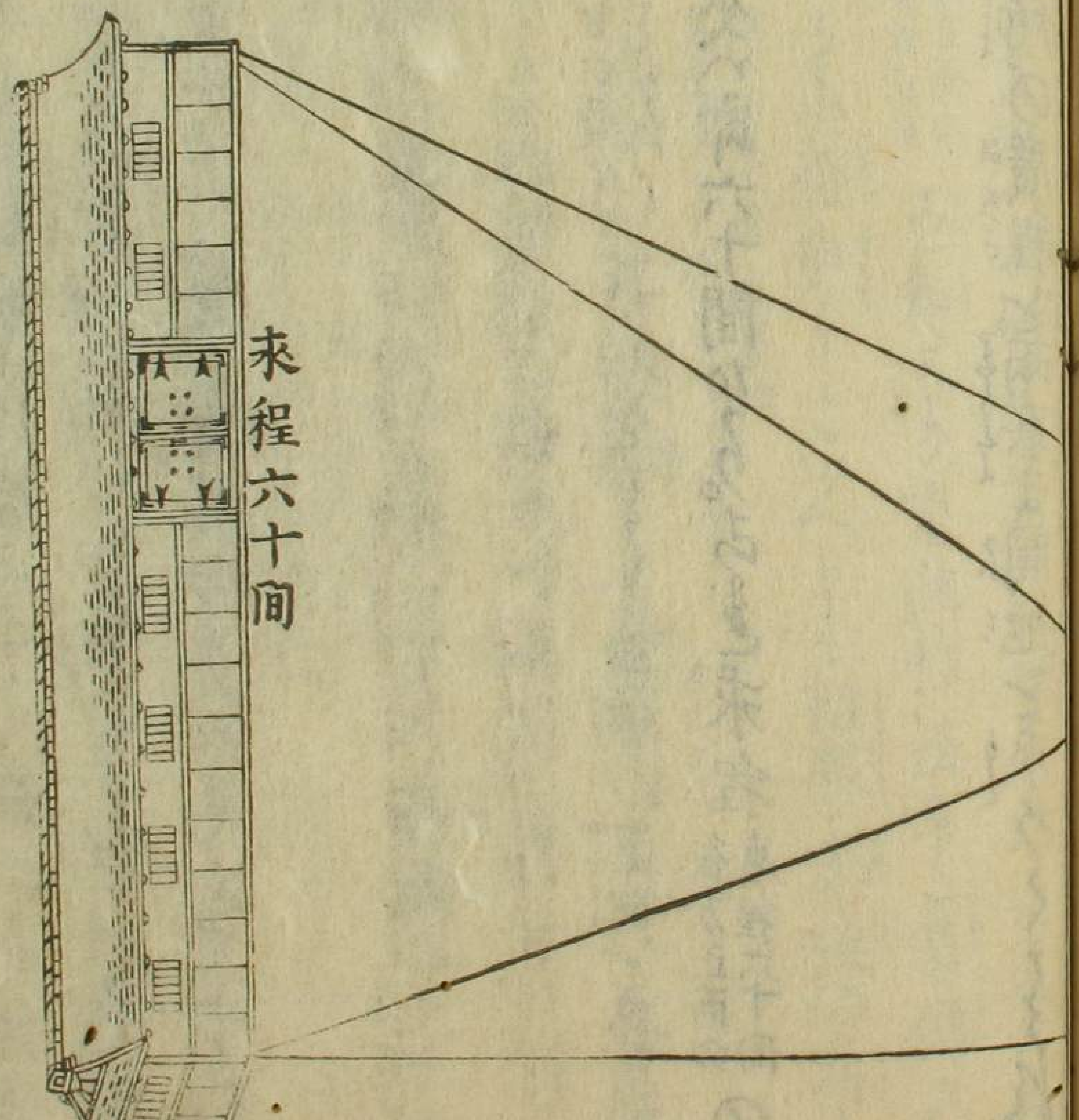
術云（下ノ図をもって云）作法のごとく始計してのち（一）本座に盤を方正に居盤東より正に目的の右を見込（二）其盤艮を要として斜に目的の左を見込定規に随ひて墨を引（三）本座の右前の方へ斜に間數を量開地を求て（右斜開二十間）開印を立させ盤艮より是をとほし斜に見通墨を引。




### 大成之圖



此⊠ハ右斜開二十間ノ縮口也
此○ハ求程六十間ノ縮間ナリ
⊠ヲ以テ○ヲ量ルニ三夾有リ
三夾ハ即六十間ナリ是求程ノ
間數ナリ委クハ本文ノ如シ



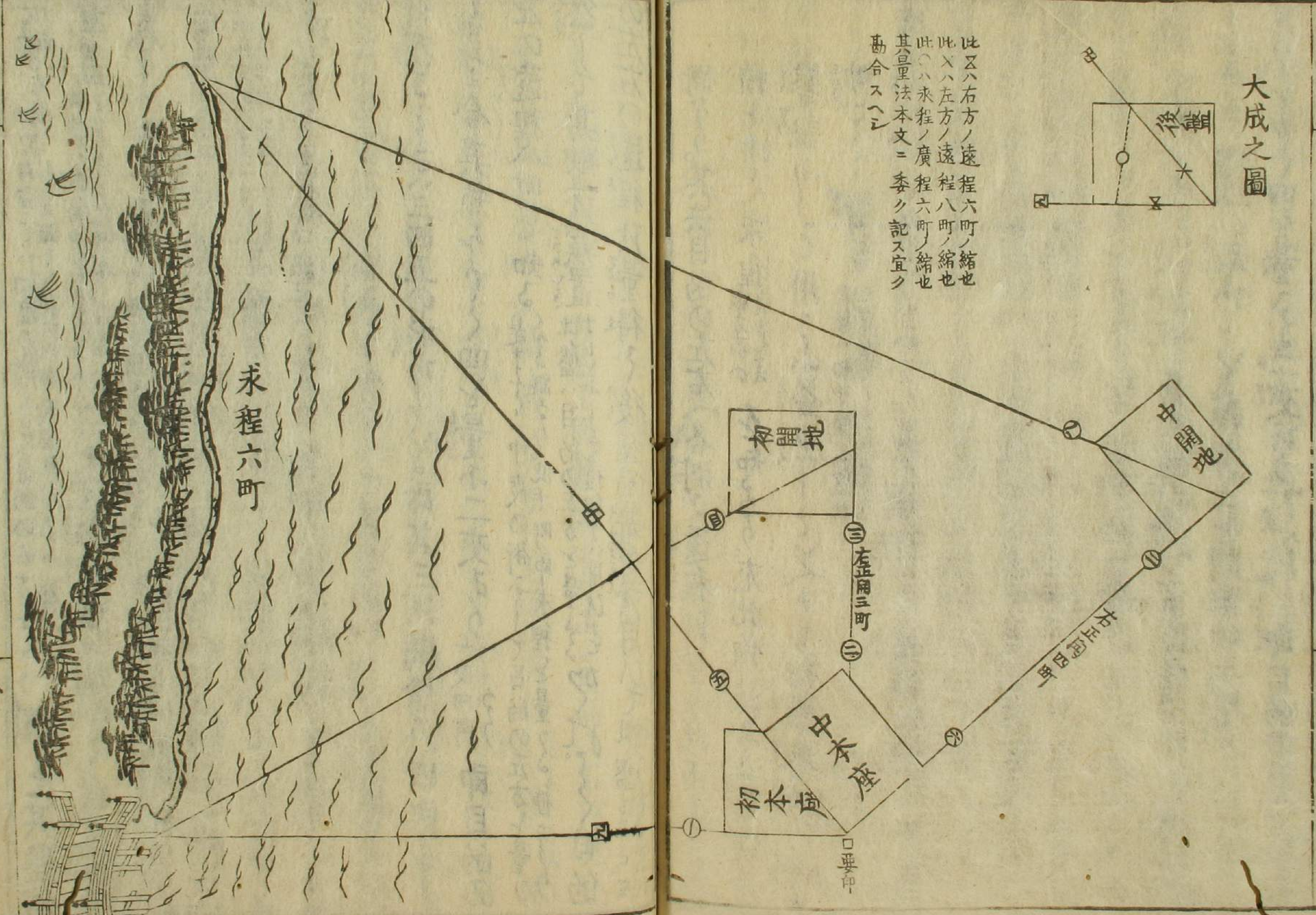
本座に残印を立㊃開地に至て。残印を再見して、盤を方正に居㈤其盤巽を會わし。見通の墨を要わしく斜に目的乃右を見返墨を引㈥其墨の要（是ハ見通の墨の要なり）を要わし。左の見込の墨乃盤南の端を會わして。斜に目的の左を見返墨を引。然して盤面大成を

今現たる所の。盤北の斜口ハ開除（右斜開二十間）の縮口なり。盤南の正口を求程（彼正面廣程）の縮間なり。其盤北の斜口を開除の間數九間に量合。渾発をもつく此斜口を一変とし（変ハ是を九間の矩となりく）其矩をもつく盤南の正口を量れに三変なり。（一変九間）つまり三変ハ即六十間なり。あとも求程（彼方正面の廣程六十間）の間數なり

一知兩開方

此術ハ彼面一ケ所の廣程を。兩取に開地を求めくてそれ術なり。其法目的の左右へ各別に遠程を量り。此兩遠程を種として。求程（彼方面の廣程を云）を知るなり。尤此作法を舊傳乃鑿説あれしく用るに益少しといへとも。初學参攷の為に姑これに贅を（此術ハ初中後に。盤を三度改てするなり）

術云（下に図をもつく云）作法のあらく品ミ始計して後初㊀本座に盤を方正に居。盤東より正に目的の右を見込。（前にもいふごとく目的乃右ハ。即本座の左と知るし）㈡右方へ正に開除（右正開三町）を求め開印を立て是を見通。本座に要印（此印毎例の残印なるとも。初中後三度の術共に。此印を肝要とかきるが故に假に名づくそうなり）を立㈢開地に迁り。再見して盤を方正に極め㊃盤巽を會わし（盤巽ハと會にさるべしといへとも。あとハ図にようくに）其目的（目的の右を云）を見返墨を引。然れとさい三四五の形となる。即其三を開除の三町にとりて合（かくのごとくハ…の術）其矩をもつく四を量るに二変なり。（一変三町）つまり即目的の右の遠程


大成之圖
此⊠ハ右方ノ遠程六町ノ縮也
此×ハ左方ノ遠程八町ノ縮也
此○ハ求程ノ廣程六町ノ縮也
其量法本文ニ委ク記ス宜ク
勘合スヘシ
後開地
中開地
初開地
左正開三町
右正開四町
中本座
初本座
口要印
求程六町

六町と知る。〔是まづくハ初度の術にして目的の右方をとる蹤なり。此六町即求程をとる種なり〕然して其盤を藏置〔此盤ハ目的の右方をとりて後術にハ用ひず〕中 ⑤扨新盤を圖のごとく。斜に要印に合せて方正に居。〔初術に用ひたる盤を其侭用ゆる事よろしからずども。盤中の墨混しやすきが故に。今新盤を用ゆ〕盤東より正に目的の左を〔目的の左ハ即本座の右なり〕見込。〔此見込実ハ正にあらねど。然ども盤を斜に居るが故に。今見る所よりしてハ正なり〕⑥其盤西より右方へ正に開除〔右正开四町〕を求開印を立て是を見通⑦開地にいたり要印〔此印前術にも用ゆる印なり〕を再見して盤を方正に極⑧盤巽を會ふして其目的〔目的の左と云〕を見返墨を引。然るときハ三四五の形にいたる。即其三を開除乃四町よりとるを合。其矩をもつて四と量ふ二夾まり〔二夾四町てなり〕即目的の左の遠程八町と知る。〔是まづくハ中度の術にして目的の左方と量りたる蹤なり。此十町即求程を量る種なり〕然して其盤を藏置〔此盤ハ目的の左方を量りて後術にハ用ひず〕かくのごとく目的の左右の遠程を量得て後 後 ⑨新盤を用ひて〔此盤もまた必新らしきに

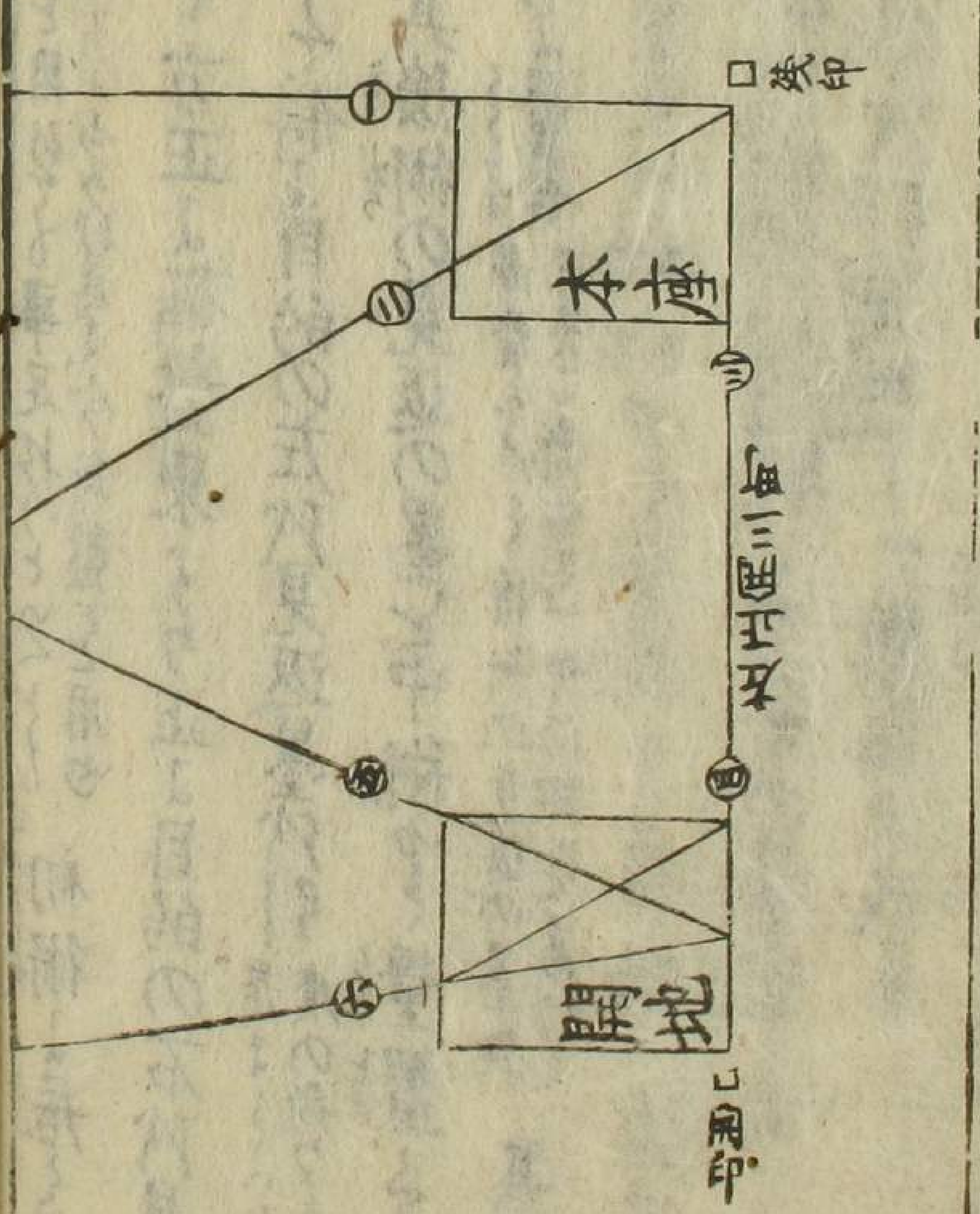


限らず。初術中術の盤を用ひても事足ぬれども。初學の士を暁しやすからしめん為に。今新盤を用ゆ〕初術に居るがごとく要印に合せて方正に極。盤東より正に目的の右を見込 ⑩其盤艮を要ふして斜に目的の左を見返墨を引〔是まづくハ後度の術なり〕界 扨剸盤法をのぞく。其後術の見返の墨を中術のごとく量置する目的の左方の遠程八町に量合。〔渾発をのぞく後術の見返の墨を十夾に夾合せ一町の矩と名づく〕其矩をもつて後術の見込の盤東を。初術のごとく量置する目的乃右方に遠程六町量取。〔盤北より盤南の方へ量取。其残余をハ剸まえて不用〕其六町の量留より八町の墨の終へ。小斜に界を引渡。然して盤面大成を今現れる所の。見込ハ目的の右までの遠程なり。見返ハ目的の左までの遠程なり。今引渡する小斜の界ハ彼面乃廣程なり。其見込見返を量る矩をもつて。此界を量るに六夾なり。〔一夾一町てなり〕六夾ハ即六町なり。是求程の間數なり

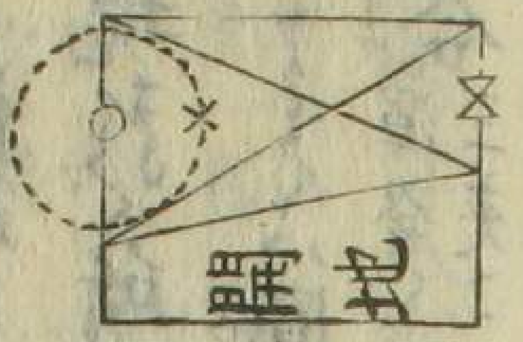
## 圓知正開方

此術ハ野外の村里海中の嶋嶼なとへ彼所に在る所の圓周并ニ量知る小用也。其法往々廣狭術に述る所をもつて推知すへし。聊異なる作法ある事ハ術中に記す

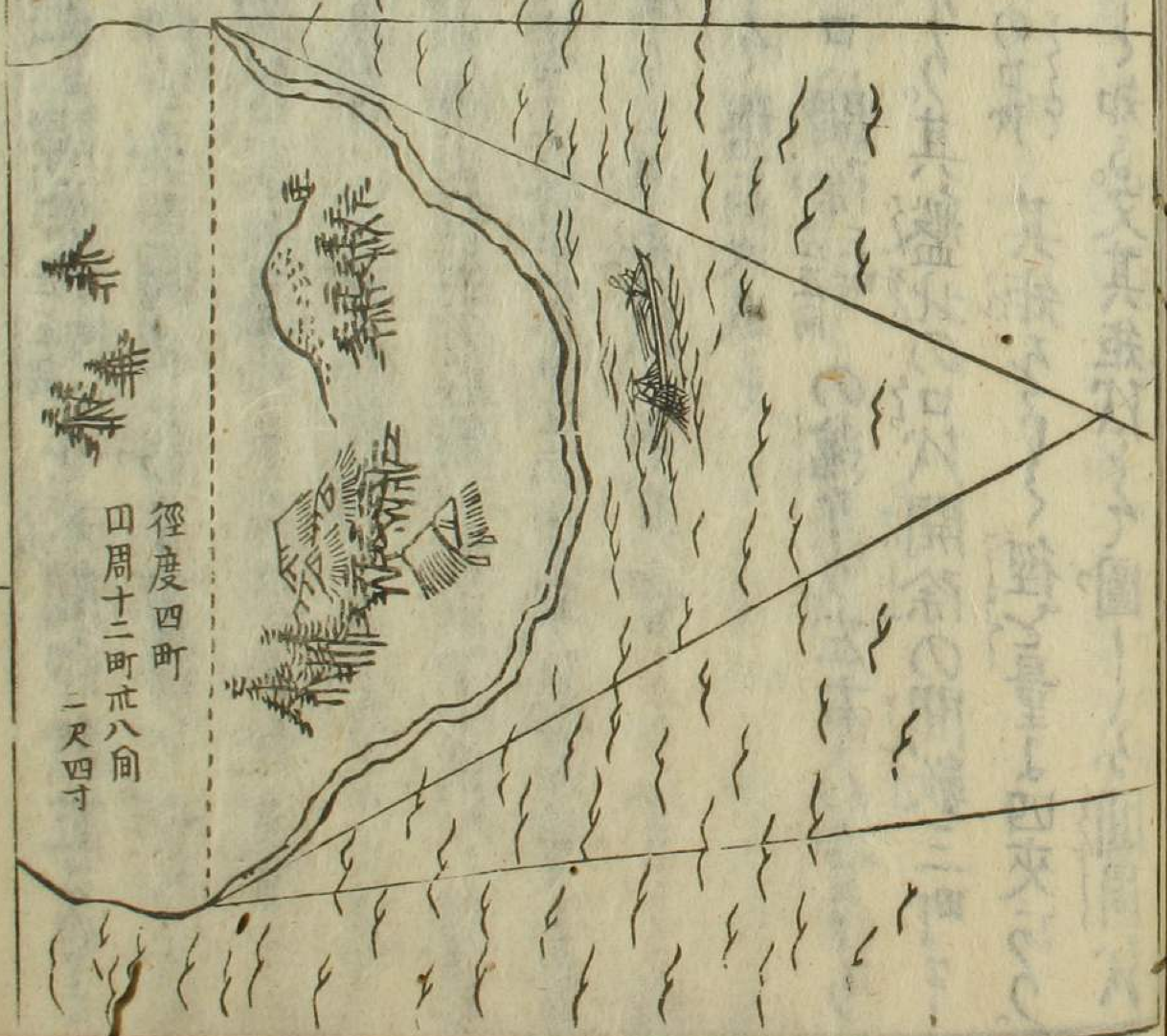
術云 下に図あり所とりて云 品々作法のおとく始計しくのち㊀本座に盤并方正に居盤西より正に目的の左頬を見込㊁其盤乾を要ふして斜に目的の右頬を




大成之圖



此⊠ハ左正周三町ノ縮口ナリ
此○ハ未程径度四町ノ縮ナリ
此×ハ未程四周十二町廿八間
二尺四寸ノ縮也其量法本文ニ
記スカ如ニ考合スヘシ



見込墨を引㊂左方へ正に開除（左正角三町）を求開印を立させて是を見通本座に殘印を立㊃開地に移り其殘印を再見して盤を方正に極㊄目的の右頬を見込る墨の中程を會かし斜に目的の左頬を見返墨を引㊅今左頬を見返るは墨乃盤北の端を要かして小斜に目的の右頬を見返墨を引然れ時は見込の墨と見返乃墨と盤中小墨の會現れ其會と會の空間を圓周の徑度とし渾發をもつて其會より會まで溢杯に圓形を圖をし然して盤面大成を今現れし所の盤北の口は開除（左正角三町）の縮なり左右乃會より會までは圓周の徑なり其盤北の口を開除の間數三町とす量合（渾発をもつて此盤北の口を三夾に夾て一町の矩とする）其矩をもつて徑を量に四夾になり（一夾一町てなり）即其徑四町と知る又其矩をもつて圖しる圓周を量るに十二夾六分四釐になり（十二夾は即十二町なり六分四釐は卅八間二尺四寸なり）即其周十二町卅八間二尺四寸と知るべし

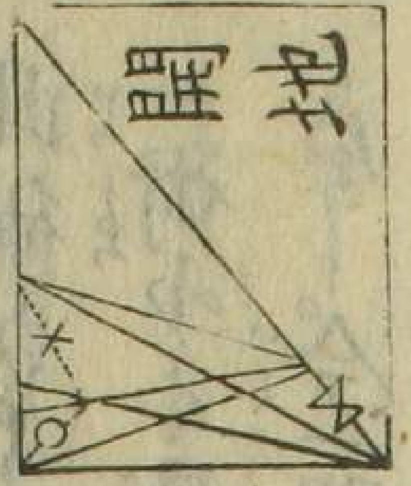
## 兩知一開方

此術は池沼叢澤等のたぐひ多き場所を本座となる彼面の廣狹數箇所を一開して一同に量知に用ゆ今其二箇所をを量る作法を左に記す

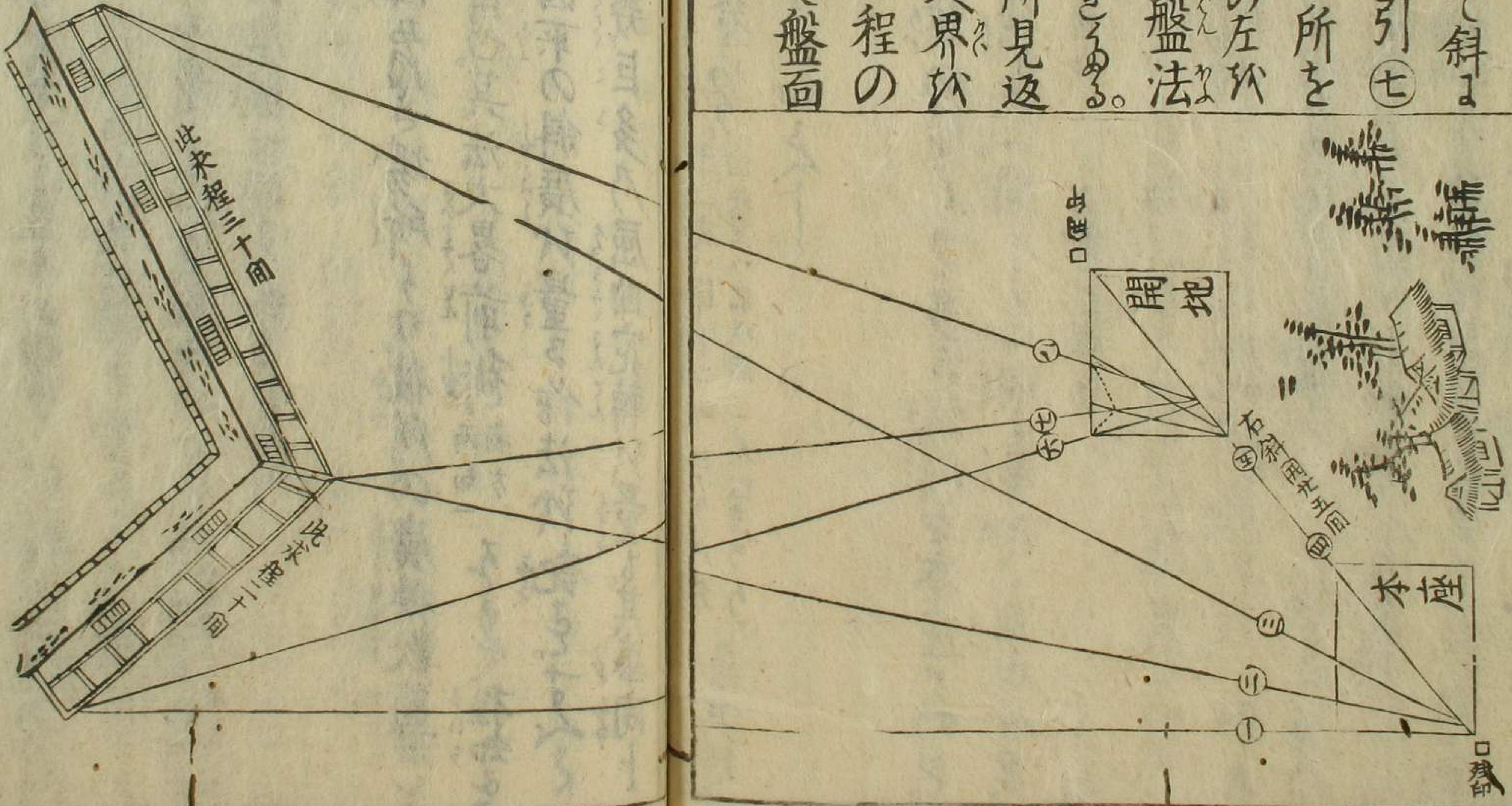
術云（下に図するところをいふ）作法のごとく始計畢てのち㊀本座に盤を横に方正に居（凡て此術のごとく見込見返數多なる時はいつれも盤を横になして居べし其作法前にくわし）盤東より正に目的の右を見込㊁其盤艮を要かして斜に目的乃中を見込墨を引㊂同所より又斜に目的の左を見込墨を引㊃右前へ斜に開除（右斜角九五間）を求開印を立させてこれを見通本座に殘印を立㊃開地に至り彼印を再見して盤を方正

小極め㊅其再見の墨を要にし盤巽を會ふして斜よ目的の右を見返墨を引㊆其墨の要よ成りしる所を要よ用て斜よ目的の左を見通墨を引㊊扨割盤法をもく盤南よ現しまるる。三所見込の墨と三所見返の墨と其會より會へ界を引渡をときさ。二所来程の縮形何しいも然して盤面大成まと

大成之圖




⊠ハ右斜間二十五間ノ縮口也
○ハ一二ノ廣程九間ノ縮口也
×ハ二三ノ廣程卅間ノ縮口也
⊠ヲ以テ○ヲ量リ九間ヲ知ル
⊠ヲ以テ×ヲ量リ卅間ヲ知ル
其審ナルコハ本文ニ記ス



今現する所の盤北の斜口ハ開除（右斜開廿五間）の縮なり。盤南二所の界の斜口（今剰盤法ニて引渡よる斜界）ハ求程（彼斜面廣程）二所の縮なり。其ハ盤北乃斜口を開除の間數廿五間ニ量合。（此斜口を一夾ニ夾こ廿五間の矩と名づ）其矩ハかく。盤南一二の間ハ斜界を量るニ五分の四なり。（廿五間の矩を五分とすれときハ其一分五間ニ當る。然ときハ則五分の四ハ廿間なり）即一二の間の廣程廿間と知ふなり。又其矩ニて盤南二三の間乃斜界を量るニ一夾五分の一なり。（一夾ハ廿五間。五分の一ハ五間。都合三十間也）即二三の間の廣程卅間と知るなり

## 四知一開方

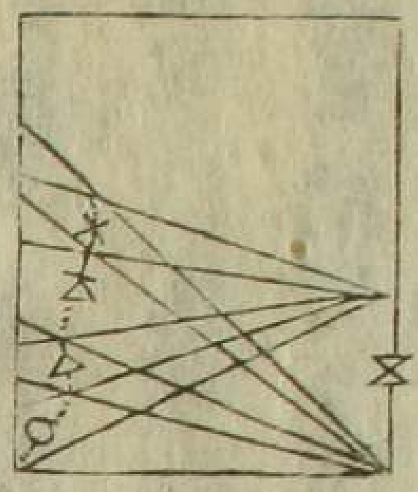
此術ハまた妨障ある場所より。彼所の廣挾數箇所を一術ふて量るに用也。其法大畧前術（両知一開方）ニおなじ推知をなし。今一開して四所の斜廣を量る作法を記さとすべく此理ニ擬ときハ幾巨多乃屈曲宛轉を量も其事同ド



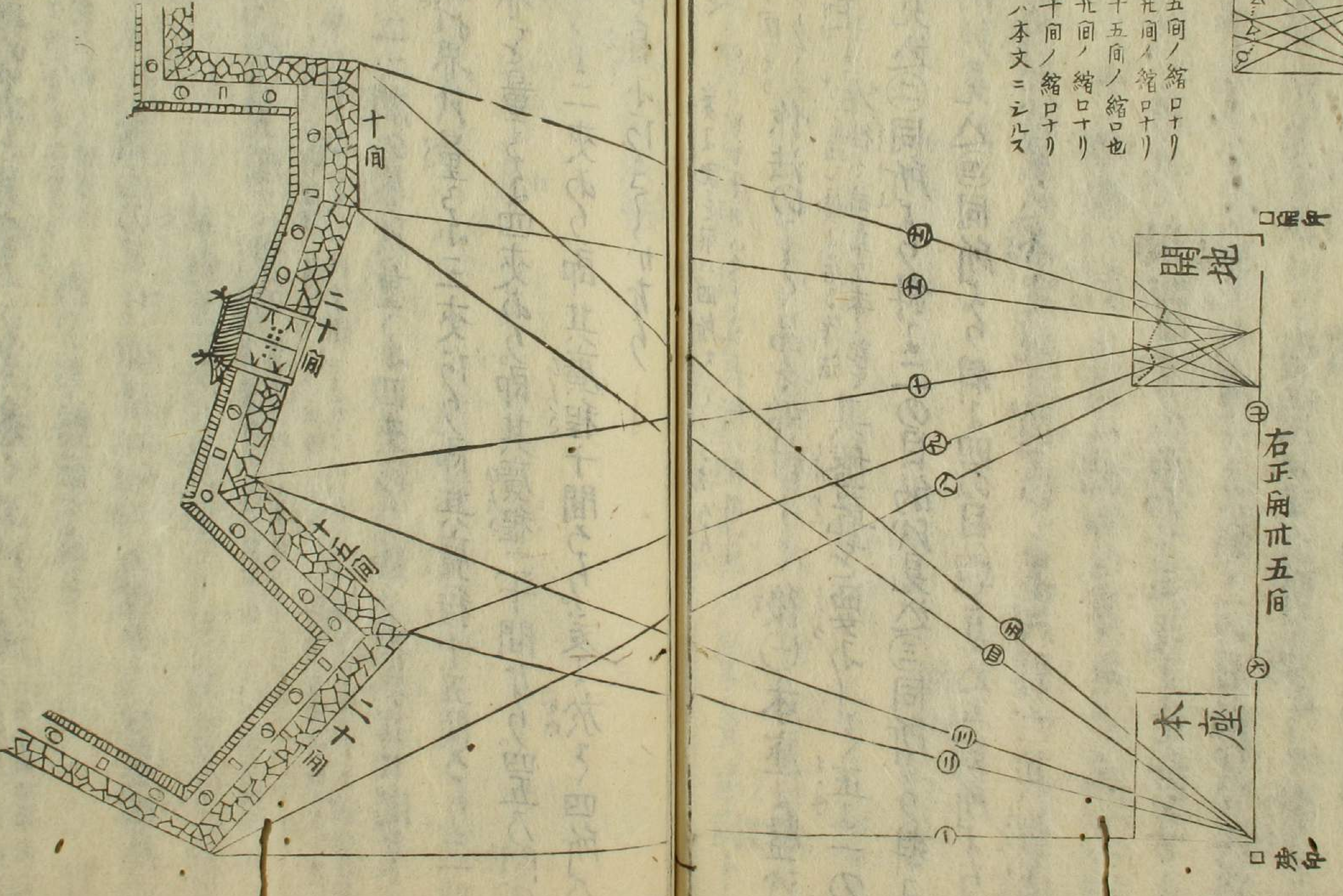
かるべし（爰ニまた所ハ四所をえらる法なり。五所七所といへども。其術ハおなじ）

術云（下ノ図をみて云所とあて云）作法のごとく品々始計しまく後㊀本座ニ盤を横ニ方正ニ居（まへの盤を横ニ居る作法往々前章ニ委く記セ）其盤乾を要ふしまく正ニ一の目的を見込㊁同所より斜ニ二の目的を見込㊂同所より斜ニ三の目的を見込㊃同所より斜ニ四の目的を見込㊄同所より斜ニ五の目的を見込。各定規ニ随がひまく墨を引㊅其盤南より右方へ正ニ開除（右正開廿五間）を求め。開印を立さしまく是を右通。本座ニ殘印を立㊆開地ニいたり。殘印を再見して盤を方正ニ極㊇其盤西より盤艮を會ふして斜ニ一の目的を見返。㊈今一の目的を見返さる盤西の墨の端を要ふして。斜ニ二の目的を見返㊉同所より斜ニ三の目的を見返⑪同所より斜ニ四の目的を見返⑫同所より斜ニ五の目的を見返各

大成之圖



⧖ハ右正角廿五間ノ縮口ナリ
○ハ一二ノ廣廿間ノ縮口ナリ
△ハ二三ノ廣十五間ノ縮口也
△ハ三四ノ廣廿間ノ縮口ナリ
×ハ四五ノ廣十間ノ縮口ナリ
其量法巨細ハ本文ニミルス
勘合スヘシ



定規に随ひて墨を引 界 扨剸盤法をもつて五所見込の墨と。五所見返の墨と。其會より會へ悉く界を引渡（一二の間。二三の間。三四の間。四五の間。）（ともにそ四ケ所、會より會へ界を引。是彼面銘々の廣さなり）然して盤面大成を

今現する所の。盤西の正口ハ開除（右正間卅五間）の縮なり。盤東四所の斜界ハ（剸盤法をもつて引たる界なり）彼斜面四所の廣程なり。其盤西乃正口を開除の間數卅五間に量合（渾発をもつて此正口を一丈に爽え、卅五間の矩となづくべき事。尤よろしきふうりといへども左しくハ還て扨法迂遠なるゆへなし。今此正口を七丈に爽え。五間の矩と名るなり）其矩（開除卅五間を七丈に爽へハ五間の矩）なるべし。一二の間の界を量るに四爽あり。即其廣程廿間なり。二三の間ハ界を量るに三爽あり。即其廣程十五間なり。三四の間の界を量るに四爽あり。即其廣程二十間なり。四五乃間の界を量るに二爽あり。即其廣程十間なり。爰に於て四所乃廣程各自にいさゝかなり。



量盤術高深法

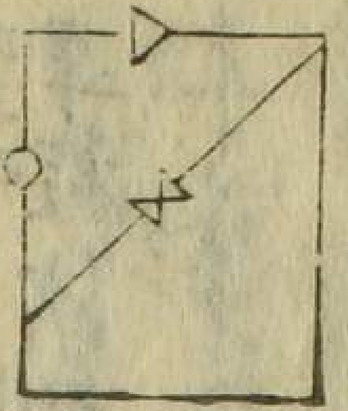
量深二術方

此術ハ山上に居て谷心の深程を量り。城樓に登て郭外乃卑程を知り。或ハ山河に棧橋を渡し。或ハ磯岸に井樓を上る等に用ゆ。今其谷心の直立を量る作法をもつて爰に書せ。餘ハ是に傚ひて知るべし（此術ハまず初に遠近術を勤て空径の遠程をとる。後に又其座にて高深術を勤め。前後二術をかく其深程の全躰を量り知るなり。書に術中に記を）

術云（後ふる下に図する采とおもへく云）まづ本座より 初 目的下の遠近術をもつて。（目的下の遠近術といふハ。盤の彼なる下を此を上にて遠近を量るなり。其くハしき事ハ別巻に記せる故に爰に其作法と不載）谷心の目的まで空径（空径といふハ中の指渡となり。地形の事に拘らざるにて）の間數を量るに八十丈なり。是をもつて本術の種とする（右にいふ所ハ空径を量りて間数を得るすての法なりしで。引用なし。故に八十間を得て後ハ此盤を不用なり）

後 扨作法のごとく本座に（此本座ハ目的下の術を勤る座を即用る也）盤を直立して居、

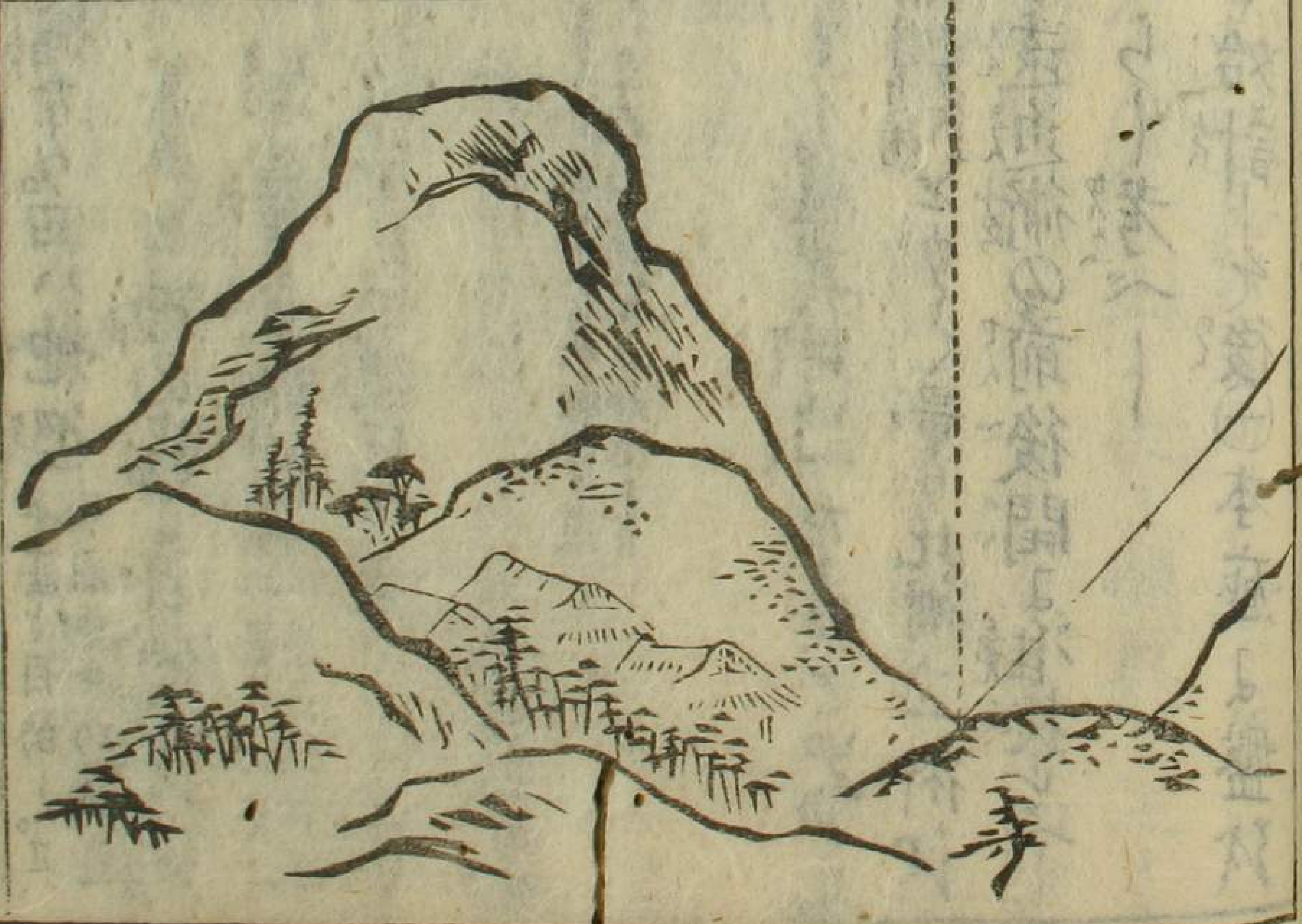
# 大成之圖



此又ハ五也空径ノ縮方
此△ハ四也地径ノ縮ナリ
此○ハ三也求程ノ縮ナリ
又ヲ以テ○ヲ量ル時ハ即
其求程アラワル

下ノ図あるごとく。盤北を上とし。盤南を下として居るなり。其盤東盤西ハ勝手のよろしきにまかせて変すへし。盤西を彼とし。盤東を此方として居るなり。猶くハしくハ初巻にあるを定規に針を刺。盤艮を要として斜に谷心の目的へ見込墨を引然する時ハ三四五盤西を三とし。盤北を四とし。今引渡する斜の墨を五とすとの形現すもの。盤面大成を

求程五十七間



今現す所の三ハ求程（谷心直立の深程）の縮なり。四ハ地径（本座と目的との両間地中の直径）なり。五ハ空径（本座と目的と其両間空中の斜径）なり。其五を種の為に目的下の術ゆゑ量置直する。空径の間数八十間に量合。（盤中の斜の墨を八爻に変して十間の矩として勿論）

此斜墨は一爻に変ずれバ八十間の矩と名く其矩（斜の墨を八爻に変ずる十間の矩）をもつて彼三を量るに五爻七分になり。（一爻八十間なれば七分八十七間なり）五爻七分ハ即五十七間なり。是求程（谷心直立深程）の間数なり（五十七間）或ハ其矩をもつて四を量れバ地径の遠程なり。其矩をもつて五を量れバ空径の遠程と知べし

## 量突一術方

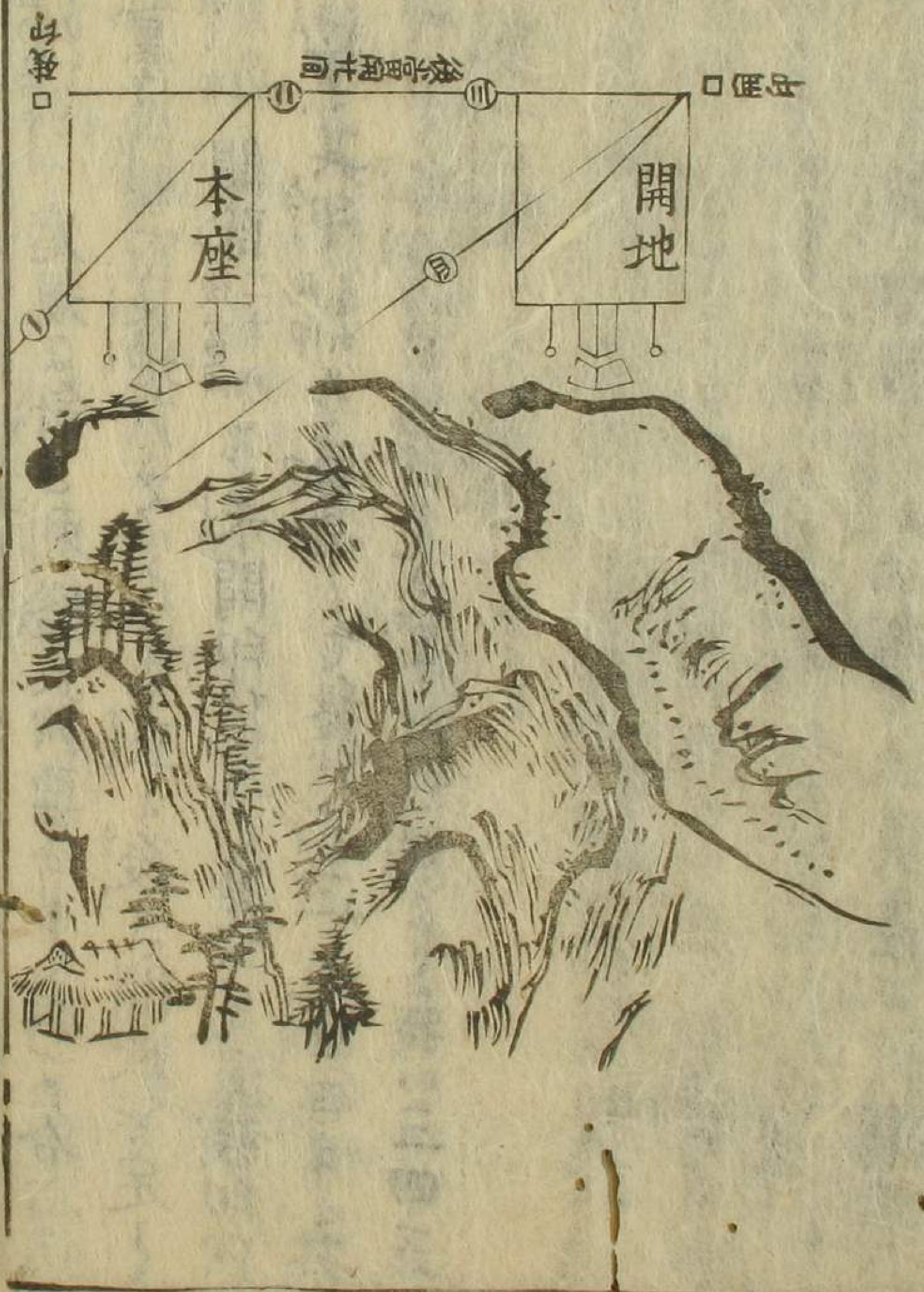
此術も亦前術（量深二術方）に等し。但其用ハ一なりといへども其法ハ異なり。前術ハ二術（遠近術・高深術）をかねて量り此術ハ一術をもつて兼て知るなり。其大略遠近術の前後閧に准ずべし。猶術中に巨細を記を照らし考べし

術云（下に図する眼とかくる云）品々作法のごとく始計して後㊀本座に盤を直立に居。（盤の居やう前のごとし）定規に針を刺盤良を要ふして斜に谷心の目的を見込墨を引㊁良地をえらんで正に後さ間数を定て閧除（後當閧二十間）（高深術閧の間数も亦三十分一の法を用ゆ）を求。閧印を立て是を見通残印を立㊂閧地に至て其印（残印を云）を再見して盤を方正に極㊃まて其盤良を要ふして谷心の目的を見込墨を引。然ざる時ハ三四五の形と別に差一口現るゝ。盤面大成を

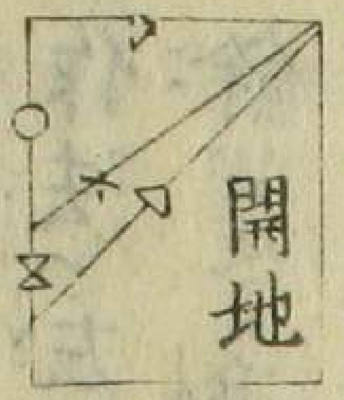
今現す所の三（三とハ差口より上を号く。此縮口実ハ差口と合して谷心の直立なり。故に合して求程となるべしといへども其術に随ひ[illegible]甚しく鑒るゝが故に。差口を省ひて変に直立の深程と名き求程に用ゆ）ハ求程の縮なり。五ハ假借なり。四（四ハ元来假借にあらず。本座より谷心すぐに地中の直径なり。今略を）もまた假借とす（然れども本理にそむかず。還て其術鑒るゆゑなり）。差ハ（差と三より假借とるそ）ちがひて下を開除（後當閧二十間）の縮なり。其差口を開除乃間数二十間に量合。（差口を一爻に変ず。二十間の矩と名く）其矩をもつて彼三（本法にて換る時ハ三と差と合して）を量るに二爻半になり。（求程の間数なりといへども然されハ其法鑒るゆゑに。今略法を用ひ差を加入せずして求程に用ゆ）

一丈ハ廿間なり
半丈ハ十間なり
二丈半ハ即五十間なり。是求程 谷心直立の深程五十間 の間數

或ハ其矩をかく四を量ときハ本座より谷心まで地径の遠程なり。
なり其矩をかく五を量とハ本座より谷心まで空径の遠程と知べし



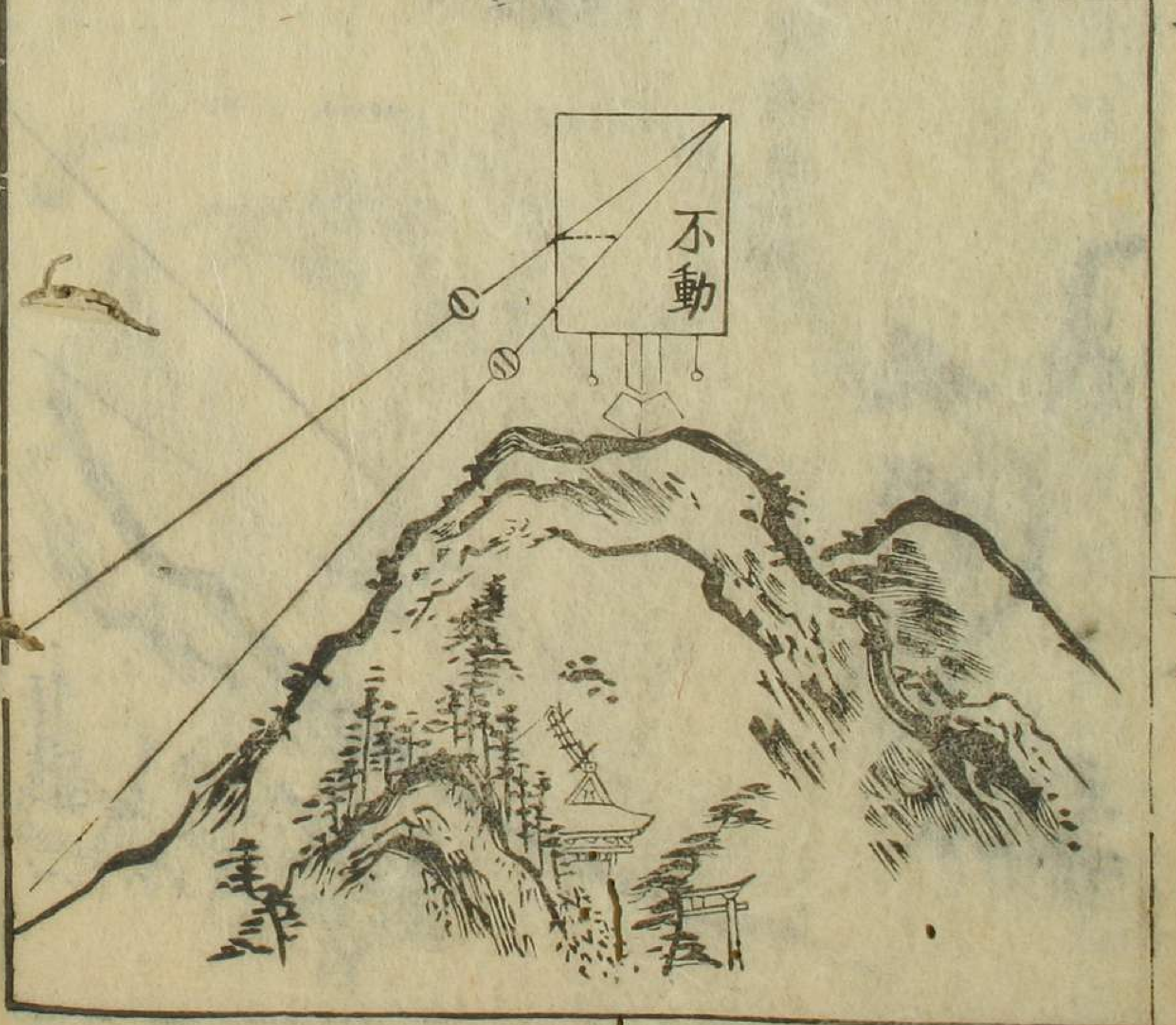

## 大成之圖




⌛ハ差也前除二十間ノ縮ナリ
○ハ三也求程五十間ノ縮ナリ
⌛ヲ以テ○ヲ量ル時ハ其求程アラワル
㐅ハ四也假借ノ縮ナリ実ハ地径也
△ハ五也假借ノ縮ナリ実ハ斜径也
×ハ新五也假借也大成ノ後ハ無用ノ縮ナリ

谷心量廣方

此術ハ岑峰ニ居て山間の谷幅を量。樓上より城外の堀幅㕝知る等ニ用也。まべく高さ取より低き地の廣狭を量る術なり。今爰ニ谷幅の廣程を知る作法を左ニ記す。其餘ハ是ニ准じて知るべし 此量ハ谷心廣方ハ目的下の遠近術

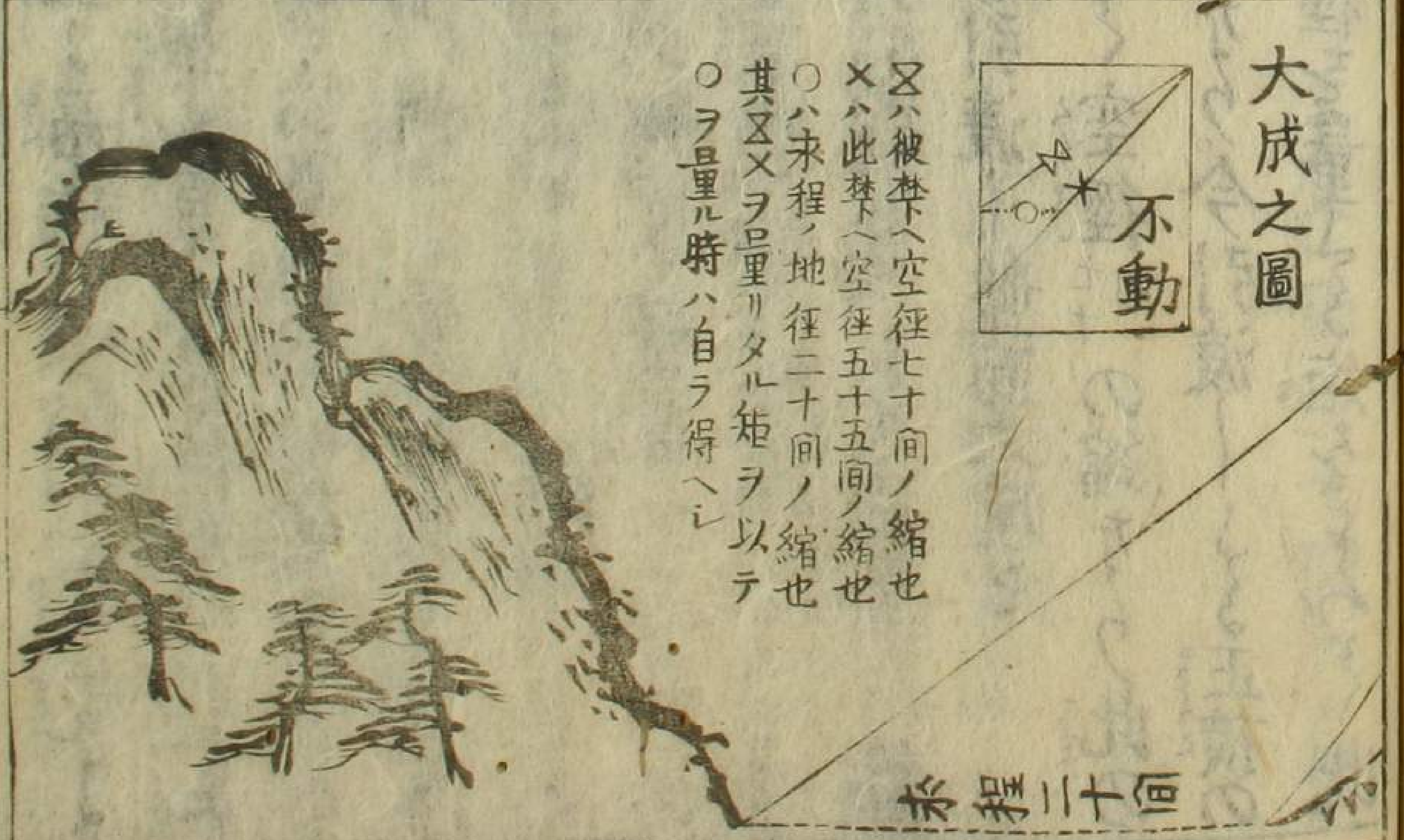





を二度動く。彼此の梺下まて遠程をも量り知り。次ニ其取まて高深術をほどく 其全体を量知るなり。前後三術をめく大成まて知べし

術云 下ニ図さる取をめく云 先本座より㊥初目的下の遠近術 目的下の作法別章ニ有るを故ニ爰ニ不載 をめく。彼山れ梺へ見込。空徑を量れバ其間數七十間と知るㇾ㊥又同術をもとて此山れ梺へ見込。空徑を量る小其間數五十五間と知 此山の梺下まても。其一方の空徑ばかり量りても其術同事なりといへども。未熟の人の為ニ。彼此を量りて知べき法を述。

此彼此の空徑をめく本術の種とも。是までハ。本座より彼山此山。両梺下まてく空徑を量る別術なり。尤本術ニかくハらざる故ニ其図其辞をも畧して爰ニ不記 ㊦扨是より高深術の作法をいふ ㊀本座



此本座ハ。家初ニ遠近術をつとめたる場所なりけれバ　ニ盤を直立ニ居（盤の居やうハ前ニおなし）定規ニ針を刺盤艮を要ニして斜ニ彼山の麓を見込墨を引㊁盤艮を要ニして斜ニ此山の麓を見込墨を引（界）扨剸盤法をなさく彼山乃麓を見込たる墨を目的下とし術のごとく量置たる空徑乃間數七十間（種の為ニ家初ニ量置たるなり）ニ量合。（渾発をもつて亡変ニ変ニ十間の矩とくると）其矩をもつて。此山の麓を見込たる墨を目的下の術のごとく量置たる空徑の間數五十五間（是もまた種乃為ニ家初量置たるなり）を量取（此山麓へ見込の墨を上より下へ五十五間量取なり）此墨の量留（此の見込の墨五十五間量取たる留をいふなり）より彼墨乃留（彼の見込の墨の終り盤西の端をいふなり）までく界を正横ニ引渡し。盤面大成を（して其残余をバ剸捨て不用なり）今現れたる所の彼の墨ハ彼山の麓までの空徑（七十間）の縮なり。此の墨ハ此山の麓までの空徑（五十五間）の縮なり。今引渡しる正横の界ハ求程（山間谷心の地径をいふ）の縮なり其空徑を量たる矩をもつて此正横の界を量るニ二変なり。（一変十間）つもり二変ハ即二十間なれバ是求程（山間谷心の地径二十間）の間數なり

**量高二術方**

此術ハ平地ニ處して。大山高岳より以下城樓宮室ゆるいハ堂塔樹竹等をすべて高程を量るニ用ゆ。今其山岳直立の高程を量る作法をもつて。爰ニ書さ。其他ハ推知すべし

（此術ハ。初ニ遠近術をもつて其空徑を量り。後ニ其ハ座みなく。高深術を勤。初後二術をもつて全く量る法なり）

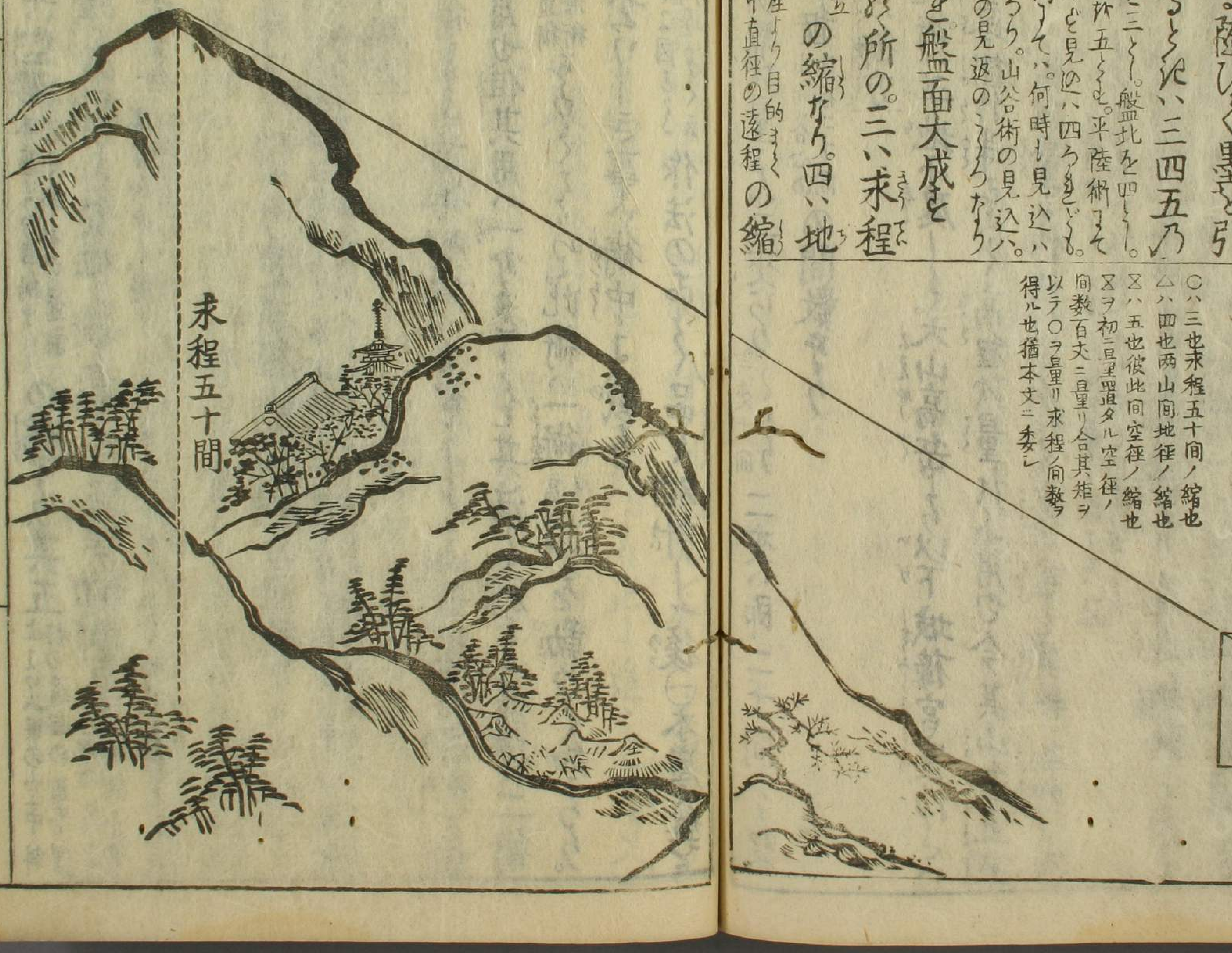
術云（下ニ図をみる取をもつて云）まづ本座より㊥目的上乃遠近術をもつて（目的上の遠近術をいふハ。盤の彼を上ケ此を下ケて遠近を量るなり。猶くハしき事ハ別巻ニ記さ。故ニ爰ニ其作法を不贅）山頂の目的まで空徑（空径といふハ空中指渡の遠程をいふ前後倣之）の間數を量るニ百丈なり是をもつて本術の種とするなり。右ハ空径をもつて間数を得るのまれ作法ニして。（別用なし。故ニ百丈を量得て後ハ。此盤ハ不用なり）

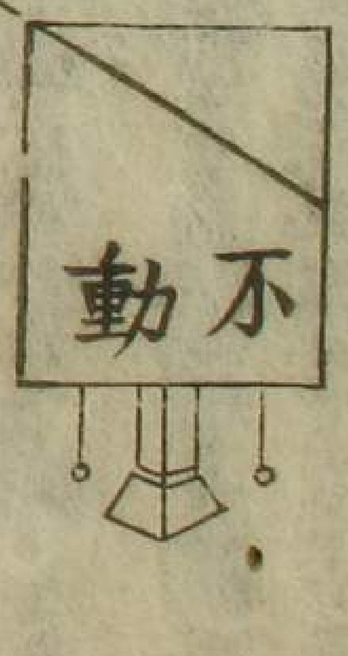
㊥扨本座ニ（此本座ハ即目的上の術を勤たる座を用るなり）盤を直立ニ居。盤の居やう（前ニくり故ニ略さ）

定規に針を刺盤乾を會ふして盤東より斜に山頂の目的を見込。定規に随ひて墨を引。然るときハ三四五乃盤東を三とし。盤北を四とし。斜の墨を五とする也。平陸術にてハかくのごとく見込ハ四なれども。山谷術にてハ何時も見込ハ五と成なり。山谷術の見込ハ平陸術の見返のところなり形現ハれ盤面大成を今現るる所の。三ハ求程（山心直立の高程）の縮なり。四ハ地徑（本座より目的まで地中直徑の遠程）の縮

大成之圖

○ハ三也求程五十間ノ縮也
△ハ四也両山間地徑ノ縮也
⊠ハ五也彼此間空徑ノ縮也
⊠ヲ初ニ量置タル空徑ノ間数百丈ニ量リ合其矩ヲ以テ○ヲ量リ求程ノ間数ヲ得ル也猶本文ニ委シ




量地指南巻三

なり。五ハ空徑（本座より目的まで空中斜徑の遠程）の縮なり。其五（上より下の空中斜徑の遠程の墨をもつて種の為に家初に量置する丈なり）を目的上の術まで家初に量置する空徑の間數百丈ふ量合。（渾発なかりく。盤中の五の墨なし。十変に変之十丈の矩となりく。勿論此墨を一変に量合するときハ。是な百丈の矩となりく）其矩をもつて（空徑百丈な十変に変之する十丈の矩）彼三な量るふ五変ニてり。（一変十丈なり）五変ハ即五十間なり是求程（山心直立の高程五十間）の間數なりと知べし（ともかく高深術ハ。剰盤法なあくする事本法なりといへども。還く斵金る恐ハ。ほと略な用ゆ。前後倣之。又小事にハ盤尺を加入して量るべし。ふ差を捨ゆハ大差となるなり）

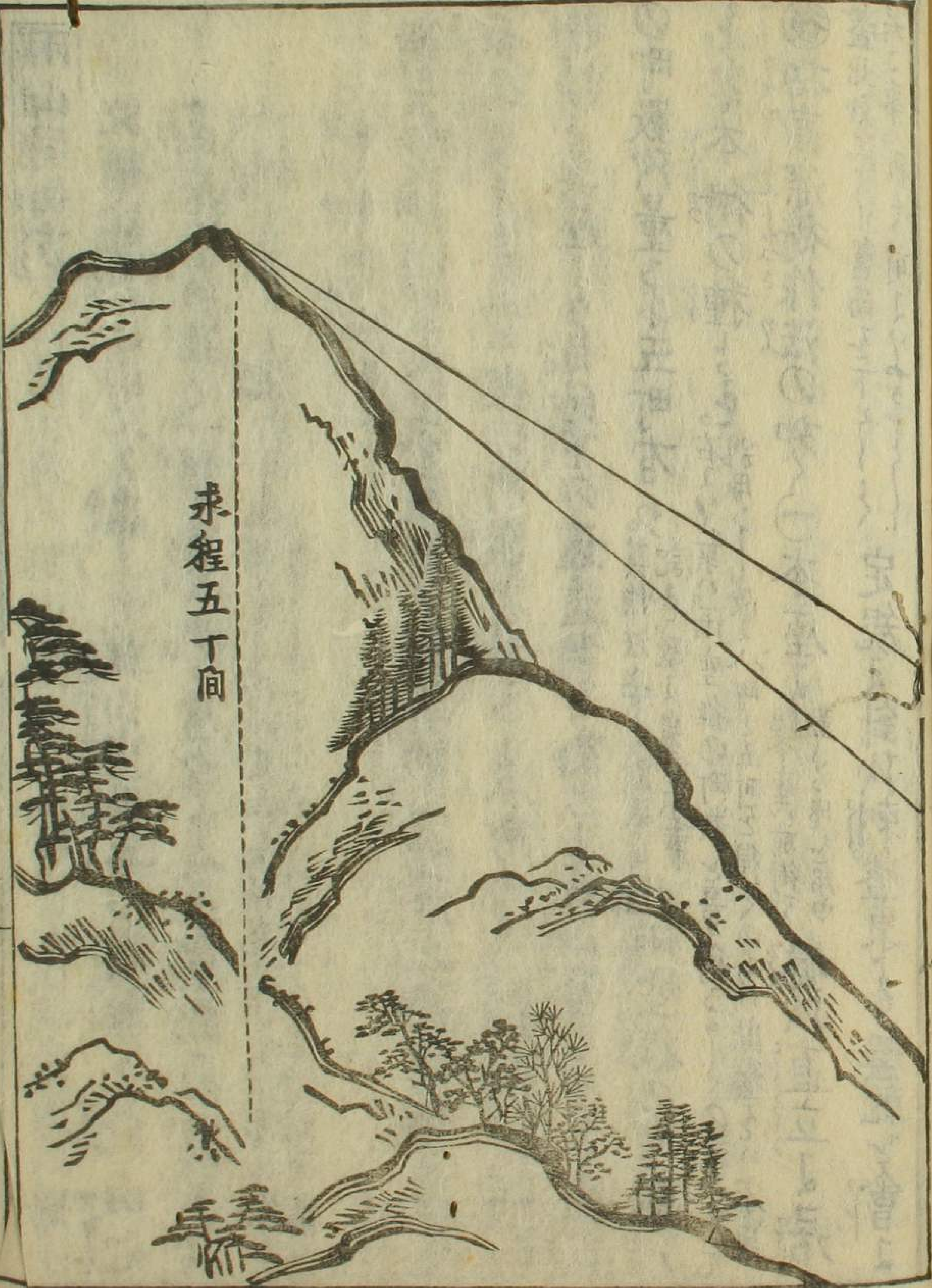
## 量高一術方

此術もまた前術（量高二術方）に同じ。山岳以下の高程を量る用ゆ。但其用ハ一なれども其法々別なり。前術ハ二術（遠近術・高深術）をもつてする。此術ハ一術（高深術）をもつて勤めて知るなり。

其くハしき事ハ術中に載す。

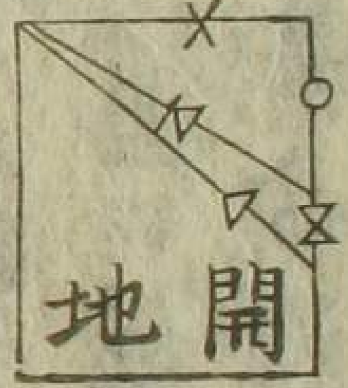
術云（下に図あり所をもつて云）作法のごとく品定め始計して後㈠本座に盤を直立ニ居。（盤の居やう前ニおなじ）定規ニ針を刺。盤乾を會にして盤東より斜ニ山頂の目的な見込墨を引㈡其所より正ニ進こと。彼方へ間數な定て（此開除の間数ハまつ大略三十分一を用ゆ）開除（前當開二十間）を求。開印を立させて是を見通。本座ニ残印な立㈢然して開地ニ至り。残印な再見まて盤を直立ふ極㈣此所よりも本座まて見込あるごとくふ。盤乾な會ふして（定規ニ針をたてし上斜ニ盤ニ當て）山頂の目的を見込。定規ニ随ひて墨な引（此術。惣して平陸術前後開の作法ニおなじ。唯盤をと直立ニ居るのミ其事異るものなり）然る時ハ。二四五（盤東を三とし盤北を四とし斜墨を五として）の形現る。盤面大成を今現れる所の三ハ求程（山心直立の高程）の縮なり。四ハ地徑（彼此両間の地中の直徑）の縮なり。五ハ假借（或又空徑）の縮なり。差口ハ開除（前當開二十間）の縮なり。

其差口な開除の間數廿間ニ量合。（差口と一変ニ変をて二十間の矩と名く）其矩をもつて彼三（此三假ニ差口と合して假の地徑の間数とし。真の地徑を量る種とする実ハ求程の間数也）を量るに二変（一変廿間なり）

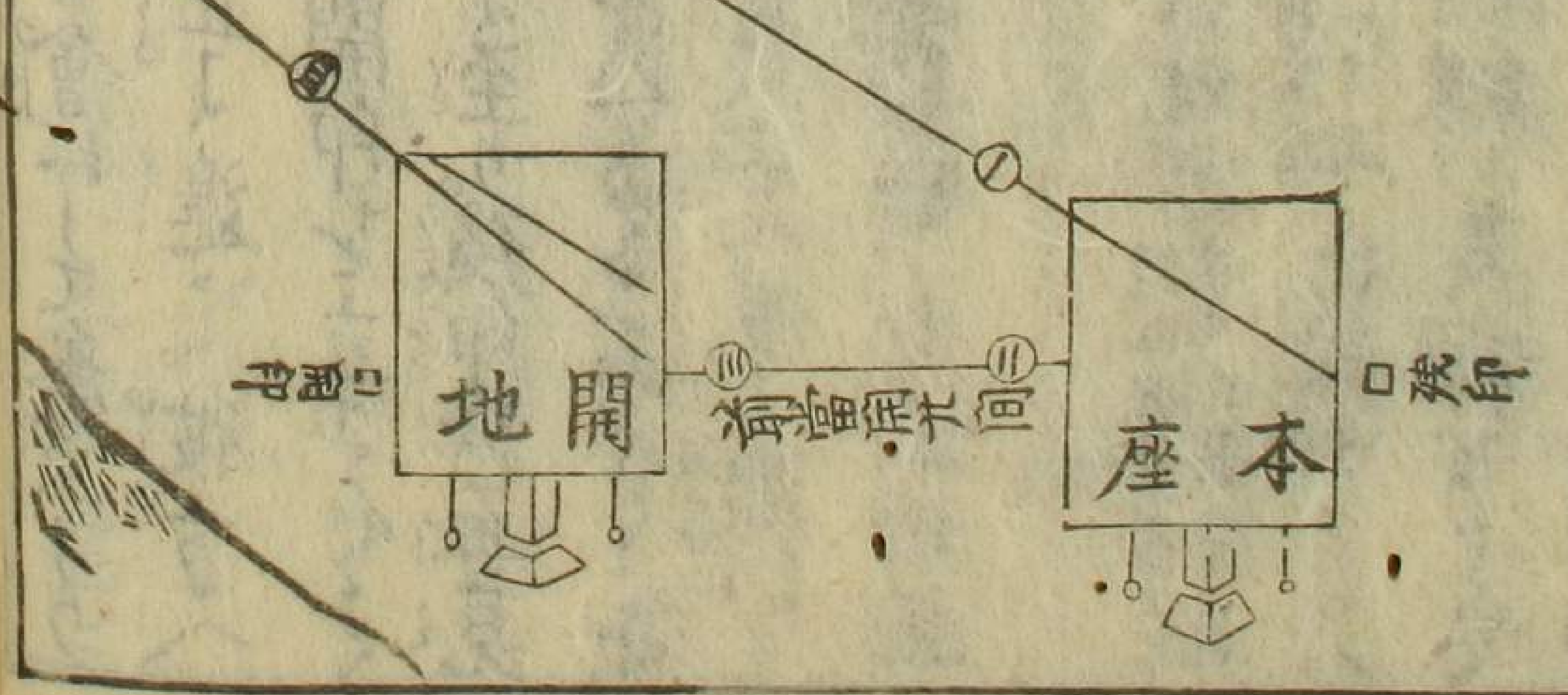



なり。其上ニ差口乃二十間を加ふれば。都合八十間なり。是真の地徑 其地徑とハ盤四を指ていふ 弥がる〻種なり。扨新ニ矩ひをなして。始ニ三と差とひとつとなる矩をハ不用して。今また四ひ量る為ニ。別ニ矩ひなすなり 四を地徑の八十間ふ量合。新ニ渾発ひ知らずして。此四ひ八変ニ変ス。十間の矩と名く 其矩ふて再度三を量るニ 三ハ初度後度二度量るから。初ふハ差口と合して假の地徑八十間ニ用ひ。後ふてハ求程の五変有り。一変十間間數ニ用るなりつゐり 五変ハ即五十間なり。是求程 山心直立の高程五十間 の間數なり

大成之圖




ㄨハ差也開除廾間ノ縮也
ㄨ〇ト合ノ假ニ地徑トシ
真ノ地徑ニ名ルノ種トス
〇ハ三也假ニㄨト合一メ
真ノ地徑ヲ得ルノ種トス
实ハ求程直立ノ縮口也
ㄨハ旧五也假借ナリ
△ハ新五也假借ナリ
量法本文ニ依テ考ウヘシ



兩山同知方

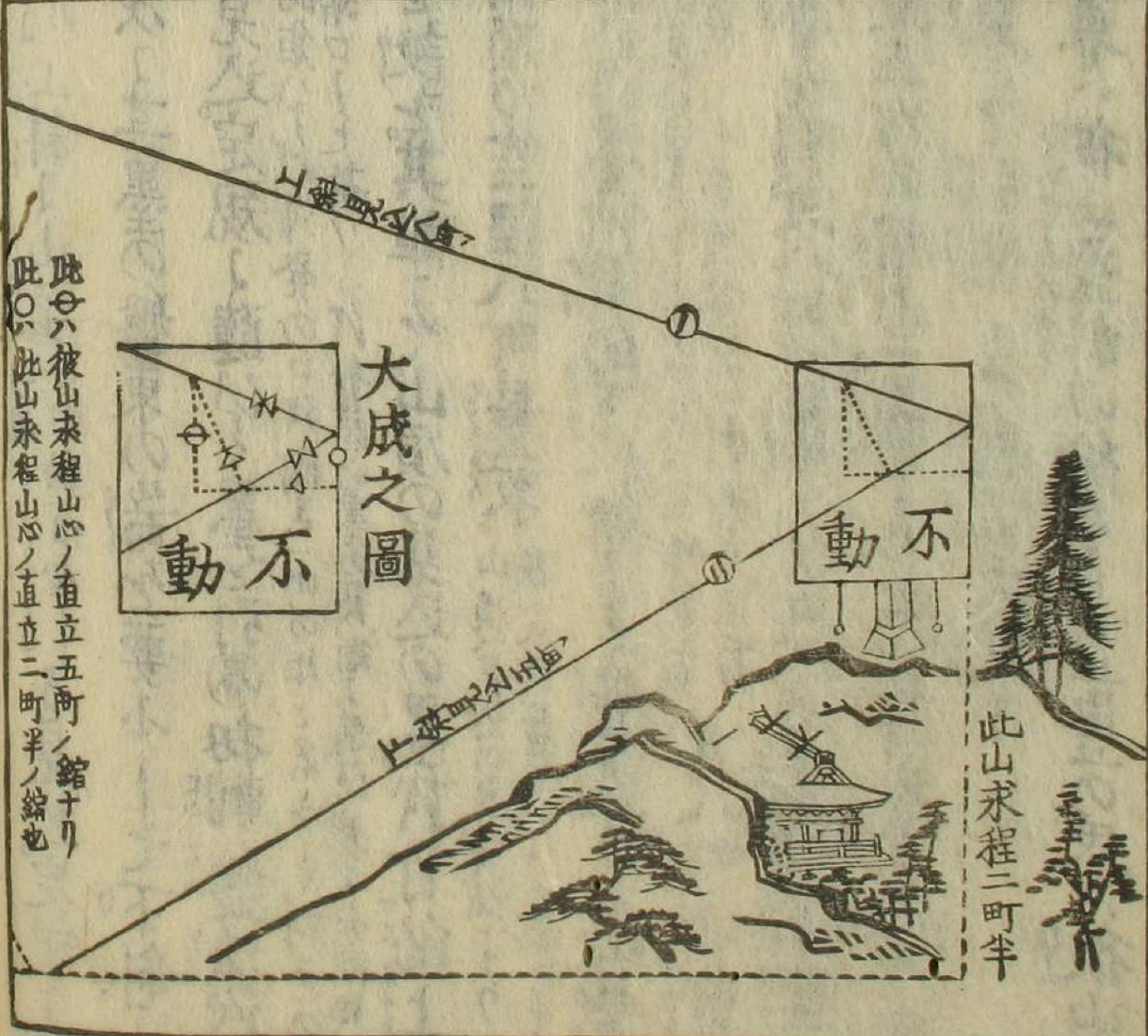
此術ハ此方の山上ニ處して。彼山心直立乃高程と。此山心直立の高程と。一同ニ量知ニ用ゆるべき。彼此乃高下を一術ニ量る法なり（此術ハまづ。遠近術を兩度勤めて。山頂山麓の空徑をまづ量り。次ニ其座ニて高深術を勤む。前中後三術をわかく。全く量知る法なり）

術云（下ニ図ある所ニてかく云）まづ本座より㊀初目的上の遠近術を勤めて。彼山頂まで空徑の町數を量るに八町あり。（其作法委く別巻ニ記せり。故ニ爰ニ不載）

㊥ゆゑ其座より目的下の遠近術を勤めて。此山麓まで空徑の町數を量るに五町有り。（其作法委く別巻ニ記せり。故ニ爰ニ不載）此兩空徑の町數をもつて本術の種とす。（右ニいふ取ハ。兩空径の町数を量り得るまでの法ニして。別用あるべし。故ニ八町と五町を得てのちハ。此盤をハ不用）

㊦扨高深術作法の如く㊀本座ニ（此本座ハ前術を勤むる座を用ゆ）盤を直立ニ居（盤北を上とし盤南を下として居る事。徃て前ニいふがごとし）定規ニ針を刺。盤東より盤乾を會ニ（盤乾を會ニ付るハ深高とおなじ）あつく上斜ニ山頂（小目的有るべし）を見込。定規ニ隨ひて墨を引㊁次ニ其墨の盤東の端を要として下斜ニ山麓（小目的有べし）を見込。定規ニ隨ひて墨を引㊂扨剸盤法をもつて。新ニ分間の矩（此矩ハまづ渾発の口を開き。一町の矩と名づく。何れの矩縮口をも拘りなし。盤面の墨の長短ニ随ひ。新ニ分間を制せ。委しくハ図によりて考合すべし）を設き。其矩にて山頂の見込の墨を目的上の術ニて量置する。山頂の空徑八町量取。（山頂へ見込の墨を此より彼へ八町量取なり。然して其残余とすべし剸捨て不用）又山麓の見込の墨を目的下の術ニて量置する。山麓の空徑五町量取（山麓へ見込の墨をと。上より下へ五町量取なり。然して其残余をハ剸捨て不用）其八町の留より五町の留へ斜ニ界を引。又八町の留より五町の留れ正横まで正竪ニ界を引。又五町の留乃正横より右ハ盤東の端左ハ八町の留の正下まで界を引。然して盤面大成さと今現れたる所の上斜の界ハ彼山登斜の縮なり。正竪の界ハ彼山

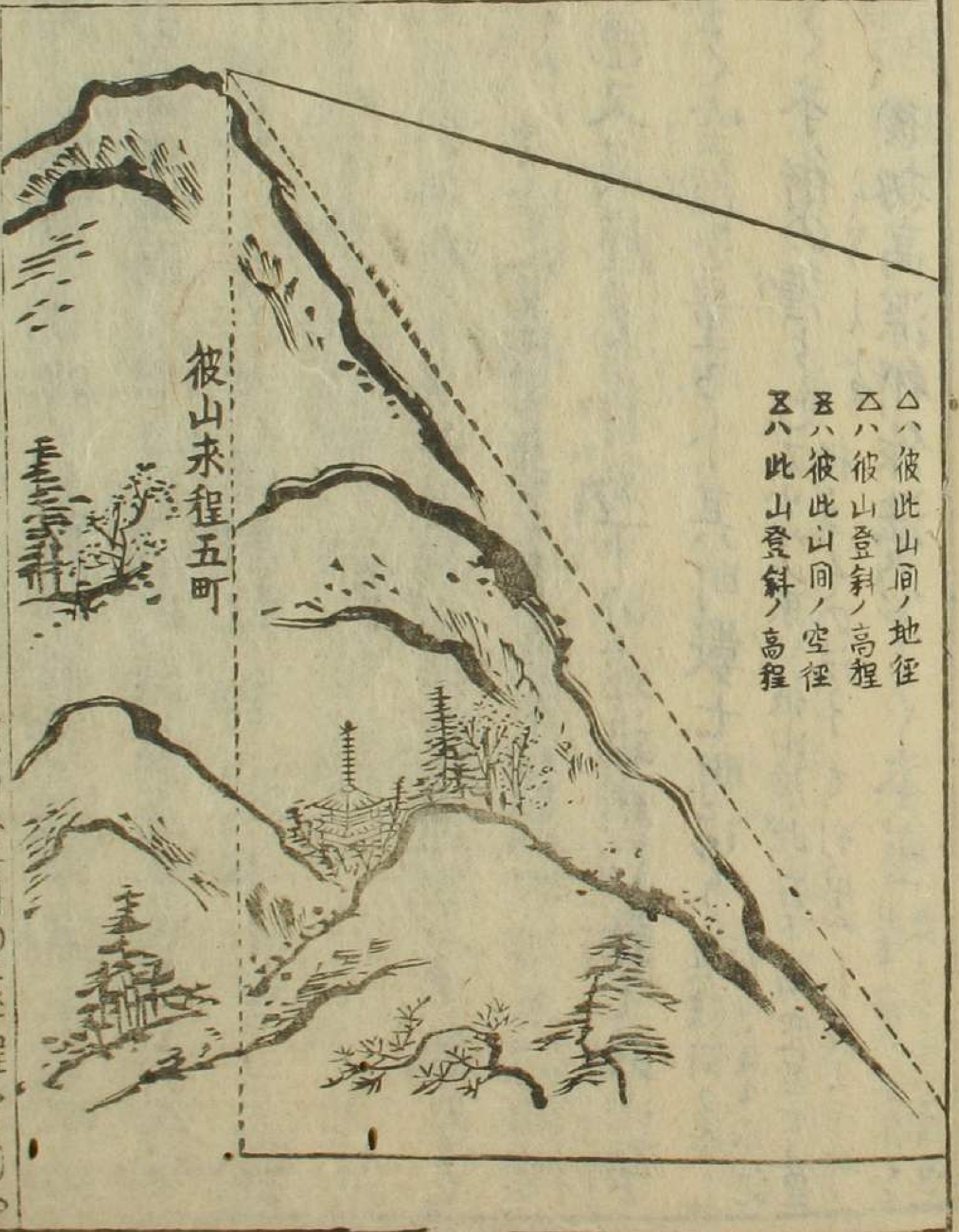
来程山心直立の高程の縮なり。正横の界ハ彼此山間の地径なり。又短竪立の墨盤東の中かと短き竪の墨ハ此山来程山心直立の高程の縮なり。上斜の墨ハ彼山空径の縮なり。下斜の墨ハ此山登斜の縮なり。扨其上斜と下斜との墨を八町と五町と量取たる矩をもて正竪の界を量るに五夾有り。






一夾一町 五夾ハすなはち五町なり是彼山来程彼山心の直立の町数なり。又其矩をもて短竪の界を量るに一夾半なり。二夾半ハ即二町半なり。これ此山来程此山心の直立の町数なり

或ハまた其矩をもて上斜の界を量れハ彼山登斜の遠程なり。正横の界を量れハ此山より彼山心まで地径なり。上斜の墨を量れハ此山頂より彼山頂まで空径なり。下斜の墨を量れハ此山登斜の遠程なり。此術小事にも盤尺をも加入して量るべし。小差を捨れハ大差となるものなり。



## 山谷數知方

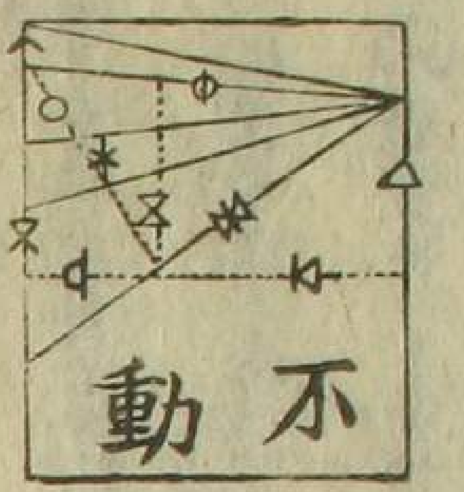
此術ハ此山の山頂に居て彼山の高程と登斜と地徑と又此山の高程と登斜と地徑と又彼山絶頂の樹の丈と彼山半腹の堂の高と又兩山間の谷心の深程となど九種唯一術をもつて量知るに用ゆ其法粗前術兩山同知方に同じ摘て審にすべし今九種を量る法を云十種二十種を量るも同事なり

術云下に図する所をもつて云まづ本座より㊀初目的上の遠近術を勤めて彼山頂頂の樹の根を目的と為るなりまづ空徑を量るに其町數八町なり其作法委しく別巻にあり故に爰に其術を不贅㊀中又其座より目的下の遠近術を勤て此山梺下山梺下に小目的有とし。まづ空徑を量るに其町數七町なり其法前に委し故に爰に不記此兩空徑をもつて本術の種とす右にいふ兩ハ彼山頂此梺下の両空徑を量り得るまでの法にて別用なし故に八町と七町との両徑を得るのみ此盤面などハ不用㊀後扨高深術作法のごとく本座此本座ハ前術を勤る座を用ゆ

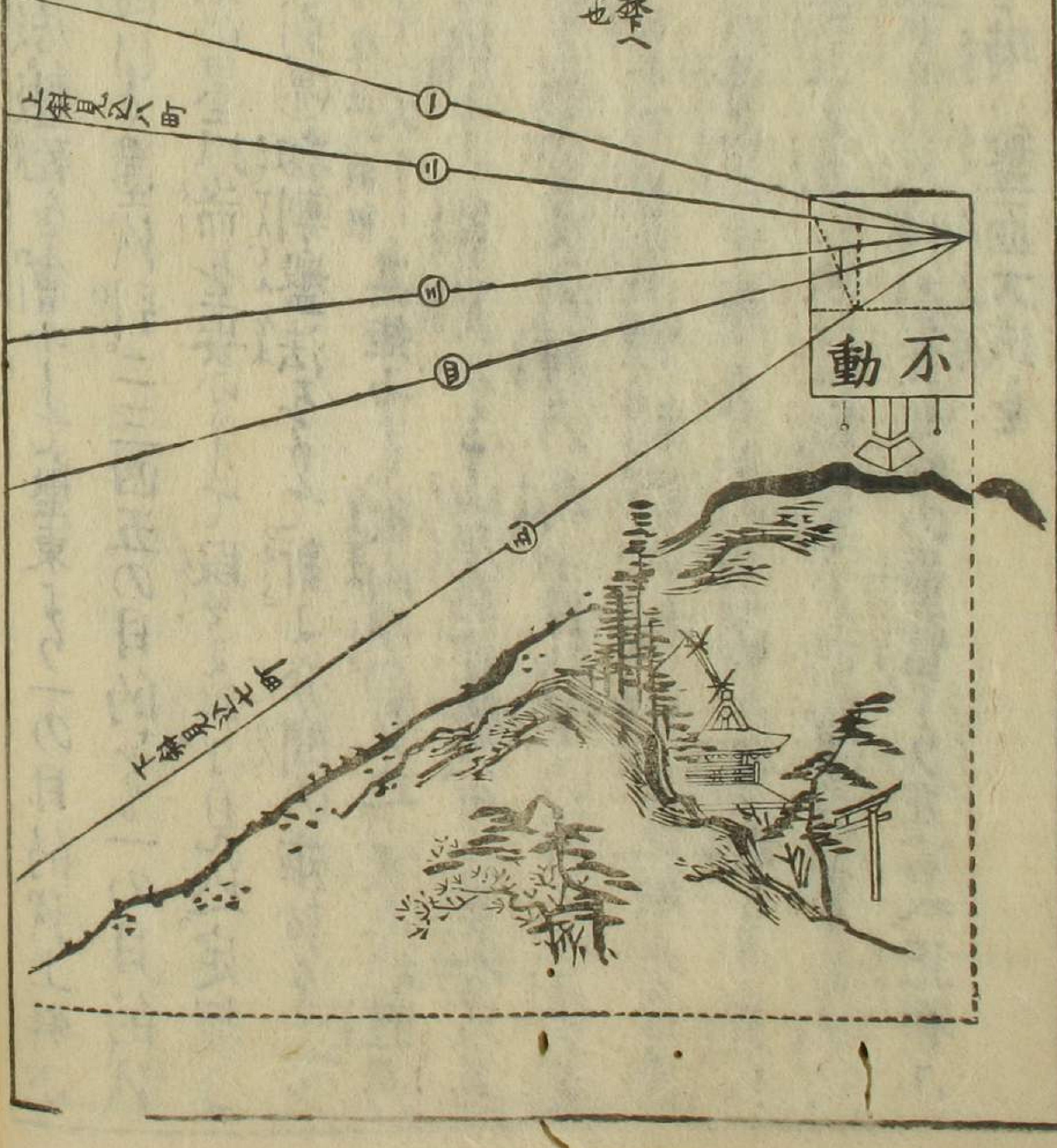


に盤を直立に居盤乾を會して盤東より一の目的を上斜に見込定規に随ひて墨を引二三四五の目的をも一の目的を見込なる。盤東の墨れ節を要にして段々に斜に見込定規に随ひて墨を引㊀界扨塼盤法をもつて新に分間の矩をふき。新に矩を制するの作法ハ前術兩山同知方に記すがごとし其矩のごとく彼山頂の見込の墨を種乃為に目的上の術のごとく量置ける山頂の空徑八町に量合又其矩のごとく山梺下の見込の墨を種乃為に目的下の術にて量置ける山梺下の空徑七町量取。量合と量取と別意あること前にあらはす其八町の墨乃留より其七町の量留へ中斜に界を引又七町の量留より天へ二の墨まで正竪に界を引又斜の界と四れ墨の會より天へ三の墨まで正竪に界を引又七町の量留より左右へ正横に界を引然する時ハ盤面大成を

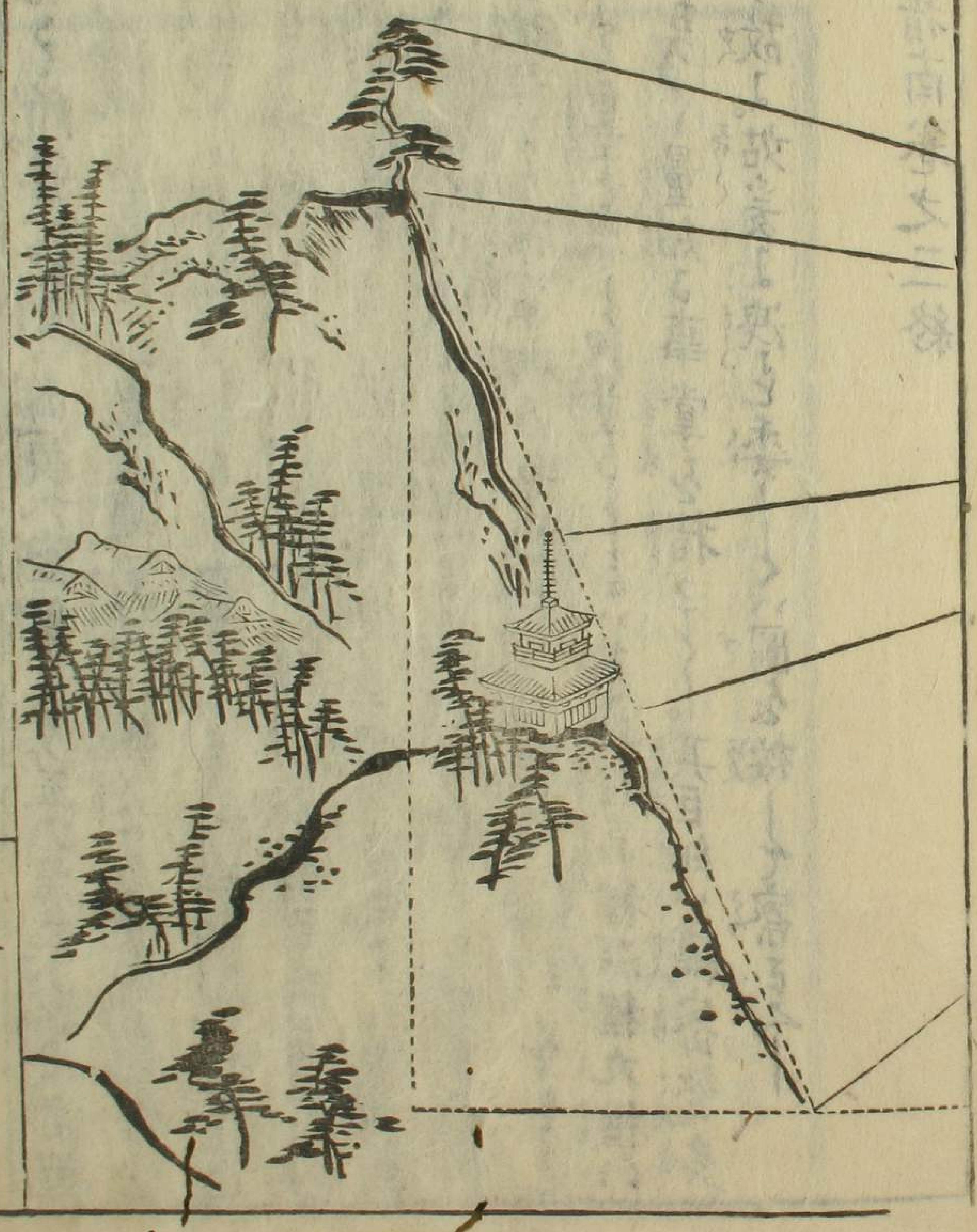
# 大戚之圖




⊖ハ山頂ヘ空径也呂ハ山麓ヘ空径也二法ハ種ニメ假借也
ヘハ山頂ノ樹太也
ㄨハ彼山ノ直立也
△ノ此山ノ直立也
○ハ彼山ノ登斜也
ㄨハ中谷ノ直立也
メハ半腰ノ堂夫也
ㄨハ此山ノ地径也
ロハ彼山ノ地径也
ㄨハ此山ノ登斜也
以上九種ヒ二種子ノ尺数ヲ量タル矩ヲ以テ量知ルナリ





今現る所の二の墨ハ山頂へ空徑なり。五の墨ハ山麓へ空徑なり。(又此山の登斜を用るなり)一二の墨ハ間ハ山頂の樹丈なり。盤西乃墨(横界より天へ斜界の留まで)ハ彼山の置立なり。盤東の墨(盤東の要より北へ横界まで)ハ此山の直立なり。中斜の界(八町の留より七町の留へ引る斜界)ハ彼山の登斜なり。正竪乃界ハ間谷の直立なり。三四の墨ハ間ハ半腹の堂丈なり。横界の會より盤東の方ハ此山の地徑なり。横界の會より盤西の方ハ彼山の地徑なり。扨家初乃矩(家初ニ二の墨を八町ニ量合せ。五の墨ハ七町量取る矩なり)をもつて現する墨と界とを量るときハ其遠程高程深程九種の求程おのおの量知る事掌を指がごとし。其巨細ハ纖密繁多なるが故ニ。姑爰ニ洩ことを委しくハ圖を按して察すべし

量地指南卷之三終


平安書林 橘枝堂藏板目録

京二條通富小路西ヘ入町 野田藤八

- 古語拾遺言餘抄 五冊
- 神武巻集解 二冊
- 本朝續紹運録 一冊
- 前王廟陵記 二冊
- 同増補 二冊
- 諸家大系圖 十冊
- 本朝紹運録 一冊
- 正續疑孟 司馬温公 一冊
- 用薬須知 松岡玄達著 三冊
- 同後編 同 四冊
- 同續編 同 三冊
- 廣參品 同 小本 一冊
- 怡顔齋介品 同 二冊
- 食療正要 同 四冊
- 笑話出思録 藤野東甫著 一冊
- 陶淵明全集 昭明太子撰 四冊
- 絵本[illegible] 弐冊
- 同 [illegible] 三冊
- 同 [illegible] 二冊
- 百家百人一首 小本 一冊
- 女文要袖硯 [illegible] 一冊
- 婦人世宝袋 [illegible] 二冊
- 市井雑談 [illegible] 三冊
- [illegible] 一冊

勸學正論 長門鶴汀集 二冊
古訓輯要 同 三冊
名義集覽 同 四冊
量地指南 村井昌弘著 町見之法去三冊
京繪圖 懐中一枚摺 一冊
同道法附 彩色 一冊
同増補新板 本同 一冊
秋風録 徂来翁書牘文 並野東甫著 二冊
五瓶同春發揮 四冊

訓幼字義 東涯先生著 八冊
孝經頭書 新板 一冊
語録字義 一冊
菅家文草 十二冊
和歌付合小鏡 小本一冊
同名寄小鏡 小本一冊
同はま衣拾葉集 四季名寄 古今 二冊
同竹園抄 為家卿作 京のよき方物 傳 一冊
反古文庫 俳諧 近世之名家 文冊

万世用文章 玉手流 手本 一冊
滕王閣 歐陽詢石刻 一冊
雲麾將軍 李邕石刻 一冊
海燕帖 董其昌石刻 一冊
勸善櫻姫傳 五冊
風俗諸人氣質 絵入 文冊
日用食性 ひろき 小本 一冊
俳諧隠れ御伽 ばなし 小本一冊
俳諧集藏 五 並ぶ 粉石 [illegible]

四書 正佐點 十冊
古文後集 同 四冊
梅花堂中指南 五冊
同新版 五冊
古易一家言 新井白蛾著 小刻一冊
同補 同 一冊
易術便蒙 片岡如圭著 小刻一冊
易話 同 一冊
筆道如意珠 一冊

言葉集 今川了俊著 七冊
通齋習書全集 五冊
同初學指南抄 二冊
伊勢拾穗抄 二冊
年中行事歌合 二冊
發東指掌圖 一枚摺
堀川艶書合 三冊
連歌雨夜の記 宗長著 小本一冊
職人歌合 三冊

興慶婦宿山 絵入 五冊
風流茶人氣質 同 五冊
向不見闇れ筋 同 五冊
風流動進能 同 五冊
俄仙人戯言日記 同 五冊
江戸紫苦嫋 同 五冊
遲山駒さらへ 同 五冊
鎌倉諸藝袖日記 同 五冊
一目千軒 新板 一冊

| | | |
|---|---|---|
| 三因方 陳玄無著 十二冊 | 寺澤四季往来 一冊 | 同女子手本 一冊 |
| 新語園 了意著 十冊 | 同 初學往来 一冊 | 同 不求人 一冊 |
| 量地指南増補 附録 三冊 | 鶴皐遺稿 若加 小栗玄惟著 三冊 | 同 新書學 一冊 |
| 同後編 近刊 五冊 | 尺牘集要 四冊 | 世諺辨畧 四冊 |
| 四書 道春點 十冊 | 千金方藥註 松宮定菴著 四冊 | 本艸正譌 君山著 六冊 |
| 菅家萬葉集 二冊 | 本艸正正譌 一冊 | 同 刊誤 同 一冊 |
| 元亨釋書和解 惠空著 廿三冊 | 古易斷時言 新井白蛾著 四冊 | 茶道全書 五冊 |
| 病名彙解 六冊 | 周易一生記 五冊 | 茶雪月集 三冊 |
| 十四經和語抄 岡本抱子 五冊 | 易術手引艸 小刻一冊 | 東山殿香合 二冊 |

南勢蘇道村井昌弘先生述作

橘枝堂版行目録

| | | | |
|---|---|---|---|
| 量地指南 町間見様之書 前編三冊 後編五冊 | 出来 | 單騎要略 三十六巻之内 | 出来 |
| 武林字藪 五冊 | 近日出来 | 被甲辨 五冊 | 出来 |
| 八陣合攷 三冊 | 未刻 | 家業辨 七冊 | 近日出来 |
| 武門圖會 五冊 | 未刻 | 輕卒辨 四冊 | 未刻 |
| 武學先入 三冊 | 未刻 | 兵格辨 二冊 | 未刻 |
| 神武迪精 十冊 | 未刻 | 製作辨 五冊 | 未刻 |
| 伊勢治亂記 十二冊 | 未刻 | 成功辨 十三冊 | 未刻 |
| 神武迪精標題 一冊 | 出来 | | |

享保十八癸丑年夏六月望日

京都 野田彌兵衛庸春

同 野田藤八郎長昌 全刻

江戸 野田太兵衛量久